

平成 10 年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

横 間 栗 遺 跡

1999

埼玉県熊谷市教育委員会

平成 10 年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

横 間 栗 遺 跡

1999

埼玉県熊谷市教育委員会



第2号再葬墓出土状态



第2号再葬墓出土土器

序

私たちの郷土、熊谷市には、私たちの祖先が営々と築いてきた、文化の証である埋蔵文化財を始めとする貴重な文化財が豊かに保存・伝承されてきております。こうした文化財は、地域の歴史・文化を今日に伝えるばかりでなく、地域の個性の一部とも言うべきものであり、今日における熊谷市の発展やその過程を雄弁に物語っていると申せましょう。ともすると、私たちは安全で快適な生活の実現に性急なあまり、私たちを育んできた地域の文化遺産のありがたさを見失いがちですが、私たちは、地域全体でこうした文化遺産を継承し、次世代へと伝え、さらに豊かな熊谷市の形成のための礎としていかなければならないと考えているところでございます。

さて、横間栗遺跡は熊谷市大字西別府字横間栗に所在する縄文時代から中世にかけて生活が営まれた複合遺跡として知られておりましたが、熊谷市は、同地に所在する衛生センターを拡張して、より安全でごみ処理能力の高い施設の建設を計画いたしました。そこで、熊谷市教育委員会では関係機関等と遺跡の保護・保存方法につき慎重に協議を重ねてまいりましたが、施設の性格上、記録保存の措置もやむを得ないとの結論に達し、急遽発掘調査を実施いたしましたところでございます。

本書は、昭和62年1～3月（第1次調査）及び同年7～11月（第2次調査）に実施された発掘調査の成果をまとめたものでございますが、中でも弥生時代の再葬墓という墓制が正式の発掘調査で13基もまとまって発見された例は県内にはなく、非常に重要な成果として注目されているところでございます。

本書を、埋蔵文化財の保護に関する資料として、また学術研究の基礎資料、あるいは学校教育や社会教育の参考資料として広くご活用いただければ幸いに存じます。

最後になりましたが、発掘調査から本書の刊行にいたるまでご指導、ご協力をいただきました埼玉県教育局生涯学習部文化財保護課をはじめ、熊谷市環境部衛生センター、並びに地元関係者各位に厚くお礼申し上げます。

平成11年3月

熊谷市教育委員会
教育長 飯塚 誠一郎

例 言

- 1 本書は、埼玉県熊谷市大字西別府字横間栗618-1他に所在する横間栗遺跡（第1次調査・第2次調査）の発掘調査報告書である。
- 2 文化庁指示通知は昭和62年5月29日付け62委保記第2-1090号（第1次調査）、昭和62年9月28日付け62委保記第2-2768号（第2次調査）である。
- 3 発掘調査は、衛生センター拡張工事に伴う事前調査であり、熊谷市教育委員会が実施した。
- 4 本事業の組織は1章のとおりである。
- 5 発掘調査期間は昭和62年1月19日から3月9日（第1次調査）、及び昭和62年7月7日から11月10日（第2次調査）である。

整理・報告書作成作業期間は平成9年4月1日から平成11年3月31日である。

- 6 発掘調査は寺社下博（第1次調査）、金子正之（第2次調査）、整理・報告書作成作業は鈴木敏昭がそれぞれ担当し、社会教育課職員の支援を受けた。
- 7 発掘調査における写真撮影は寺社下・金子が行い、遺物の写真撮影は大屋道則・鈴木が行った。
- 8 出土品の整理及び図版の作成は、金子、秋本太郎、馬場初枝、岩瀬悦子の協力を得て鈴木が行った。
石器の石質鑑定については西井幸雄の御教示を得た。
- 9 本書の執筆はI・III章を金子、石器に関する部分を秋本が分担し、その他の部分及び全体の加除筆を鈴木が行った。また、遺構に関しては金子の調査時の所見をもとに鈴木が聞き取った。
- 10 出土人骨及び歯に関して、設楽博己・松村博文の両氏から玉稿を賜ったので付篇として掲載した。
- 11 本書の編集は鈴木があたった。
- 12 本書にかかる資料は熊谷市教育委員会が保管する。
- 13 本書の作成にあたり、下記の方々及び機関等からご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表します。

（敬称略、五十音順）

石岡憲雄 大屋道則 奥野麦生 書上元博 金子直行 小林康男 塩野 博 関 義則 富田和夫

西井幸雄 坂野和信 細田 勝 増田逸朗 柳田敏司 横川好富

埼玉県文化財保護課 埼玉県立埋蔵文化財センター （財）埼玉県埋蔵文化財調査事業団

凡 例

本書における挿図指示は次のとおりである。

- 1 遺構の表記記号は、次のとおりである。

再…再葬墓 S J…住居跡 S K…土坑 S D…溝跡 P…ピット

- 2 各遺構の番号は、発掘調査時に付したものを原則として用いたが、一部、遺構名・遺構番号を整理作業の段階で変更したものや欠番としたものがある。

- 3 遺構挿図の縮尺は、原則として、次のとおりである。

遺構全測図…1/800 竪穴住居跡…1/60 再葬墓…1/20 土坑…1/60 溝…1/200

- 4 遺構図中の斜線スクリーン・トーンは地山を示す。

- 5 遺物挿図の縮尺は、原則として、次のとおりである。

土器1/3・1/4 石器2/3・1/3

目 次

口絵
序
例言
凡例
目次

I 発掘調査の概要	1	IV 遺構と遺物	8
1 調査に至る経過	1	1 再葬墓	8
2 発掘調査・報告書作成の経過	1	2 土坑	21
3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織	2	3 住居跡	25
II 遺跡の立地と環境	3	4 溝	26
III 遺跡の概要	8	5 遺構外遺物	27
1 調査の方法	8	V 調査のまとめ	90
2 検出された遺構と遺物	8	付篇 横間栗遺跡出土人骨	92

挿図目次

第1図 埼玉県 の地形図	2	第16図 再葬墓出土土器(6)	43
第2図 横間栗遺跡周辺の関係遺跡	4	第17図 再葬墓出土土器(7)	44
第3図 横間栗遺跡周辺の地形	9	第18図 再葬墓出土土器(8)	45
第4図 横間栗遺跡調査区全体図	10	第19図 再葬墓出土土器(9)	46
第5図 再葬墓集中地区拡大図	11	第20図 再葬墓出土土器(10)	47
第6図 第1号・第2号再葬墓	33	第21図 再葬墓出土土器(11)	48
第7図 第3～6・11号再葬墓	34	第22図 再葬墓出土土器の条痕(1)	49
第8図 第7・8号再葬墓	35	第23図 再葬墓出土土器の条痕(2)	50
第9図 第9・10・12号再葬墓	36	第24図 再葬墓出土土器の条痕(3)	51
第10図 第13号再葬墓	37	第25図 再葬墓出土土器の条痕(4)	52
第11図 再葬墓出土土器(1)	38	第26図 再葬墓出土土器の展開模式図	53
第12図 再葬墓出土土器(2)	39	第27図 土坑(1)	54
第13図 再葬墓出土土器(3)	40	第28図 土坑(2)	55
第14図 再葬墓出土土器(4)	41	第29図 土坑(3)	56
第15図 再葬墓出土土器(5)	42	第30図 土坑(4)	57

第31図	土坑出土土器	58	第48図	遺構外出土土器(9)	75
第32図	再葬墓及び土坑出土土器	59	第49図	遺構外出土土器(10)	76
第33図	第1号住居跡と出土土器	60	第50図	遺構外出土土器(11)	77
第34図	第1号住居跡出土遺物	61	第51図	遺構外出土土器(12)	78
第35図	第2号住居跡と出土遺物	62	第52図	遺構外出土土器(1)	79
第36図	溝(1)	63	第53図	遺構外出土土器(2)	80
第37図	溝(2)	64	第54図	遺構外出土土器(3)	81
第38図	溝(3)	65	第55図	遺構外出土土器(4)	82
第39図	溝断面図	66	第56図	遺構外出土土器(5)	83
第40図	遺構外出土土器(1)	67	第57図	遺構外出土土器(6)	84
第41図	遺構外出土土器(2)	68	第58図	遺構外出土土器(7)	85
第42図	遺構外出土土器(3)	69	第59図	遺構外出土土器(8)	86
第43図	遺構外出土土器(4)	70	第60図	遺構外出土土器(9)	87
第44図	遺構外出土土器(5)	71	第61図	遺構外出土土器(10)	88
第45図	遺構外出土土器(6)	72	第62図	打製石斧形態図	92
第46図	遺構外出土土器(7)	73	第63図	第1号再葬墓人骨出土状態(復元図)	94
第47図	遺構外出土土器(8)	74			

表目次

第1表	石器観察表	88
-----	-------	----

図版目次

図版1	再葬墓集中地区全景(南方より)	図版7	第12号再葬墓
図版2	第1号再葬墓(1)・(2) 第1号再葬墓内人骨		第13号再葬墓(1)・(2)
図版3	第2号再葬墓(1)・(2) 第3号再葬墓	図版8	第2号土坑・第3号土坑・第5号土坑 第6号土坑・第8号土坑・第9号土坑 第10号土坑・第11号土坑
図版4	第4号再葬墓・第5号再葬墓 第6号再葬墓	図版9	第12・13・26～29・41号土坑 第15号土坑・第16号土坑 第17号土坑・第20号土坑・第2号溝 第21・22号土坑・第30～32・49号土坑 第35・43号土坑
図版5	第7号再葬墓 第8号再葬墓(1)・(2)	図版10	第36号土坑・第37号土坑
図版6	第9号再葬墓・第10号再葬墓 第11号再葬墓		

- 第38号土坑・第39号土坑
第40号土坑・第42・79号土坑
第44～47号土坑・第48・58号土坑
図版11 第50号土坑・第51号土坑
第2・3・5・7号再葬墓
第52・63～67号土坑・第53号土坑
第54～57・59号土坑・第68・69号土坑
第9・10号再葬墓
第70～72・75～78号土坑
第73・74号土坑
図版12 第79号土坑・第1号住居跡
第2号住居跡・溝集中区遠景・第1号溝
第2号溝・第3A号溝・第5号溝
図版13 第6号溝(1)・(2)
第6・11・12号溝・第16～19号溝
第1号再葬墓出土土器(第11図1)
第1号再葬墓出土土器(第11図2)
図版14 第2号再葬墓出土土器(第12図3)
第2号再葬墓出土土器(第12図4)
第2号再葬墓出土土器(第13図5)
第2号再葬墓出土土器(第13図6)
図版15 第3号再葬墓出土土器(第14図7)
第3号再葬墓出土土器(第14図8)
第3号再葬墓出土土器(第14図9)
第3号再葬墓出土土器(第14図10)
図版16 第4号再葬墓出土土器(第14図11)
第5号再葬墓出土土器(第15図12)
第6号再葬墓出土土器(第15図13)
第7号再葬墓出土土器(第16図14)
第11号再葬墓出土土器(第19図26)
図版17 第8号再葬墓出土土器(第17図15)
第8号再葬墓出土土器(第17図16)
第8号再葬墓出土土器(第17図17)
第8号再葬墓出土土器(第17図18)
第8号再葬墓出土土器(第17図19)
図版18 第9号再葬墓出土土器(第18図20)
第9号再葬墓出土土器(第18図21)
第9号再葬墓出土土器(第18図22)
第9号再葬墓出土土器(第18図23)
第13号再葬墓出土土器(第21図31)
図版19 第10号再葬墓出土土器(第16図24)
第10号再葬墓出土土器(第16図25)
第12号再葬墓出土土器(第19図27)
第13号再葬墓出土土器(第20図28)
図版20 第13号再葬墓出土土器(第21図29)
第13号再葬墓出土土器(第21図30)
再葬墓出土石器(第32図1～9)
図版21 第37号土坑出土土器(第31図5)
第79号土坑出土土器(第31図17)
土坑出土石器(第32図10～17)
図版22 遺構外出土土器(1)・(2)・(3)
図版23 遺構外出土土器(4)・(5)・(6)
図版24 遺構外出土土器(7)・(8)・(9)
図版25 遺構外出土土器(10)・(11)・(12)
図版26 遺構外出土土器(第51図1)
遺構外出土土器(第51図2)
初圧痕のある土器(第31図17)
図版27 遺構外出土石器(1)・(2)・(3)
図版28 遺構外出土石器(4)・(5)・(6)
図版29 遺構外出土石器(7)・(8)
遺構外出土玉類
図版30 第1号再葬墓壺内人骨
第6号再葬墓出土白歯
第12号再葬墓出土白歯

I 発掘調査の概要

1 調査に至る経過

熊谷市環境部から熊谷市教育委員会あてに、市内西別府字横間栗に所在する衛生センターの拡張予定地内について埋蔵文化財の所在の有無及びその取扱いについての照会が昭和61年7月30日付けであった。熊谷市教育委員会は、当該地は埋蔵文化財が所在する可能性の高い地域であり、試掘調査を実施する必要がある旨の回答を行った。その後、環境部から昭和61年11月7日付けで熊谷市長名の試掘調査依頼を受け、教育委員会は速やかに試掘調査を実施した。その結果、埋蔵文化財の所在が確認されたので、その旨を環境部へ回答するとともに、現状保存の可能性をも含めた保存に関する協議を重ねた。しかし、事業の性格等から一部地域については記録保存の措置もやむを得ないとの結論に達し、発掘調査の実施が具体的に計画された。

発掘調査は、熊谷市教育委員会が昭和61年度末から62年度の前半にかけて実施をするということで双方が合意し、熊谷市長から文化財保護法第57条の3第1項に基づく発掘通知が、熊谷市教育委員会教育長からは文化財保護法第98条の2第1項に基づく発掘通知がそれぞれ文化庁長官あて提出された。こうして第1次調査が昭和62年1月19日から開始された。また、昭和62年度の第2次調査は昭和62年7月7日から開始されたが、文化庁に対しての通知等は第1次調査の手順同様である。なお、文化庁からの指示通知は、昭和62年5月29日付け62委保記第2-1090号（第1次調査）、昭和62年9月28日付け62委保記第2-2768号（第2次調査）であった。

2 発掘調査・報告書作成の経過

第1次調査は、建造物の建設予定地である5カ所の調査区の発掘を行った。1区はH～Nグリッドの19～24区、2区はQ～Rグリッドの21・22区、3区はU～Vグリッドの21・22区、4区はU～Wグリッドの17・18区、5区はS～Zグリッドの13・14区であった。第2次調査は、本体工事範囲以外は盛土工法により工事を行う計画であるので、本体工事範囲のうち第1次調査で実施しなかった場所を調査対象とした。

第1次調査は、昭和62年1月19日に開始し3月9日に終了、第2次調査は昭和62年7月7日に開始し11月10日に終了した。

整理・報告書作成作業は平成9年度から開始し、遺物の洗浄・注記・復元・拓本取り、遺構の図面整理等を行い、平成10年度には遺物の実測・写真撮影、遺構の最終的な図面整理、遺構・遺物図面のトレース、遺構図・遺物図版組、原稿執筆、割付をして、平成11年2月上旬に印刷業者を決定した。その後、2～3月の校正を経て本書の印刷を完了し、報告書を刊行した。

3 発掘調査、整理・報告書刊行の組織

主体者 熊谷市教育委員会

(1) 発掘調査（昭和61・62年度）

教育長 関根幸夫

社会教育課長 茂木 優

課長補佐 高田普通

係長 北 俊明

主査 山川 建（S61年度）

主任 森田博明（S62年度）

主任 平井加余子（S62年度）

主任 寺社下博（S61年度）

主任 金子正之

主任 米澤ひろみ

(2) 整理事業（平成9・10年度）

教育長 岡嶋一夫（H10.10.6まで）

飯塚誠一郎（H10.10.9より）

教育次長 田島三雄（H9年度）

坂巻 篤（H10年度）

社会教育課長 大島常雄（H9年度）

氏家保男（H10年度）

副参事 鈴木敏昭

課長補佐 翠田晴夫（H9年度）

北 俊明（H9年度は主幹）

主幹(兼)係長 金子正之（H9年度は係長）

主任 寺社下博（H10年度）

主任 渡邊 操

主任 権田宣行（H9年度）

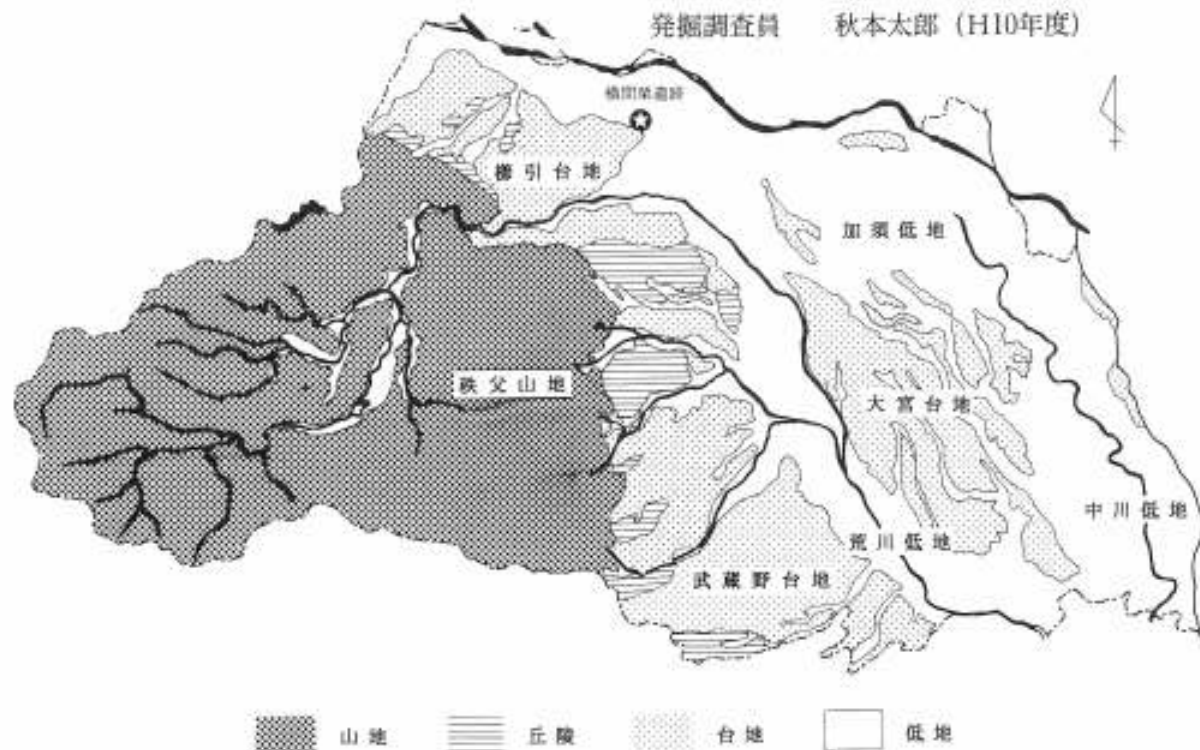
主任 吉野 健

主事 松田 哲（H10年度）

発掘調査員 佐々木健策（H10年度）

発掘調査員 市川康弘（H10年度）

発掘調査員 秋本太郎（H10年度）



第1図 埼玉県地形図

II 遺跡の立地と環境

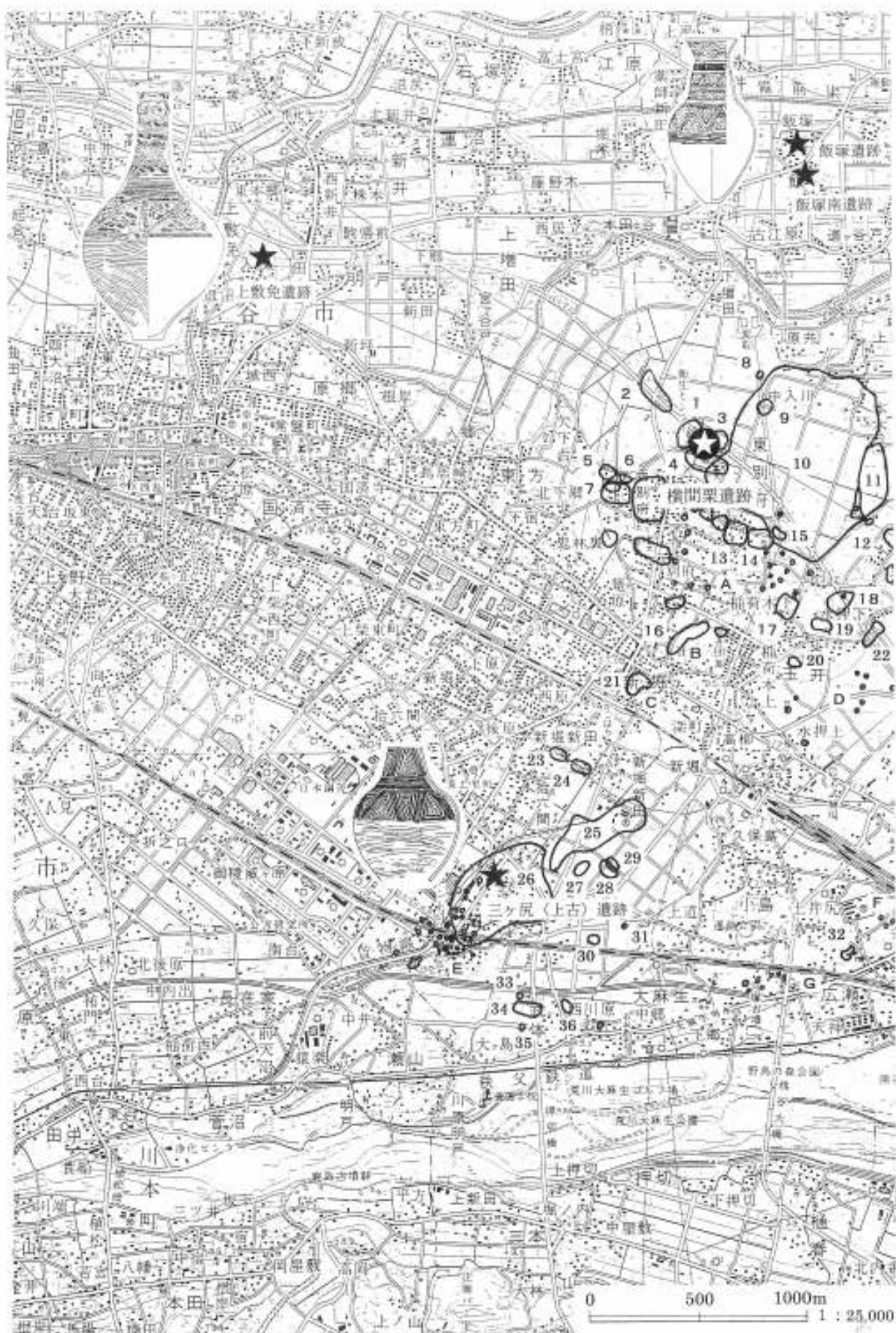
横間栗遺跡は、熊谷市大字西別府字横間栗地内に所在し、J R 龍原駅の北北東約 2.6 km に位置する。遺跡内には国道 17 号（深谷バイパス）が概ね北西から東南東方向へと横切っており、調査区はその南側に隣接する。地形的には、熊谷市域の北西部にあたる櫛引台地の北東端下の自然堤防上に立地する。大局的に見れば、櫛引台地と妻沼低地との境界付近に横間栗遺跡は展開していたと言えよう。櫛引台地は、寄居町波久礼付近を扇頂とする、洪積世に形成された荒川扇状地の左岸一帯の総称であるが、この扇端付近は同時に伏流水の湧水地点でもある。事実、古墳時代から奈良時代に至るまで水辺の祭祀が執り行われていたとされる西別府祭祀遺跡でもある湯殿神社裏には豊かな湧水地点があり、そこからの流れは横間栗遺跡の丁度南端付近で別府沼を形成している。

しかし、横間栗遺跡の立地環境は荒川のみで理解すべきではない。元々は群馬方面より現在の入間川へと南流していたとされる利根川をも考慮にいれるべきであろう。その後の関東造盆地運動による地盤の沈降や荒川、利根川等の度重なる河川氾濫の影響は、当時の景観を一変させ、今日見るような平坦な妻沼低地を現出するに至っているが、今後地道な復元研究が期待されるところである。ここでは、横間栗遺跡は荒川と利根川の丁度接点付近に立地していたらしいという事実を取り敢えず確認しておこうと思う。

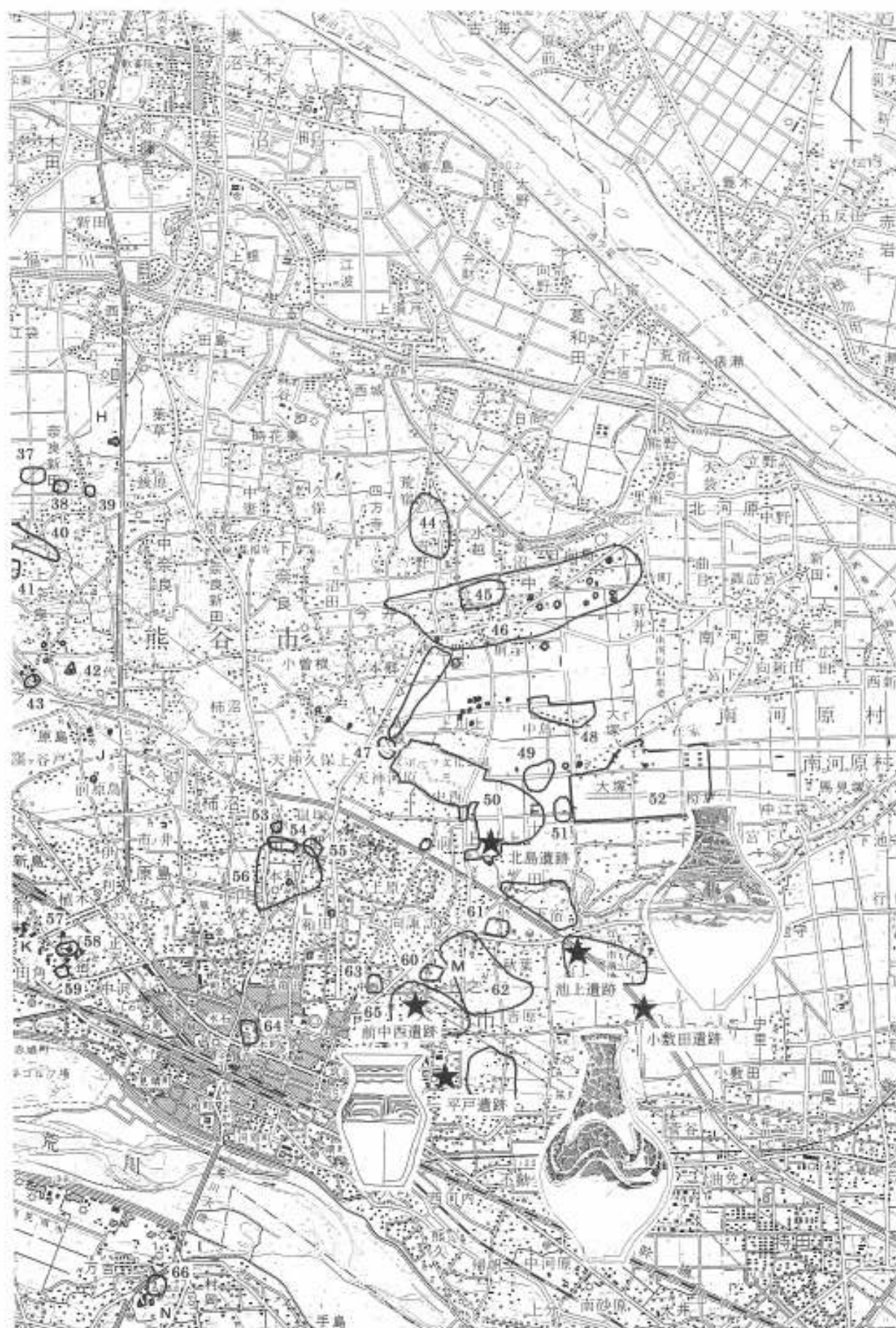
次に、本遺跡周辺の歴史的環境を概観する。

旧石器時代から縄文時代にかけての生活痕跡の情報は極めて少ない。旧石器時代では龍原裏遺跡発見の黒曜石で作られた尖頭器が唯一の例である。縄文時代に入ると、遺物量は若干増える。しかし、住居跡などの遺構に伴って出土したものは少ない。昭和 38 年刊行の『熊谷市史』段階では、市内の縄文時代遺跡は 8 箇所確認されており、三尻発見の曾谷式、上之発見の安行式土器 5 片などや、磨製石斧、打製石斧等が図化紹介されていた。当時、熊谷で最も古いのは中期の加曾利 E 式土器であったことから、「当地方には前期末から居住をはじめ、後期に至って低地帯に進出したと見るべきで、このようにしておそらくは次の弥生式文化に引きつづいたであろう」と記されていた。しかし今日では、寺東遺跡発見の関山式土器や三ヶ尻（林）遺跡における前期黒浜式期の集落の発見などから、熊谷市の縄文時代は確実にさかのぼっている。近い将来には、現在空白となっている、旧石器時代から縄文時代前期の間の動向も明らかにされることであろう。なお、他の調査された遺跡としては、加曾利 E 式期の埋壺や集石土坑等を検出した万吉西浦遺跡や石田遺跡、三ヶ尻（天王）遺跡などの中期の遺跡、そして称名寺式期の埋壺を伴う土坑等が発見された寺東遺跡や後期の豊富な土器群の検出された入川遺跡や深町遺跡をあげることができる。横間栗遺跡からも後章で触れるように良好な加曾利 b 式土器群が発見されている。以上から、市内においては総じて縄文時代中期終末頃を境に、低地の自然堤防上への集落形成が促進され出したと見るができる。

その後の熊谷市内の縄文時代の遺跡・遺物に関する情報は前述の『熊谷市史』段階を越えない。しかし、それはひとり熊谷だけの問題ではなく県北地域全体にも窺える傾向でもあり、とりわけ縄文時代晩期終末から弥生時代前半にかけての情報は極端に少なくなっている。そうした中で、当横間栗遺跡の存在は極めて重要である。弥生時代前半の土器・石器の検出のみではなく、13 基の再葬墓の発見は当時の葬制を研究する上で貴重な調査例となった。概ね市内の同時期の遺跡としては他に、三ヶ尻（上古）遺跡、北島遺跡、平戸遺跡、前中西遺跡等をあげることができる。近隣では遠賀川式の壺を検出した深谷市上敷免遺跡、集



第2図 横間栗遺



跡周辺の関係道跡

落の確認された行田市池上遺跡、方形周溝墓の検出された同市小敷田遺跡、そして妻沼町の飯塚遺跡、飯塚南遺跡がよく知られている。所在地は地図上にマークしたので参照されたい（第2図）。熊谷周辺への該期遺跡の集中を読み取っていただければ幸いである。

古墳時代に入ると遺跡数はさらに増加する。立地も前代よりの傾向を引継ぎ、集落は台地上のみならず、低地の自然堤防上に次第に広がりを示す。前期の北島遺跡、横間栗遺跡、東沢遺跡、中期の常光院東遺跡、後期の天神遺跡等が自然堤防上の遺跡であり、後期の三ヶ尻（天王）遺跡等が台地上の遺跡に該当する。しかし、集落の実態としては古墳時代後期から営まれ、奈良或いは平安時代まで継続する規模の大きな遺跡が市内では目立つようにもなる。例えば、70軒以上の住居跡の検出された樋ノ上遺跡や50軒の住居跡が調査された上辻・下辻遺跡等がある。また、北島遺跡も7世紀から9世紀を中心に営まれた相当大規模な集落遺跡であることが判明しており、多数の住居跡とともに大規模な掘立柱建物跡や河川跡、古代の道路跡など、多様な遺構が検出されている。

また、市内には非常に数多くの古墳が存在する。別府古墳群、在家古墳群、籠原裏古墳群、玉井古墳群、三ヶ尻古墳群、坪井古墳群、広瀬古墳群、奈良古墳群、中条古墳群、原島古墳群、石原古墳群、肥塚古墳群、上之古墳群、村岡古墳群等々、実に多くの古墳を台地縁辺や低地の自然堤防上に見出すことができる。これらの中では、5世紀後半から末頃の築造と推定される奈良古墳群中の市指定史跡・横塚山古墳（前方後円墳）や中条古墳群中の鰐塚古墳・女塚1号墳（いずれも帆立貝形前方後円墳）等が調査され、とりわけ鰐塚古墳検出の須恵器の大型高杯形器台等（県指定文化財）による古墳祭祀や女塚1号墳からの盾持武人埴輪、鼓を抱えた人物埴輪の出土などが注目された。6世紀の古墳としては、広瀬古墳群中の国指定史跡・宮塚古墳の上円下方墳が良く知られている。三ヶ尻古墳群中の新ヶ谷戸1号墳は川原石使用の胴張型横穴式石室を有する円墳であり全貌が明らかにされた。7世紀では、籠原裏古墳群から八角形の墳形を持つ古墳が発掘調査され注目されている。終末期の古墳を考える上で看過できない成果の一つと思われる。

一方、集落遺跡外では、古墳時代後期から奈良時代を中心に営まれた湯殿神社裏の西別府祭祀遺跡をあげることができる。神社裏の湧水部分からは、土師器や須恵器に伴ない、馬形・橢形・勾玉形・剣形・有線円板形等の滑石製模造品が約160点検出されている。県内での類例は殆どなく、水辺祭祀の実態を理解する上で非常に貴重な資料群となっている。また、諏訪木遺跡からは河川を利用した祭祀の場と遺物が発見され注目されている。

西別府祭祀遺跡の南方には近接して、8世紀初頭（奈良時代）に創建された県内でも古い西別府廃寺が存在する。出土瓦から同廃寺は9世紀後半までは存続していたことが判明している。遺構としては、基壇跡や瓦溜り、溝跡などが確認された。先の西別府祭祀遺跡との有機的な関わりをも考慮に入れば、幡羅郡の郡寺的な機能を有していたのではないかとする見解も否定しがたい。いずれにしる相当有力な氏族の関与が想定されるところであろう。

平安時代後半から中世にかけての遺跡は、武蔵七党やその他の在地武士団の活躍の華やかさとは裏腹に、なかなかその実態が把握できない。城館跡では、西別府廃寺の東隣に西別府館跡があり、東別府には別府城跡、別府氏館跡があり、他にも市内には玉井陣屋跡、黒沢館跡、奈良氏館跡、肥塚氏館跡、熊谷氏館跡、中条氏館跡、光屋敷遺跡、成田氏館跡、兵部裏屋敷、熊谷氏館跡、箱田氏館跡、村岡館跡等を列挙することができるが、時期的な齟齬の見られるケースもあり、その特定は今後の課題となっている。そうした中

では、出隅を持ち全周する堀と土塁、2箇所の虎口、柱穴跡、土坑墓、集石遺構等の調査された黒沢館跡は貴重なデータを提供してくれた。遺物としては、14～15世紀の年号の記載された板石塔婆や15～16世紀の美濃系の灰釉陶器やかかわらけ、内耳鍋等が出土している。

他には、三ヶ尻（天王）遺跡から墓地群、樋ノ上遺跡・若松遺跡から土坑墓、集石遺構、溝跡等や内耳土器、かわらけ、常滑等の陶磁器、石臼、板石塔婆等が検出されており、黒沢館跡南西の自然堤防上に立地する社裏南遺跡、社裏遺跡、社裏北遺跡等からは中世墓地群が検出されている。西別府の西方遺跡からも幾重にも重なり合った中世～近世の墓地群が調査されている。しかし、中世以降の情報はまだまだ不足しており、村々や人々の暮らしを生き生きと描くためには今しばらく留保せざるを得ないというのが実状であろう。

第2図掲載主要遺跡一覧表

1 横間栗遺跡 2 根絡遺跡 3 関下遺跡 4 石田遺跡 5 西別府祭祀遺跡 6 西方遺跡 7 西別府
廃寺 8 入川遺跡 9 深町遺跡 10 別府条里遺跡 11 一本木前遺跡 12 天神下遺跡 13 別府城跡 14 別
府氏館跡 15 寺東遺跡 16 在家遺跡 17 玉井陣屋跡 18 新ヶ谷戸遺跡 19 水押下遺跡 20 稲荷木上遺跡
21 籠原裏遺跡 22 一般国道17号線深谷バイパス熊谷3号遺跡 23 拾六軒後遺跡 24 堂西遺跡 25 樋の上遺跡
26 三ヶ尻遺跡 27 若松遺跡 28 黒沢遺跡 29 黒沢館跡 30 松原遺跡 31 庚申塚遺跡 32 高根遺跡 33 社裏
北遺跡 34 社裏遺跡 35 社裏南遺跡 36 臺遺跡 37 中耕地遺跡 38 西通遺跡 39 東通遺跡 40 土用ヶ谷戸
遺跡 41 奈良氏館跡 42 本代遺跡 43 下河原上遺跡 44 光屋敷遺跡 45 中条氏館跡 46 中条遺跡 47 天神
遺跡 48 中島遺跡 49 田谷遺跡 50 北島遺跡 51 天神東遺跡 52 中条条里遺跡 53 肥塚中島遺跡 54 出口
上遺跡 55 出口下遺跡 56 肥塚氏館跡 57 天神前遺跡 58 兵部裏屋敷 59 御蔵場跡 60 藤の宮遺跡 61 成
田氏館跡 62 諏訪木遺跡 63 箱田氏館跡 64 熊谷氏館跡 65 前中西遺跡 66 村岡館跡
A 別府古墳群 B 在家古墳群 C 籠原裏古墳群 D 玉井古墳群 E 三ヶ尻古墳群 F 坪井古墳群
G 広瀬古墳群 H 奈良古墳群 I 中条古墳群 J 原島古墳群 K 石原古墳群 L 肥塚古墳群 M 上
之古墳群 N 村岡古墳群

III 遺跡の概要

1 調査の方法

発掘調査の方法は、一辺5mのグリッド方式を用いて行い、北東隅をA-1グリッドとして南へA・B…、西へ1・2…とし、Aラインは、東から西へA-1・A-2…と呼称した。Bライン以南もAラインと同様に呼称しグリッド設定を行った。

発掘調査は、重機により表土剥ぎによる遺構確認面までの掘り下げを行った後、上記のグリッド設定を行う。その後、人力による遺構確認のための精査を実施し、続いて確認された各遺構の手掘りでの掘り下げを行った。途中、発見された土器・石器などの遺物は写真撮影・測量をした後、慎重に遺物の取り上げを行った。遺構も調査の折々に必要に応じて写真撮影・測量を実施した。もちろん完掘時での写真撮影・測量を忘れるわけにはいかない。遺構等を完掘し終えた第2次調査の最後に、遺跡全体の空中写真撮影を行い、本調査を完了した。

2 検出された遺構と遺物

横間栗遺跡は、Xグリッドより南側は別府沼に向かって傾斜していたが、その北側はほぼ平坦であった。遺構はXグリッドより北側に検出され、弥生時代前半の再葬墓13基・土坑71基・古墳時代前期の住居跡2軒・溝跡22本であった。調査区の北側は溝ばかりであったが、南側に再葬墓・土坑・住居跡・溝跡が検出された。

再葬墓からは、弥生時代前半の壺・甕・玉類・石器・人骨が発見された。住居跡からは、土師器の甕・高坏・埴が出土し、土坑からは弥生時代前半の壺・玉・石器が出土したものもあった。調査区の南側には縄文時代後期を主体とした遺物包含層があり、縄文土器・石器が多量に出土した。

IV 遺構と遺物

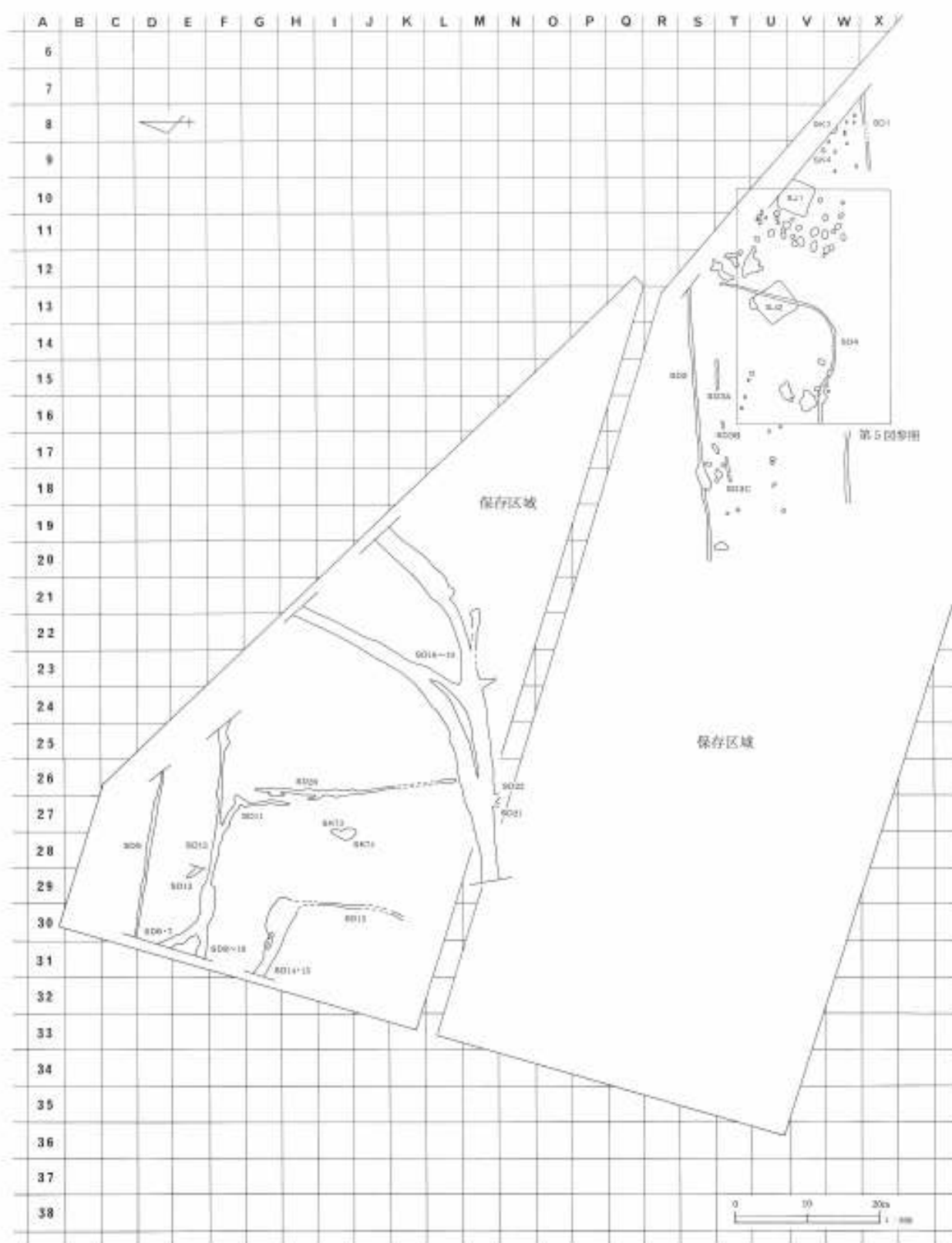
1 再葬墓

再葬墓は調査区の概ね南東部の限られた地区で集中して検出された（第4・5図）。さらに具体的に述べれば、11基の集中とその西方約20mの所に2基の計13基が再葬墓として調査されたのである。しかし、その集中地区にはまた土坑も密集して存在する。しかもそれらの土坑には後述するように管玉等を出土する例もある。再葬墓との関わりが強く推測されるところであろう。しかしここでは、墓壙内に土器が埋置されていたもののみを、とりあえず再葬墓として限定して扱うこととしたのでご了承願いたい。以上の再葬墓群、土坑群の集中地区は丁度自然堤防の南端部分に当ることもまた申し添えておこう。さらに、調査時の所見によると、再葬墓群の南方の緩斜面（第1号再葬墓の南西約20mのZ-13・14グリッドに位置し、標高は第1号再葬墓より約70cm低い）から4×1mの範囲に焼土や骨、骨粉、炭化物等の集積及び被熱による赤化土層が確認されている。非常に注目すべき事実であろう。

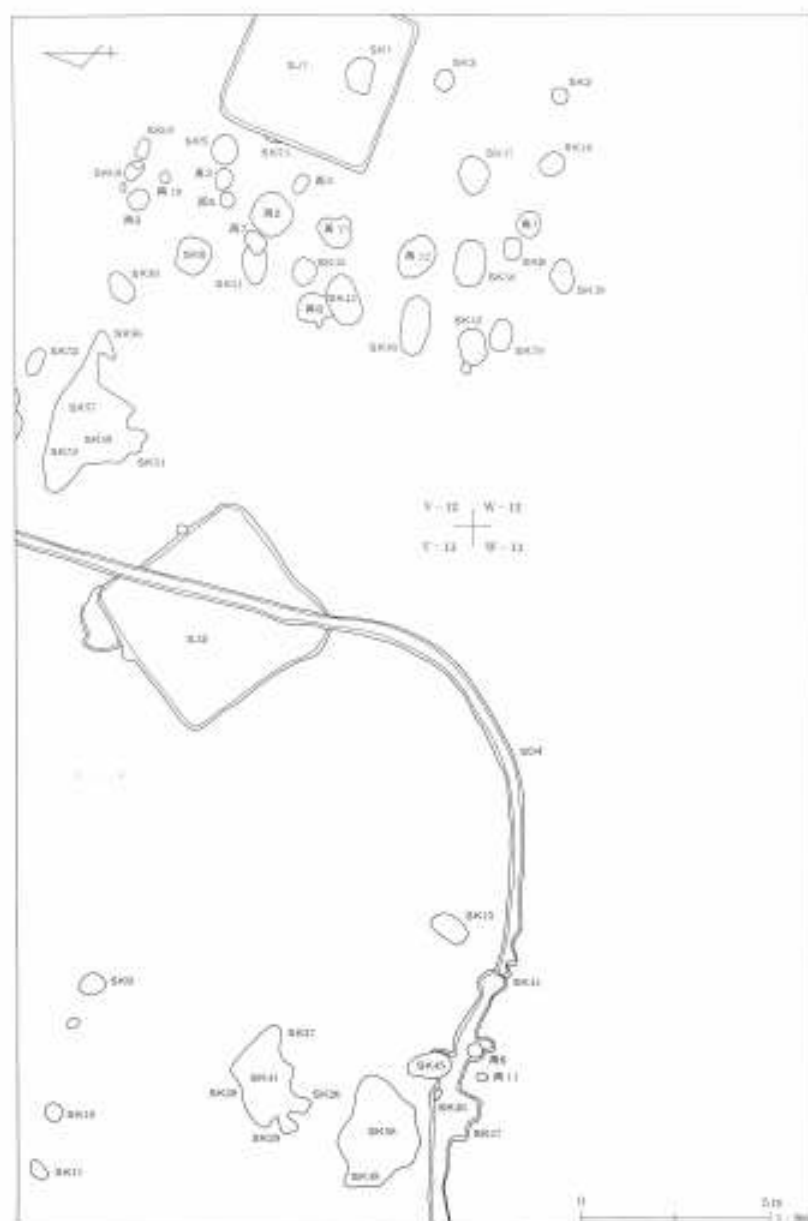
次に、再葬墓出土土器のうち、特に条痕文の施されたものについては、当該部分の拓影図及びその分類基準について第22～25図に掲げてあり、また展開模式図の作成が可能なものについては第26図に掲載



第3図 横間栗遺跡周辺の地形



第4図 横間栗遺跡調査区全体図



第5図 再葬墓集中地区拡大図

したので個別説明の補いとして参照願いたい。

第1号再葬墓（第6図）

再葬墓群の最南端で検出された。墓墳の覆土上部には川原石が多数含まれており、他の再葬墓とは様相を異にする。墓墳の平面形は85×75cmの楕円形を示す。深さは最深部で凡そ65cm。大型壺（1）は墓墳の東壁側に偏り、正位に直立した状態で出土した。壺内には木の皮のようなものが敷かれていたとの調査時の所見があるが具体的には不詳。人骨は壺の内外から発見されているが、特に壺内に縦に入れられていた5本の大腿骨等の人骨のあり方は興味深い。甕（2）は墓墳内の比較的深い位置で破片となって検出された。墓墳内からは他には打製石斧の欠損品が出土している。

(出土遺物)

土器 (第 11 図 1～2)

1 口径 18.8cm、最大径 35.0cm、器高 66.5cm を計る大型壺。最大径は胴上部の肩部に寄った部分。外反する口縁部には指頭圧痕のある断面三角の刻み目突帯が三条巡らされ、口唇上にも同様の指頭圧痕が巡らされている。突帯間は指頭によるなでが丁寧に施され、一見沈線状を呈している。頸部以下、底部直上までには全面にわたりⅡa 類条痕文が施文される。その施文方位は、頸部は横位と斜位で入り乱れる部分もあるが基本は横位。胴部上半は横位、胴部下半は斜位となっている。この違いは、おそらく施文時の土器の置き方と関係があるのだろう。すなわち、胴部下半は条痕の移動方向が底部から上方へと向かっていることから、この土器の施文は口縁を下にする所謂逆立ち状に置いて上から下へと斜めに施文具を動かしたことが判明するのである。その後、土器を正位に置き直して頸部に、そして胴部上半に施文したのである。底面には網代痕が見られる。色調は全体的に暗灰褐色を示すが、内外面共に胴部下半は煤の付着が顕著で黒色味を帯びている。胎土には細かな砂粒を多く含む。

2 口径(推定) 21.6cm、最大径(推定) 30.0cm、現存高 39.0cm を計る甕。最大径は胴部上位にあるが膨らみは緩やか。口縁は胴部から立ち上がり気味ではあるが、内傾のまま収束する。口縁部は横位のなでが観察されるのみでまったくの無文。頸部から胴部は全面にわたってⅡb 類条痕文が施される。施文順位は、1 の土器同様、胴部下半を底部から上方へとまず施文し、次には土器を正位にして胴部上半をさらに二分して上から下へ、そして最後に肩部を横位に施文する。色調は全体的に灰褐色。胎土には細砂粒を多く含む。

石器 (第 32 図 1)

1 やや偏刃の刃部を持つ撥形の打製石斧片。刃部は作り直されたものであろう。

第 2 号再葬墓 (第 6 図)

第 1 号再葬墓の北方約 6 m に位置する。平面形はやや隅丸方形状で、大きさは 110×110cm、深さは約 30cm を測る。墓壙内には 4 個体の壺が、まるでドミノ倒しにあったかのごとくそれぞれが凭れあったまま検出された。西側の壺(3)は、口縁部が欠損し北西向きに倒れ、南側の 2 点(5、6)はほぼ完形で南西向きに倒れていた。もう 1 点(4)は口縁と胴部が離れて検出されている。また、4 の壺内からは磨石、5 の壺内からは砥石が検出され、墓壙の底に近い位置からは骨片と管玉(紛失)が出土している。

(出土遺物)

土器 (第 12 図 3・4、第 13 図 5・6)

3 最大径 29.7cm、現存高 45.9cm を計る壺。最大径は胴部中程で底部は穿孔されている。口縁部から頸部上半にかけては欠損しているため、口縁部や頸部の形状・文様等については不詳。ただ頸部下半には数条の横線に挟まれた沈線による重鋸歯文の施文が観察される。沈線の断面は幅広で丸味を帯びていることから、竹管の背か棒状工具による施文が考えられよう。胴部には、頸部同様の施文具により、肩部を中心に 7 単位で巡る波状沈線が巡らされ、それぞれの波間には縦の矢羽根状文が充填される。沈線箇所の施文順位は右から左。また、波状沈線部分に限って L R 縄文が施文されているが、磨消等の処理は不十分であり、沈線外へのはみ出しが目立っている。以下、底部直上まではⅣa 類条痕文が施される。胴部中程では横位、胴部下半は底部から上方へと斜位施文されている。底面には木葉痕が見られる。色調は全体的に明

褐色。胎土には砂粒を多く含有するが、特に片岩質の砂粒が目立つ。

4 口径 11.1cm、最大径 27.4cm、器高 41.6cm を計る壺。最大径は胴部中程にある。口縁は外反し肥厚する。口縁部直下には一本の幅広の沈線が引かれ口縁部の肥厚がより強調されるが、突帯を巡らすことなく肥厚部に刻み目のみが施されている。頸部は口縁部下に若干の無文帯を設け、以下は三本沈線下に鋸歯風（左下がりの三本沈線→右下がりの連続沈線）を右回りに順次繰り返すため厳密な意味での鋸歯状ではない）の沈線文様を配し、さらにその下部は肩部に至るまで横位の幅広沈線が多段に巡らされている。肩部から胴部中程にかけては沈線文様の空間に L R 縄文が充填されており、極めて装飾的な文様帯となっている。沈線文様は横位二段と縦位施文が交互に配され三単位で器面を一周している。なお、この沈線文様は沈線束の起点・終点に止めの沈線が付加されることで文様化を果たしており注意されよう。この胴上部文様帯下は、胴腹部で横位、それ以下は斜位に III 類条痕文が施されている。部分的には 2 本一単位の形跡ではないかと疑える箇所もないわけではないが、基本的には沈線文様と同一のへら状施文具によると判断される。一本一本の沈線の太さと浅さは、いかにもへら状施文具を彷彿させよう。底面には網代痕が見られる。色調は全体的に淡褐色。胎土には砂粒を多く含む。

5 口径 15.6cm、最大径 32.0cm、器高 56.7cm の大型壺。最大径は胴部中程。底部は穿孔されている。口縁部はやや肥厚して外反し、同部は縄文帯となっている。口唇上には指頭による連続刻み目が施される。頸部には、乱れてはいるが、中心に円や渦を配した沈線による菱形文の連接配置が見られ、肩部には一對の渦を取り込んだ文様等が描かれる（第 26 図）。しかし、文様帯上は頸部と肩部が沈線等で画然と分帯されているわけではない。むしろ、胴部中程に引かれた数本の沈線がこの土器の文様施文部位を大別しているのである。すなわち、上部はモチーフのある文様、下部は単なる条痕施文といった具合にである。また、すでに見たように文様の割付も相当雑である。どうにか三単位性が窺えるに過ぎない。施文順位は（下書き→L R 縄文→磨消・削り→沈線→列点）となる。条痕文は、基本的には IV a 類であり、底部寄りでは底部から上方へ、胴部中程では右下がり若しくは格子状に描かれる。施文方位は左→右。しかし、胴腹部付近では半截竹管によると思われる平行沈線も観察されており注意しておきたい。底面には網代痕が見られる。色調は全体的に褐色だが、底部付近は灰褐色となっている。胎土は細砂粒を多く含む。

6 口径 14.4cm、最大径 31.0cm、器高 45.5cm を計る壺。最大径は胴部中程より少し上位にあり、底部は穿孔されている。口縁は外反し若干肥厚する。肥厚した部分は縄文帯となっている。頸部には上下を縄文帯で区画した幅広の文様帯があり、その挟まれた部分には磨消縄文が（2+1）単位配されている。胴部には、その上半部に文様帯が設けられ、沈線区画された空間には磨消縄文による大柄な円文が五単位で連結する。縄文はすべて L R 縄文であり（沈線区画内への充填→はみ出しの磨消）を原則としている。そのためか文様施文部に当る胴上半部は極めて整形が丁寧に仕上がっている。胴部中程に巡らされた沈線は胴部下半の条痕施文部との境界線となっており注意される。条痕は、下部は底部から上方へと引かれ、その上部は横位施文となっている。条痕文は II a 類で竹管幅約 0.6cm を測る。底面には網代痕が見られる。色調は全体的に明淡褐色。胎土には比較的多くの砂粒が含まれる。

石器（第 32 図 2・3）

2 撥形の形状を示す砥石。全面にわたり擦痕が認められる。

3 やや偏平の丸い磨石。磨面は光沢があるほど使い込まれている。

第3号再葬墓（第7図）

第2号再葬墓の北東側で検出された。墓壙の平面形はやや楕円形で60×52cm、深さ約30cmを測る。壙状とても形容できようか。墓壙内には大型壺（7）が西向きに倒れた状態で検出され、さらにこの大型壺内から3点の小型土器（8～10）が発見された。つまり、大型壺の肩部より上は当初から欠損していたということでもある。また、細片となっていたが管玉も大型壺内から出土している。

（出土遺物）

土器（第14図7～10）

7 最大径39.8cm、現存高54.0cmを計る大型壺。最大径は胴部中程よりやや上位にある。口縁部から頸部にかけては欠損しており詳細不明だが、残存する頸部下端には先端の丸い棒状施文具による縦線、矢羽状文が横位に巡らされた沈線間に認められる。以下はすべて条痕施文。条痕は細く、器肌の荒れも加わり観察が難しいが、概ねⅡa類と考えられる。施された条痕の断面観察からも半截竹管状施文具の内側使用によることが推測される。なお、底部から胴部下半位までは底部から上方へと条痕は引かれる。胴腹部より上は水平方向への条痕施文具の移動が原則となっている。底面には網代痕が見られる。色調は全体的に淡橙褐色を示すが、器外面の胴腹部付近と内面の底部から胴部下半にかけて煤の付着が顕著に認められる。胎土には砂粒が多く含まれている。

8 口径7.8cm、最大径7.8cm、器高8.4cmを計る小型丸底壺。最大径は口縁部にある。口縁部は肥厚しており、2の土器同様縄文帯となっている。頸部は無文。胴部は丸底部分と一体でひとつの施文域と化しており、底面観は略方形の無文の棒状文を四方に配したため十字の磨消縄文となっている。側面観はT字文。色調は黒褐色の部分と淡橙褐色の部分とが相半ばしている。胎土には砂粒が含まれる。

9 口径6.2cm、最大径8.6cm、器高21.3cmを計る小型壺。最大径は胴部にあるが、この小型壺は胴部に比し極端に長い頸部を有するという特徴がある。外反する無文の口縁部下に展開する頸部は、さらに一条ないし二条の横位沈線で四つに分帯される。上から順に見ていくと、一帯目には右下がりの斜沈線が充填され、二帯目には意識した膨隆部が作出され無文、三帯目には三条の沈線による鋸歯文、四帯目には縦沈線に区切られた磨消縄文の交互配置（原則）が認められる。胴部上半には棒状の磨消縄文（縄文充填のない棒状文も不規則に配される）が横位に11単位巡らされている。さらにこの土器には、口縁部の内外面と頸部二帯目の膨張部分、そして四帯目と胴部上半の棒状文のうちの無縄文部分に赤彩が施される（例外箇所はある）という際立った特徴もあり、他の土器に比べると器形・文様等と共に極めて印象的な概観を示している。底部には木葉痕が見られる。色調は全体的に暗褐色。胎土には砂粒を多く含んでいる。

10 口径8.3cm、最大径12.3cm、器高23.1cmを計る小型壺。最大径は胴部中位にある。外反する口縁は沈線で画されL R縄文が充填施文されている。頸部は無文。主たる文様帯は磨消縄文の見られる胴部上半にある。同文様帯は上下が沈線で明確に画され、横長の楕円棒状文が横位に三単位と、その間に縦位短沈線が交互に配される。変形工字文の意識の名残であろう。胴部下半は縄文施文のみ。すべてL R縄文。底面には木葉痕が見られる。色調は全体的に暗褐色。胎土には砂粒が含まれる。

石器（第32図4）

4 両端から穿孔された管玉。欠損品である。

第4号再葬墓（第7図）

第2号再葬墓の南東に近接する。墓壙の形態等是不詳。横倒し状態の壺(11)が単独で出土した。
(出土遺物)

土器(第14図11)

11 最大径(推定)25.9cm、現存高22.5cmを計る壺。口縁部が欠損しており器形の詳細は不明だが、最大径は胴部中程であろう。文様は胴部上半に限られ、半截竹管状施文具による横位の集合条線とその間の空白部分への鋸歯状文とが観察される。施文順位は左から右が原則。なお胴部下半には条痕等は全く認められない。色調は全体的に淡褐色を示すが、外面の胴腹部周辺は煤の付着で、内面の胴部下半の上部及び底面は炭化物で黒変している。胎土には砂粒が多く、特に片岩片が目立って含まれている。

第5号再葬墓(第7図)

第3号再葬墓の西に隣接して検出された。平面形は44×39cmの楕円形を示すが、深さは墓壙検出面との関係もあり10cm以上としておく。壺(12)が正位の状態出土している。

(出土遺物)

土器(第15図12)

12 最大径34.1cm、現存高29.9cmを計る壺。口縁部から胴上半にかけて欠損する。最大径は胴部中程であろう。やや丸みを帯びた胴部には、上半部に刺突を充填した沈線による略三角と円形の杵状文が交互に配される。しかし、杵状文内はすべてが刺突の充填というわけではなく、欠損により不詳ではあるが、L・R縄文の充填も一部で確認されている。胴部下半はIVb類の条痕文のみ。条痕は半截竹管の外皮側を器面に当てて一本づつ引かれたらしいが、部分的に内側を利用したために平行沈線となっている箇所も認められた。おそらく胴部上半の沈線文様とも同一施文具なのであろう。底面には網代痕が見られる。色調は全体的に淡褐色を示すが、内面の方がやや褐色味が強い。また、胴部中程から底部にかけて煤の付着が見られ、内面も胴下半部の中程が幅広く黒変している。胎土には砂粒がやや多めに含まれている。

第6号再葬墓(第7図)

11基の再葬墓群からは大きく西に離れ、第11号再葬墓と近接して検出された。平面形等は第4号溝に切られていたため詳細は不明とせざるを得ないが、検出状況からは概ね円形と考えられる。現状では45×40cmで深さ36cmを測ることができる。大型壺(13)が正位の状態検出された。なお、調査時の所見では、大型壺内からヒトの歯と、底部内側に密着して木の皮状のものが検出されたという。

(出土遺物)

土器(第15図13)

13 最大径37.5cm、現存高43.5cmを計る大型壺。口縁部、頸部を欠損する。胴部最大径は胴上部にあり、外観はやや怒り肩状を呈する。施文は全面にIa類の条痕文。しかし、施文上胴部は上中下に三分され、条痕の施文方向は上・中位が横、下位は斜から縦となっている。底面には網代痕が見られる。胴部上半の内面には成形痕、整形痕がやや目立つ。色調は全体的に淡灰褐色を示すが、胴腹直下の器面は煤の付着により黒変している。また、内面は底部周辺を除き、胴部下半が黒変している。胎土には多くの砂粒を含む。

第7号再葬墓(第8図)

第2号再葬墓の北西側に隣接し、第51号土坑を切る。平面形は64×47cmの楕円形を示し、深さは約30cmを測る。1点の壺(14)は墓壙の南西側から検出されたが、墓壙の底部の窪みを見る限り、もう1

点の土器埋納があったのではないかと推測させるが、攪乱等も重なり詳細は不明であった。また、調査時の所見では、攪乱を受けなかった壺の底部内側には木の皮状のものの付着が認められたという。

(出土遺物)

土器 (第 16 図 14)

14 最大径 32.0cm、現存高 30.9cm を計る壺。口縁部、頸部を欠損するため器形の詳細は不明である。胴部最大径は胴腹部にあり、胴部上半には文様帯が見られる。文様帯は上下を数条の集合沈線で区画し、その帯内には同じく数条の集合沈線による下向きの半弧状文が連続で右へ右へと巡らされる。沈線はいずれも一本ずつ描かれる。弧状内には縦沈線が充填され一見櫛歯状を示す。そして連続弧状文間に生じる逆三角状の空間には矢羽根状に沈線文が充填される。胴部下半はほぼ全面がⅣb 類の条痕文であるが、実態は条痕文というよりも、雑ではあるが、矢羽根状の沈線文様とでも言えそうである。なお、胴下半の条痕施文部には半截竹管を使用したと思われる平行沈線も一部で観察される。底面には網代痕が見られる。色調は、外面は全体的に褐色、内面は淡灰褐色を示している。胎土には砂粒が多く含まれる。焼成は元々は良好であったと思われるが、二次的加熱を受けており、表面はかなり脆くなっている。

第 8 号再葬墓 (第 8 図)

第 2 号再葬墓の南西約 2m に位置し、第 43 号土坑に南側を切られる。墓壙は概ね楕円形を示し、大きさは 86×77cm、深さは約 28cm を測る。墓壙内には甕 (15) が口縁を東に向け横位の状態で検出され、甕の上には小型甕 (18)、小型鉢 (19) そして 2 点の小型壺 (16・17) が同じく横位の状態で検出された。また、甕の中からは 2 点の欠けた管玉 (第 32 図 5・6) と骨片、小礫が発見され、墓壙の底からも 1 点の欠けた管玉 (第 32 図 7) と骨片や小礫が出土した。

(出土遺物)

土器 (第 17 図 15～19)

15 口径 26.6cm、最大径 36.0cm、器高 54.3cm を計る甕。最大径は胴部上半にある。若干肥厚した口縁部は一条の沈線で画され L R 縄文が施されている。口唇は角頭状に成形されているが、外唇上には指頭圧痕が巡らされる。頸部はやはり一条の沈線で画され L R 縄文が施されるが、波状沈線が付加される。だが一方、頸部と胴部文様帯間は幅が狭いが無文帯が設けられ明確に分帯されており注意しておきたい。胴部文様帯の下限は胴腹部付近であるが、沈線等での画然とした分帯意識は見出せない。文様としては、沈線間の磨消しによる三単位構成の菱形状文の重畳と、交点部への一個乃至二個の短沈線の付加を原則としている。さらに菱形状文の内外には、交点部を基軸として上部に接点をもたない小型の菱形状文が半入れ子状に描かれ、装飾性を高めている。下端にもその名残が、あたかも結紐文のような文様として見られる。こうした胴部文様に対して変形工字文の影を見出すことは難しいことではないであろう。胴部下半には、腹部に横位の条痕施文が若干認められる、以下には縦位条痕が全面にわたって施される。施文具は、条痕の重なりが多く観察が難しいが、Ⅱa 類と判断される。底面には木葉痕が見られる。色調は、胴部上半が褐色、胴腹部以下は煤の影響もあり黒色化している。胎土はやや砂質に富む。

16 口径 4.4cm、最大径 8.5cm、現存高 11.9cm を計る小型壺。最大径は胴部下半にある安定した形態の壺であり、底部は穿孔されている。口縁部は沈線で画され無文。頸部から胴部にかけては全面的に L R 縄文が施され、頸部では波状、胴部では横 S 字状等の不定形な並行沈線文 (磨消なし) が施されている。並行

沈線文の端は丸く閉じるという特徴があり、ここに注意しておこう。なお、底部周辺の縄には粗と細の二種の使用が認められる。しかし、全体的に施文は雑である。底面には木葉痕が見られる。色調は全体的に明褐色。胎土には小礫がやや多めに含まれている。

17 口径 4.8cm、最大径 8.5cm、器高 14.7cm を計る小型壺。最大径は胴部中位にある。火熱による器形の歪みや器肌の部分的な膨隆が見られる。口縁は無文で外反する。頸部には内側の磨り消された杵状文が三単位、胴部にはその上半に曲線的な磨消文様が施される。なお、この土器も 15、16 の土器同様、並行沈線文の端は丸く閉じられている。また、胴部上半の文様帯の下限は沈線等で画されることはない。胴部下半は無文で、条痕等は認められない。施文は全体的に雑と言えよう。また、底面には木葉痕が見られる。色調は、外面が濃淡の差はあるが全体的に褐色気味、内面は全体的に灰色を示す。胎土には細砂粒が多めに含まれる。

18 口径 9.2cm、最大径 11.4cm、器高 12.6cm を計る小型甕。底部は穿孔されている。最大径は胴部中程にある。口縁部の断面形態は頸部から口唇へかけて次第に薄くなる。また底部は大きく外へ張り出すという特徴がある。地文は全面にわたって無節縄文が施されるが、口縁部と胴部との境には一条の沈線、そして胴部には大きく二単位の工字文風の磨消縄文が一筆書きで構成されている。底面には木葉痕が見られる。色調は全体的に黒褐色を示す。特に外面には煤の付着が見られ黒変が強い。胎土には小砂粒がやや多く含まれる。

19 口径（推定）8.6cm、器高 7.3cm を計る小型鉢。断面形態は朝顔状を示し、底部から口縁にかけて次第に開いている。しかし、器形の歪みが大きく、口径＝最大径はあくまで推定に止まる。器壁は底部ほど厚く、口縁部から口唇にかけてはとくに薄く成形されている。体部には大柄で不規則な磨消縄文が三単位施されている（しかし、実態は沈線施文後縄文を施している）。底面には網代痕が見られる。色調は全体的に暗灰色。胎土には片岩粒等の砂粒が多く含まれている。

石器（第 32 図 5～7）

5～7 いずれも両端から穿孔された管玉であり欠損品。5、6 は壺内から検出され、7 は壺の下、つまり墓壇の底面から出土した。6、7 は同一個体であり、一部接合面を持つ。5 も石質の類似等から、やはり同一個体ではないかと推測されるがその確証はない。

第 9 号再葬墓（第 9 図）

第 5 号再葬墓の北方約 2m に位置する。本再葬墓群では最北に位置する。墓壇の形は 63×54cm の楕円形を示し、深さは約 33cm を測る。墓壇内には、口縁を若干北西方向へ傾げさせた壺が 2 点（20・21）並んで配されており、壺の上には甕の大型破片（22）と蓋（23）が置かれていた。また、墓壇内からは石鏃（第 32 図 8）とスクレーパー（第 32 図 9）、さらにヒトの歯の破片も検出されている。

（出土遺物）

土器（第 18 図 20～23）

20 最大径 24.7cm、現存高 37.2cm を計る壺。口縁部は欠損しておりその詳細は不明だが、最大径は胴部中位にある。施文部位は胴部上半の肩部に集約されており、集合沈線による鋸歯状文が配される。集合沈線は半截竹管による（Ⅱ a 類）。頸部の横位の集合沈線、胴部の横位から斜位の集合沈線も同一施文具による。なお、施文順位は鋸歯状文（左→右へと施文）の後に頸部、胴部下半の集合沈線が引かれる。胴部下

半については、胴腹部の横位から次第に底部方向へと施文されている状況が窺える。底面には網代痕が見られる。色調は全体的に明褐色を示す。胎土には若干大きめの砂粒が含まれている。

21 口径 18.1cm、最大径 30.5cm、器高 43.0cm を計る壺。最大径は胴部中程より若干上位にある。口縁部は外反し、へら状施文具による沈線と刻み目のある突帯がそれぞれ一条巡らされる。頸部とは器形上のみで判断すれば、数条の横位沈線の巡らされたくびれ部分に限定されるべきであろうが、ここでは施文意識を踏まえてその上下の文様帯をも仮に範囲に含ませる。すなわち、上位の文様帯には鋸歯状沈線文（厳密には 2～3 本単位の縦沈線に斜沈線を付加したもの）、下位には縦沈線の充填が見られるが、横位沈線を含めて、いずれも施文は一本ずつ描かれるという共通性がある。しかし、同様の横位沈線で分帯され、内部に連続連弧状沈線文の施文された胴上部の文様帯は、沈線文がすべて三本一組の櫛歯状施文具によるという相違点が認められる。また、口縁と胴上部文様帯には L R 縄文が施される。胴部下半には縦位に l b 類の条痕文が施文される。なお、条痕は胴部中程は上→下、それ以下は下→上へと施文される。底面には網代痕が見られる。色調は明褐色から淡灰褐色。胎土には砂粒を多く含む。焼成は良好であったと思われるが、遺存状態不良のため器肌の荒れが著しい。

22 口径（推定）30.2cm、最大径（推定）30.8cm、現存高 32.5cm を計る甕。最大径は胴部上位と思われるが、外反する口縁部も近似値を示す。文様は極めてシンプルで、沈線が口縁に一条、肩部に三条巡らされる。なお、同部分には L R 縄文が施されているが、むしろこの土器の特徴は頸部が無文に仕上げられているという点にあると思われる。胴部には ll a 類の条痕文が全面にわたって施文されるが、胴腹部は横位、それ以下は斜位から縦位を施文上の原則としている。器面の色調は全体的に明褐色を示すが、特に胴腹部は煤の付着により黒変しており、下半部も被熱により淡灰褐色化している。胎土には砂粒を多く含む。

23 つまみ部口径 5.5cm、蓋部口径 10.5cm、器高 6.3cm を計る蓋。杯を伏せたような形状である。つまみ部は 5 単位波状を示すが、その作りは雑であり山の高さ等は一定していない。しかし、器壁は 0.4cm という薄さを誇る。文様としては全面に L R 縄文が施文されるのみ。色調は外面が明褐色から黒色、内面が全体的に灰褐色を示す。胎土には細砂粒が多く含まれるが、比較的きめが細かい。

石器（第 32 図 8・9）

8 中子の小さい有茎鐮。先端はやや丸みを帯びている。

9 表面に一部自然面の残された剥片利用の石器。両側縁には抉りが設けられており、それを利用した削器としての機能が推測される。

第 10 号再葬墓（第 9 図）

第 9 号再葬墓の南東約 35cm の位置で検出された。墓壙はほぼ円形で、大きさ 40×35cm、深さ 35cm を測る。墓壙内にはやや南東壁に寄って口縁部から頸部を欠損した壺（24）が正位の状態で直立し、その上には広口筒形壺（25）が口縁を北東に向け横倒しの状態で検出された。

（出土遺物）

土器（第 16 図 24～25）

24 最大径 27.9cm、現存高 29.9cm を計る壺。口縁部から頸部を欠損するが、おそらく最大径は胴部中位にある長頸の壺であろう。肩部から胴部中位にかけては磨消縄文を主とした幅広の文様帯が存するが、同部分には三本一単位の横位沈線が上中下に三単位巡らされ、文様帯はさらに二分割される。そしてそれぞ

れの上下の横帯間には二重の円文が9単位、三重の円文が10単位（うち2単位は二重の円文）配され、この土器を特徴付けている。胴下半部は全面がⅡa類の条痕文で覆われる。施文方位は横。底面には網代痕が見られる。色調は全体的に淡橙褐色。胎土には細粗砂粒を多く含む。

25 口径（推定）11.2cm、最大径13.1cm、器高25.6cmを計る広口筒形壺。最大径は胴部上半にあるが、頸部の絞りは小さく且つ胴部の張りも僅かなため外観は円筒状を示す。口縁部は断面を見ると口唇の薄い複合口縁状を呈し、同部分はLRの縄文帯となっている。以下には、頸部と胴部最大径付近に二本一对の横線が巡らされる。頸部は、口縁の縄文帯下に若干の段を有し無文帯を設け、以下にはLR縄文が全面に施文される。頸部下から胴部最大径までの間は波状沈線が二本巡らされ、同波状沈線間は無文となるように縄文が磨り消されている。胴部最大径より下位にも一本の波状沈線が引かれ、その上部は磨り消され、下部は縄文が施文される。胴部中位以下は無文。底面には網代痕が見られる。色調は全体的に淡茶褐色を示すが、外面では括れ部以下、内面では胴腹部周辺に煤の付着等による黒変が多く認められる。胎土には細砂粒が多く含まれる。

第11号再葬墓（第7図）

第6号再葬墓とともに他の再葬墓群とは西方に大きく離れて発見された。しかし、墓壙が検出できたわけではない。ただ、口縁から頸部まで欠損した壺（26）が正位に直立した状態で単独出土したにとどまる。（出土遺物）

土器（第19図26）

26 最大径29.9cm、現存高39.7cmを計る壺。口縁から頸部にかけては欠損のため詳細な形状等は不明だが、最大径は胴部上位にある。確認される文様はⅠa類の条痕文のみであり、少なくとも胴部に関しては全面にわたって施文されている。なお、条痕の施文方向は胴腹部付近より上が横位、下は縦位である。底面には木葉痕が見られる。色調は全体的に内外共に灰褐色を示すが、胴腹部から下位にかけては煤の付着等により黒変化している。胎土には砂粒が多く含まれる。

第12号再葬墓（第9図）

第8号再葬墓の南東約2mに位置する。大きな攪乱のためやや不定形気味ではあるが、墓壙の平面形は概ね楕円形を示し、大きさは150×104cm、深さは44cmを測る。墓壙内からは、正位の状態で直立した壺（27）と口縁を北東に向けた横倒し状態の大型壺（28）の2点、及びヒトの歯が出土している。

（出土遺物）

土器（第19図27、第20図28）

27 口径9.8cm、最大径29.2cm、器高36.5cmを計る壺。最大径は胴部中位にある。器壁は肉厚であり他の土器に比し重量感がある。口唇上には連続指頭圧痕が見られ、口縁は無文で大きく外反する。主な施文部位は頸部から肩部までに限られており、そこには横位の集合沈線が6単位巡らされ、その集合沈線間の空白部分には縦の短沈線がほぼ等間隔に万遍なく充填されるという、単純ではあるが特徴的な文様が構成されている。それ以下の胴部には、胴腹部では横位に、胴下半部では斜位にⅢa類の条痕文が施される。底面には網代痕が見られる。色調は全体的に灰褐色。胎土に含まれる砂粒は比較的細かい。

28 口径20.5cm、最大径39.5cm、器高67.2cmを計る大型壺。最大径は胴部上位にある。口縁は外反し、口唇上には連続指頭圧痕が見られる。頸部には横位の沈線が全面に渡って巡らされるのみ。括れ部から胴

腹部にかけては横位の集合沈線間に縦位の集合沈線が窓枠状になるよう上下二段に配されている。そのうちの下段には窓枠内にも横位の集合沈線が充填されている。なお、集合沈線の施文順位はその切合関係から<胴腹部の横位沈線→縦位沈線→横位充填沈線→肩部横位沈線→縦位沈線→頸部横位沈線>と観察される。つまり、下→上、縦→横がこの土器における施文上の原則だったと言えよう。胴腹部以下には横方向にⅡb類の条痕文が底部直上まで施されている。底面には網代痕が見られる。色調は全体的に淡灰褐色であるが、内面の胴下半部は黒色化している。胎土に含まれる砂粒は全体的に多い。

第13号再葬墓（第10図）

第8号再葬墓の東1.3m、第2号再葬墓の南0.7mのところで検出された。攪乱が大きく墓壙の形態はやや不整形だが本来は楕円形を呈していたと思われる。大きさは約100×75cmで、深さは最深部で約55cmを測る。墓壙からは口縁を北西に向けた横位の状態で大型壺（29）が、また大型壺の底部に接して口縁を南西に向けた壺（30）がやはり横倒し状態で出土した。なお、大型壺の中からはさらに小型鉢（31）が検出されている。

（出土遺物）

土器（第21図29～31）

29 口径25.4cm、最大径36.9cm、器高64.2cmを計る大型壺。非常に薄手の土器である。最大径は胴部上位にある。文様施文部は口唇から肩部までであり、地文にはLR縄文が見られる。そして同施文部は頸部への横位集合沈線（集合沈線は三本一単位が原則となっている。以下も同）で上下に二分割される。上位（口縁部）文様帯には集合沈線による連弧状の波状文様が二段施される。一方、下位には×字状等を始め直線的な幾何文様が施され上位とはその趣を大きく違えている。なお、口唇には連続指頭圧痕が見られる。胴部には数条一単位の非常に細かなⅠa類の条痕文が、胴腹部までは横方向、以下底部直上までは斜方向に施されている。底面には網代痕が見られる。色調は全体的に淡褐色だが、胴腹部には相対する位置に二カ所黒変部が認められる。おそらく土器焼成の過程で生じた黒変だろう。胎土には砂粒が多く含まれる。

30 口径10.0cm、最大径19.0cm、器高31.5cmを計る壺。最大径は胴部中位にある。成形、整形、施文、共に粗雑な感の否めない土器である。そのせいか器壁も厚めのままである。それでも口縁は外反し口唇にかけて次第に器壁が薄くなるという特徴は認められる。胴部は最大径付近のみがせり出し、器形に歪みを生じさせている。また、この時期の壺の底部は外へせり出し気味に成形されるのが一般的だが、本例にはそうした傾向は見られない。文様としては器面全面に半截竹管による幅の狭い平行沈線と同一施文具の竹管外皮側利用による1本沈線が粗雑に施されるのみである。底面には木葉痕が見られる。色調は全体的に淡灰褐色。胎土には砂粒が多めに含まれる。

31 口径10.5cm、最大径10.5cm、器高10.3cmを計る小型鉢。最大径は口縁部にある。口縁部は途中の内面に見られる陵から外傾するが、若干内湾気味に口唇部に至る。底部は若干上底気味。成・整形ともに粗雑であり、特に内面には輪積みの痕跡が顕著に窺われる。文様帯は口唇直下と胴部中位に半截竹管による横位の平行沈線で画され、文様帯内には同一半截竹管による二対の波状沈線が描かれている。この文様帯直下の胴部にはさらに同施文具による横位沈線が数本引かれる。しかし、この部分の沈線は一回に引かれる沈線の長さが短いという特徴がある。底面には木葉痕が見られる。色調は全体的に灰褐色。胎土に含まれる砂粒は細かい。

2 土坑

土坑は、調査区の南東部に寄った部分、即ち V-11 グリッド付近を中心とした概ね 10×10 m の範囲にまとまって一群、そしてその西方約 20 m に若干散漫ではあるが、東西を長軸にした 20×10 m の範囲に一群という、大きく二群を認めることができた（第 4 図）。そのうち前者は再葬墓群と重複関係にある。土器、石器等の遺物が検出された土坑は少なく、その性格付けを云々することは控えなければならないが、それでもいくつかの土坑は再葬墓群との結びつきを窺わせる。おそらく周辺に当該時期の住居跡等といった日常的な暮らしの痕跡を見出すことができない以上、当地域は墓域として意識されていたと考えざるを得ない。再葬墓と他の土坑が、当時の葬制上いかなる関係にあるのかは今後の大きな課題になるであろう。

第 1 号土坑（第 33 図）

第 1 号住居跡内の床面で確認された。円形の南側が直線状に切られたような平面形を示し、大きさは 95×70cm、床面からの深さは約 14cm を測る。

第 2 号土坑（第 27 図）

第 1 号土坑の南約 5 m（W-10 グリッド）に位置する。大きさは 50×40cm でやや楕円形を示す。深さは 27cm。

第 3 号土坑（第 27 図）

第 1 号と第 2 号土坑の間に位置する。大きさは 62×50cm でやや楕円形を示す。深さは 7 cm。

第 4 号土坑（第 27 図）

第 1 号住居跡の南東約 5 m に位置する。大きさは 74×26cm、深さは 8 cm を測り、細長く、浅い形状を示す。

第 5 号土坑（第 27 図）

第 1 号住居跡の北西に近接し、第 3 号再葬墓の東に隣接する。大きさは 72×70cm でほぼ円形を示す。深さは約 28cm。

第 6 号土坑（第 27 図、第 31 図 1、第 32 図 10）

第 2 号再葬墓の北西約 1.3 m のところで検出された。大きさは 102×80cm でやや不整形、深さは 22cm を測る。土坑内からは、口縁部無文帯が沈線で画され、以下には LR 縄文の施文された鉢形土器の口縁部破片 1 点（第 31 図 1）とほぼ完形の管玉 1 点（第 32 図 10）が出土した。

第 7 号土坑（第 27 図）

第 4 号土坑の南東約 1.2 m に位置する。土坑の北東部側は調査区外のため完掘できなかったので詳細は不明だが、おそらく長軸約 90cm の隅丸の長方形プランを示すと推定される。深さは約 6 cm であった。

第 8 号土坑（第 27 図）

第 38 号土坑の南東約 60cm に位置する。大きさは 65×50cm で楕円形を示す。深さは 26cm。

第 9 号土坑（第 27 図、第 32 図 11）

第 2 号住居跡の西方約 8 m 付近で検出された（U-15 グリッド）。大きさは 72×57cm でやや楕円形を示す。深さは約 24cm。土坑内からは、1 点の白玉状石製品（第 32 図 11）が出土した。上下両面からの穿孔による。

第10号土坑（第27図）

第9号土坑の西北西約3mに位置する。大きさは50×40cmで隅丸方形を示す。深さは約20cm。

第11号土坑（第27図）

第10号土坑の西北西約1.2mに位置する。大きさは60×36cmで形状はやや不整形、深さは約14cmを測る。

第12号土坑（第27図）

第2号住居跡の西方約19mに位置する。東側の一部を第13号土坑に切られている。大きさは45×40cmで概ね円形を示す。深さは約18cm。

第13号土坑（第27図）

第12号土坑と西側で重複する（第12号を第13号が切る）。大きさは70×55cmでやや不整形、深さは約17cmを測る。

第15号土坑（第27図、第31図2）

第9号土坑の南約9m、第4号溝の西約1mのところに位置する。大きさは102×62cmでやや不整形、深さは約32cmを測る。土坑内からは、縄文の施文された胴部破片（第31図2）が1点出土している。

第16号土坑（第27図）

第12号土坑の西約2.5mに位置する。大きさは65×40cmで長楕円形を示す。深さは約8cm。

第17号土坑（第27図）

第13号土坑の北方約7mに位置する。大きさは112×79cmでやや不整形、深さは一定しないが最深部で30cmを測る。

第18号土坑（第27図）

第17号土坑の西1.6mに位置する。大きさは116×37cmで長楕円形を示す。深さは9cm。

第20号土坑（第27図、第32図12・13）

第18号土坑の西方に位置し、第2号溝に切られている。全体に不整形であるが、大きさは340×120cmで菱形状を示し、深さは最深部で38cmを測る。覆土には、骨片や炭化物が含まれ、遺物としては二点の石鏃（第32図12・13）が出土した。12は非常に小型の黒曜石製凹基鏃であり、13は裏面に横方向の主要剥離の見られる尖基鏃である。

第21・22号土坑（第27図）

第20号土坑の西方約7.24mに位置する。北には第2号溝が近接する。第21号は第22号を切っている。両者とも形状は楕円形を示していたと思われるが、重複した姿はハート形を示す。大きさは概ね185×113cm、深さは第21号が20cm、第22号が35cmを測る。

第26～29・41号土坑（第28図、第31図3・4）

第10号土坑の南約5m、第4号溝の北約3mの付近に位置する。その範囲は概ね300×155cmであった。不整形にアメーバ状を示す本土坑は、精査の結果、5基の重複によることが明らかとなった。覆土断面の観察及び調査時での所見等から構築順位を示せば、第27号→第28号→第41号、第26号→第41号→第29号となる。しかし、第26号と第27・28号との前後関係が不詳のため、遺憾ながら、どの土坑が最古かを明確にすることはできない。ただ第26号土坑出土の土器片2点（第31図3・4）はいずれも縄文

時代加曾利b2式土器の特徴を示しており、構築時期の古さを暗示している。なお各土坑の深さは、第26号が19cm、第27号が19cm、第28号が8cm、第29号が4cm、第41号が23cmであった。

第30～32・49号土坑（第28図）

第20号土坑と第3C号溝の中間で検出された。4基の土坑が重複しているため不整形を示し、その範囲は概ね197×94cmであった。深さは、第30号が7cm、第31号が12cm、第32号が14cm、第49号が37cmを測る。なお、各土坑の構築順位は、第32号→第31号→第30号、第32号→第49号である。しかし、第49号と第30・31号との前後関係は不明であった。

第33号土坑（第28図）

第32号土坑の南東約50cmに位置する。大きさは34×20cmで長楕円形を示す。深さは5cm。

第34号土坑（第28図）

第17号土坑の北東約4mに位置し、南半は第2号溝に切られる。現存する部分での大きさは62×30cmであり、深さは8cmを測る。

第35号土坑（第28図）

第2号、第7号、第8号、第13号の各再葬墓に囲まれて検出された。大きさは約68×64cmでほぼ円形を示す。深さは17cm。

第36号土坑（第28図、第32図14・15）

第12号再葬墓の西に近接して発見された。大きさは155×82cmで長楕円形を示す。深さは46cm。土坑内からは2点の石器が検出されている。1点は長大な敲石（第32図14）で、両端に敲打痕がある。もう1点は肩の張る大型の打製石斧（第32図15）であり、刃部の片側が欠損する。

第37号土坑（第28図、第31図5）

第12号再葬墓の南東1.5mに位置する。大きさは103×76cmで楕円形を示す。深さは25cm。土坑の東壁際から口縁を僅かに欠損する小型の鉢（第31図5）が横倒しの状態で検出された。小型鉢の体部には無節の縄文が施されるのみ。器壁は若干外反気味の口唇部が薄くなる。底部には網代痕が見られる。

第38号土坑（第28図）

第12号再葬墓の南約50cmに位置する。大きさは130×87cmで楕円形を示す。深さは、一部西壁に寄って底面に小さな窪みが認められるが概ね25cmを測る。

第39号土坑（第28図）

第8号土坑の南西約90cmに位置する。大きさは90×58cmで楕円形を示す。深さは19cm。

第40号土坑（第28図）

第2号土坑の西約1.3mに位置する。大きさは76×55cmで楕円形を示す。深さは19cm。

第42号土坑（第28図）

第36号土坑の南約80cmに位置する。大きさは102×69cmで北西隅がピットを切っているが概ね楕円形を示す。深さは28cm。

第43号土坑（第28図）

第8号再葬墓を北側で切っている。大きさは概ね138×90cmで楕円形を示す。深さは32cm。

第44号土坑（第29図）

第4号溝と重複して検出された。第15号土坑の南西約1mに位置する。大きさは70×40cmで楕円形を示す。深さは26cm。

第45号土坑（第29図）

南側を第4号溝に切られ、第6号再葬墓の北約50cmに位置する。大きさは119×75cmで楕円形を示す。深さは23cm。

第46号土坑（第29図）

第4号溝にほとんどが切られ、底の部分が痕跡のように残されていた。第45号土坑の西30cmに位置する。現存する大きさは30×22cmで楕円形を示す。深さは13cm。

第47号土坑（第29図）

第46号土坑同様ほとんどが第4号溝に切られ、底の部分が若干不整形に残存するに過ぎない。第46号土坑の南西約1mに位置する。現存する大きさは44×31cmで概ね楕円形を示す。深さは約10cm。

第48・58号土坑（第29図、第31図6）

第46号土坑の北に近接し、第48号と第58号は重複関係にある。第48号は第58号の東隅を切って設けられており、土坑内からは糸切り底を持つほぼ完形の須恵器杯（第31図6）が1点出土している。大きさは51×37cmで、深さは38cm。第58号は、大きさ300×212cm、深さ12cmであり浅く大きな不整形を示している。

第50号土坑（第29図）

第6号土坑の北西約1.3mに位置する。大きさは92×60cmで楕円形を示す。深さは11cmを測る。

第51号土坑（第8図、第31図7）

第7号再葬墓と重複関係にあり、東側を切られる。大きさは推定約114×69cmで長楕円形を示す。深さは17cm。出土遺物としては一片の条痕が施文された壺の胴部破片（第31図7）が検出された。

第52号土坑（第29図）

第50号土坑の北西約2.3mに位置する。大きさは79×46cmで少し歪んだ長楕円形を示す。深さは14cm。

第53号土坑（第33図、第31図8・9）

第1号住居跡に切られて、西側の一部分のみが残存する。大きさは現存部分で45×12cm、深さは25cmを測る。出土遺物としては、幅広の沈線による長楕円と磨消縄文が特徴的な壺の破片（第31図8）と、壺の胴腹部から底部直上に当たる条痕文の施された大型破片（第31図9）が検出された。

第54～57・59号土坑（第29図、第32図16）

第52号土坑の南西約80cmに位置し、少なくとも調査時の所見によれば5基の土坑が重複しあっている。その範囲は不整形ではあるが概ね4.6×2.6mである。しかも、それぞれの土坑自体の形状も不鮮明なこともあり各土坑の構築順を明確にすることはできなかった。そうした中でも、やや安定した形状を示す土坑として第55号と第59号土坑があった。前者は65×55cm程の少し丸みを帯びた三角形形状を示し、後者は62×54cmの円形を示す。深さはそれぞれ13cmと43cmであった。なお出土遺物は、第55号土坑から基部欠損の石鏃（第32図16）を1点検出し得たとどまる。

第63～67号土坑（第29図、第31図10・11）

第52号土坑の北西約50cmに位置し、5基の土坑が2.35×1.1mの範囲で三日月状に重複する。深さは

第63号が5 cm、第64号が6 cm、第65号が37cm、第66号が47cm、第67号が38cmである。各土坑の重複関係を明らかにすることはできなかったが、少なくとも第65～67号は64～65号土坑より後の構築による。出土遺物としては、第63号、第65号からそれぞれ網代痕のある弥生土器の底部破片が検出された。

第68号土坑（第30図）

第5号土坑の北約1.7 mに位置する。大きさは50×38cmで隅丸長方形を示す。深さは約18cm。

第69号土坑（第30図）

第68号土坑の北西に隣接する。大きさは67×35cmで隅丸長方形を示す。深さは概ね20cmである。

第70～72・75～78号土坑（第30図、第31図12～16、第32図17）

第64号土坑の北西約1.8 mに位置し、概ね3.9×1.1 mの範囲に7基の土坑やいくつかのピットが細長く不整形に連なる。各土坑の前後関係は不明であった。深さは、第70号が25cm、第71号が20cm、第72号が27cm、第75号が44cm、第76号が48cm、第77号が16cmを測る。出土遺物としては、第70号から条痕文の施された壺の胴部破片（第31図12）と横刃形石器（第32図17）とが検出され、第70号からは口縁部と胴部破片が4点（第31図13～16）検出されている。

第73・74号土坑（第30図）

本土坑のみが調査区北半の溝の集中する地区で検出された。第15号溝と第20号土坑に挟まれて存在する。形は不整形だが、2基合わせて3.55×1.5 mの規模を持ち、深さも最深部で93cmを測る。

第79号土坑（第30図、第31図17）

第42号土坑の南に隣接する。大きさは93×57cmで楕円形を示す。深さは24cm。覆土上層からは正位の状態で小型壺が検出された。小型壺は、口径9.6cm、最大径12.9cm、器高17.2cmを測る。口縁から頸部にかけては整形上の擦痕が見られるのみで無文、胴部には2～3本を単位とした櫛状の施文具による条痕文が横位に、全面に渡って施される。底面には木葉痕が見られる。なお、この土器の口縁部下には木の圧痕が認められ注目された。

3 住居跡

本調査では2軒の住居跡が調査された。いずれも古墳時代の所産であり、調査区の南東部で検出された。当該地区は弥生時代の再葬墓や土坑が密集する場所、つまり弥生時代の墓域である。古墳時代には墓域としての記憶がすでに喪失していたことが窺える事例となろう。

第1号住居跡（第33・34図）

V-10 グリッドを中心に検出された。北東のコーナー部分が若干調査区外に当たり、欠けてはいるが、一辺約4.25 mの隅丸方形を示す。地床炉は住居中央より北東部にやや偏って検出された。周辺には焼土の他にも炭が散在していた。柱穴状の穴は4か所認められたが、上屋構造を想定できるまでには至らない。南～西壁に寄った部分には不定形の浅い掘削の跡が検出されたが、恐らく掘方であろう。なお、本住居跡は第1号と第53号土坑を切って構築されている。

（出土遺物）

第33図掲載の4個体の土器は本住居址に伴ったもので、いずれも古墳時代前期五領式土器に比定され

る。しかし、本住居跡の覆土には第34図掲載のごとく多数の弥生時代の土器破片が混入していた。おそらく再葬墓や土坑が集中する地域でもあるという事情と関わるのであろう。

石器は2点出土している。第34図16は側縁の一部に細かい調整剥離が認められる。17は軽石製の砥石。金属製の刃物等によると思われる鋭い溝が見られる。裏面にも4条の浅い溝が認められる。

第2号住居跡（第35図）

U-13グリッドを中心に検出され、中程を第4号溝が横切っている。住居形態は隅丸方形であり4.6×4.5mの規模を有する。地床炉はほぼ住居中央にあり、焼土塊が隣接して存在する。柱穴状のピットは散在して確認されたが上屋構造を復元するには至らない。また、南西壁と北西壁の際には炭化物や焼土ブロックが検出された。

（出土遺物）

本住居跡に関わる土器は1の埴1点のみ。古墳時代前期五領式土器に比定されよう。他には4点の石器が検出されたが、覆土への混入品であろう。2はガラス質黒色安山岩製の縦型石匙、3は円形状のスクレイパー、4・5は小型の撥形打製石斧である。

4 溝

調査区全域にわたって大小22条の溝が検出されたが、確実に溝に伴ったとみなされる遺物はなく、いずれの溝も遺憾ながら時期不詳とせざるを得ない。

第1号溝（第4・39図）

調査区の最東端且つ最南端で検出された。溝幅は約30cmで、途中途切れる箇所はあるが、東西に10.4m程の長さが調査された。溝の断面は深さ9cmという浅さのために不詳と言わざるを得ないが鍋底状を呈している。

第2号溝（第27・28図・36図）

調査区を南北に分ければ南地区の最北端に位置する。幅約45cmで、確認された長さは東西37.5mに及び、途中第20号土坑、第34号土坑を切っている。深さは約20cm。

第3号溝（第36・39図）

第2号溝の南約2.5mに位置し、第2号溝に並行するように検出された。断続部分が大きいために調査時には東から3A号、3B号、3C号と仮称したが、本報告では同一溝と判断した。幅は40～50cmで、東西の長さは断続的に16.8mまで確認できた。深さは最深部でも約10cmを測るに過ぎない。

第4号溝（第35・36図）

第2号住居跡を横切ってから、その南方2m程で第4号溝は西へと大きくカーブして、そのまま西へと伸びていく。途中、第14号土坑、第6号再葬墓、第45～47号土坑を次々と切りながら。総延長は約30mを測る。確認面での溝幅は約45cm、深さは約18cmであるが、本来は第35図に明らかなように結構深い溝であったようだ。

第5号溝（第37・39図）

調査区最北端に位置する溝。幅50cmほどで東西に伸びる。長さは約23m。深さは概ね30cm強を測る。

第6・7号溝（第37・39図）

第5号溝の南約2.8mで検出された。溝は北西―南東へと伸びるが、第8～10号溝と途中で重複し、第6号溝はさらに伸びて第11号、第12号溝と重なる。土層断面から、第6号は第7号を切って構築されたことが明らかであり、溝幅も第6号で見る限り本来は約2mあり、深さも55cm以上あったようである。なお、並行する溝の北側が第6号溝であり、総延長約34mを測る。

第8～10号溝（第37・39図）

第7号溝の南に位置し、第6・7号溝と合流する。北から順に第8号、第9号、第10号と称するが、構築順は不詳。深さは第8号から順に、14cm、11cm、27cmを測る。

第11・12号溝（第37・39図）

第11号溝は、第6号溝とG-27グリッド付近までは重複するが、その地点から南へとそれる。第12号溝は第6号とともにさらに東へと真っ直ぐ重複したまま伸びる。溝の幅は第11号が70cmほどだが、第12号は不詳、深さはいずれも20cm前後を測る。

第13号溝（第37・39図）

第6号溝の北側で僅か2.2mの長さが確認されたにすぎない。深さは約15cmを測る。

第14・15号溝（第37・39図）

第10号溝の南に位置し、二本の溝は途中まで重複して並行し、そのうち第15号溝は南へと方向を変える。それぞれの溝幅は70～80cmを測る箇所もあるが形骸のような部分もある。深さも深いところで第14号が9cm、第15号が20cmを測る。

第16～19号溝（第38・39図）

最も広く、長く確認された溝。しかし、詳細に見ると4本の溝が並行して重複するために幅広く見えたにすぎない。北側から第16号、第17号、第18号、第19号と呼称したが、それぞれの前後関係を明らかにすることはできなかった。全体的には概ね東西に伸びてはいるが、丁度中間あたりから二又に別れつつ（第16・17号と第18・19号）北へと湾曲しており、総延長約51mを測る。第18・19号はさらに途中から第19号が別れる。断面を切った部分での溝のデータは、幅が第16号が80cm、第17号が100cm、第18号が150cm、第19号が推定85cmであり、深さは第16号が10cm、第17号が30cm、第18号が85cm、第19号が30cmであった。

第20号溝（第37～39図）

第11号溝と第16号溝の間で両者に直交するかのように確認されたが、実際には接続はしていない。溝幅は約50cm、深さは約8cmであった。

第21・22号溝（第38・39図）

第21号と第22号は合さりつつ第18・19号溝と合流する。確認された部分が少なく詳細は不明であるが、幅は第21号が約40cm、第22号が約45cm、深さは第21号が約30cm、第22号が約22cmであった。

5 遺構外遺物

a 土器（第40～51図）

以下のとおり、本遺跡出土土器を便宜上4群に分けて説明する。すなわち、第Ⅰ群は縄文時代の土器、第Ⅱ群は弥生時代の土器のうち装飾的なもの、第Ⅲ群はいわゆる条痕文の土器、第Ⅳ群は底部である。

第I群土器（第40図、第41図、第51図）

1類（第40図1） 幅狭の半截竹管による平行沈線が口縁部に2列巡らされる。以下はLR縄文。口縁部から口唇部にかけての作りも考慮すれば、縄文前期諸磯a式土器の深鉢の破片と考えられる。

2類（第40図2～4・8） 波状口縁の深鉢。口縁内側には凹線や刺突列等が見られ、さらに胴部上半には内外面に沈線文様を施すという特徴がある。

3類（第40図5・6） 2類類似の波状口縁深鉢だが、内面に文様を持たない。一巡する横帯文には特徴的な階段状の区切文が見られる。地文はLR縄文。

4類（第40図7・9・10） 問題はあるが、横帯文の深鉢、突起を持つ深鉢、梯形状の波状口縁を持つもの等を一括する。横帯文の深鉢の口縁内側には凹線が残る。

5類（第40図11～21） 底部から口縁に向けて直線的に広がる深鉢。口唇は角頭状に成形され、口縁内側には凹線が見られる。磨消縄文による横帯文は幅が広く3本沈線による二段構成のものが一般的で、区切文が施される。縄文施文のないものもここに一括した。

6類（第40図22～26） 前類に比べるとやや内湾気味の口縁を持つ深鉢であり、文様も横帯文ではなく曲線的なモチーフが巡らされている。25・26は内屈する口縁を有する深鉢かも知れない。

7類（第40図27、第41図1～5、第51図4） 格子目文を有する深鉢。半粗製土器とでも言えようか。角頭状の口縁内側には通常凹線が巡らされるが、第51図4例はそれらとは若干趣を異にしており、口縁は内屈気味に作出されている。文様としては、上下の並行沈線に挟まれた部分に格子目文が配されるものと、ただ胴部上半に格子目文が施されるものの二者が認められる。

8類（第41図6～10） 断面三角の紐線文を口縁に巡らす粗製深鉢を一括したが、紐線には一本のもの、二本のものがある。紐線下には沈線が認められるが、具体的なモチーフは不詳である。

9類（第41図11～12） 口縁が紐線により肥厚する粗製深鉢。紐線上は横長の窪み列が配され、以下胴部には縦に櫛状の沈線がまばらに施される。

10類（第41図13） 大きく外反した口縁部には格子目文が巡らされる。以下は無文。鉢形か。

11類（第41図14～18） 口縁が内屈もしくは内湾し、横帯文が口縁部から胴部にかけて巡らされる浅鉢類。14は口縁に横8字の粘土紐が貼付され、沈線相互の間隔が狭い横帯文上には「の」の字文が重ねられているが、16・17は麁手状の沈線文様が見られる。

12類（第41図19～24、第51図1・2） 算盤玉状に内屈する形態の鉢。屈曲上部が主たる文様帯であり、玉抱き状入組文や連弧状の磨消縄文が巡らされ、屈曲部は連続刺突文、そして屈曲部下は矢羽根状等の沈線文が施される。

13類（第41図25～26、第51図3） 12類よりも屈曲の度合いが緩く、口縁部は内湾気味に立ち上がり、屈曲部下は緩やかに湾曲をもって底部へと移行する浅鉢。屈曲部には連続刺突列が巡らされ、口縁部は無文あるいは縄文帯を持ち、要所に「の」の字風の遺制を残した区切文が配される。胴部には擦痕を強いてとどめたやや菱形状に構成される横帯文と特徴的な区切文が見られる。

14類（第41図27） 器肌に擦痕のみの見られる浅鉢。厚手の土器であり、口縁内側に凹線がある。

15類（第41図29） おそらく注口土器の口縁部破片であろう。

16類（第41図28） 口縁が外反し、胴部にくびれを持つ平縁深鉢。口縁にはやや斜の縦長の瘤が貼付

され、瘤を基点に半円弧状の磨消縄文が配される。

第Ⅱ群土器（第42図、43図1～41、第45図21～28）

1類（第42図1） 深い沈線により工字文状の文様が施され、一對の豆粒状の貼付文が見られるもの。豆粒間はへら状工具により縦に抉られている。

2類（第42図2～8） 1類近似の工字状文様が見られるが、一對の豆粒状貼付文はなく該当箇所には若干の盛り上がりが見られるに過ぎない。また1類で見られたような豆粒間の縦の抉りは、5で窺われるように「」状となっている。4では1段の網目状交点をもつ文様との併施も見られる。沈線は拓影図には現れないが、結節状に引かれているものもある（2・3・5）。

3類（第42図9～11） 1段の網目状交点を持つが、交点部を囲むように刺突痕が見られる類。交点部には若干の隆起が認められる。

4類（第42図12～14） 変形工字文が見られる鉢。本来豆粒状の貼付文があったと思われる箇所には若干の隆起が認められる。

5類（第42図15） 壺形土器の口縁部か。波状口縁を示す。口唇上には沈線が施される。文様としてはLR縄文を地文に平行沈線と1段の網目状交点が見られるのみだが、比較的繊細である。

6類（第42図16～26） 1段の網目状交点を持つものを一括したが、厳密には器種別、あるいは文様の繊細なもの（16）とは分けるべきかも知れない。また、地が無文のもの（16・17）、LR縄文地のもの（18～21）、擦痕地のもの（22・23）、条痕地のもの（24～26）の別も存在する。16・18・24・25の交点部はやや隆起し、また交点部の上下の沈文部がとりわけ深かったり（20）、抉られているものもある（21）。なお、21・23の沈線内には赤彩が一部で認められる。

7類（第42図27～41、第43図6・7） 前類までは沈線文様でありながら、陰陽のバランスが良く、見方によっては陽文様ともみなすことが可能であった。しかし、本類は明らかな沈線文様。前類近似の文様（28・29）も確実に存在するが、口縁の平行沈線下には鋸歯状もしくは菱形状の文様展開が基本となっているようだ。32には菱形文様間に縦沈線が付加されている。27～29の受け口状の口唇上には沈線が巡らされる。27の小波状の頂部にも胴部文様と同一施文具による短沈線が配されている。6・7はやや異質な文様構成の土器だが便宜的に本類に含める。

8類（第42図42～50、第43図1～5・8～10、第45図21） 基本的には7類近似であり、地文にLR縄文のある類を一括する。45は平行沈線と鋸歯状文様の交点部に豆粒状の貼付があり、48は若干の隆起が認められる。1は三条の平行沈線上に縦切沈線があり、3は同様の箇所に6ヶの円形刺突文を集中させている。49・9には縦沈線が付加され特徴的な文様となっている。

9類（42図51・52） 7・8類近似の文様だが、胴部に条痕が認められるもの。

10類（第43図11～26） 特に横位の沈線が認められるもののみを一括した。沈線は一条乃至二条を一単位とするようだが、三条以上も見られる。地文も縄文のもの（19・20・24）、条痕のもの（21・25・26）も含む。

11類（第43図27・28） 内湾する器形で、折り返し口縁を示すもの。折り返し口縁上には列点が二条施され、以下には曲線モチーフが見られる。

12類（第43図29～34、第45図26） 口縁に縄文帯を持つもの。29・30・26は縄文帯下の整形のせ

いかやや肥厚した口縁となっている。31～33は折り返し口縁。31の口唇上には刻列が観察される。

13類（第43図35～41） 便宜上縄文の施されたものを一括したが、中には撚糸施文（37）もある。

14類（第45図22・23） 比較的大型の壺。22は頸部から肩へと移行する部分であり、縄文地上には波状沈線が見られる。23は肩から胴腹部へと移行する部分であり、沈線のみによる充填文様が描かれる。

15類（第45図24・25） 器台部分。詳細は不明。

16類（第45図27・28） 27は充填刺突文が特徴的な鉢と思われる土器の底部であるが、7類の第42図28・29等に類似する交点部を持つ。28は平行沈線と三本沈線による連弧状の文様が見られる丸底の皿。しかし、27・28ともに蓋の可能性も否定できない。

第Ⅲ群土器（第43図42～第45図20）

1類（第43図42・43） 壺形態になるのか甕形態かは不鮮明だが、胴部にのみ竹管状施文具による条痕が見られる。

2類（第43図44・45、第44図1・2・7） 外反する口縁は無文で、胴部には条痕が施されるもの。口縁と胴部との境には沈線が巡らされる例（2）もあるが、むしろ口縁無文部は削り取ることにより画然と胴部から分離されるものが一般的なようだ。条痕は44・1が櫛歯状、2が束状、7が竹管状である。

3類（第44図3・4・6、第45図4・5・7・9） 口縁部が外反するという点では2類と同じだが、本類は全面条痕。条痕には櫛歯状、竹管状等がある。

4類（第44図5・8～23、第45図6） 口縁部が内湾する器形のものを一括。うち14・15は口唇に近づくにしがって器壁の厚さを減じるという特徴が看取され、他とは若干趣を異にする。条痕は竹管状のものが比較的多いが、次いで櫛歯状、へら状のものとなっている。しかし、第45図6の条痕は貝殻条痕と思われる。

5類（第44図24・25、第45図1～3・8） 口縁が直に開く器形のもの。全体的に条痕は前類までと同。3の条痕は、条痕というよりも半截竹管による平行沈線を斜に引いたとでもいうような外観を示す。

6類（第45図10～20） 条痕の施された胴部破片を一括した。

第Ⅳ群土器（第46図～50図）

1類（第46・47図） 木葉痕のある底部を一括。底面が外方へ大きくはみ出すような形状の底部が多いが、はみ出しが小さいかほとんど見られないもの（第47図9～20）もある。第47図18・19は底径の小さい類である。

2類（第48図） 網代痕のある底部を一括。底面が外方へ大きくはみ出すような形状の底部は木葉痕のものほど目立たない。編み方は、2本1組による2本超え2本潜り1本送り（11・12）、2本超え2本潜り1本送り（2・3・5～8・10・13・14）、2本超え3本潜り1本送り（1・9）、3本超え3本潜り1本送り（4）の4種が確認できた。3は模様編み。

3類（第49図、50図1～13） ザル編み痕のある底部を一括。底面形状のバラエティーは2類と同。編み方は、1本超え1本潜り1本送り（第49図1・3・4、第50図5・9～11・13）、1本超え2本潜り1本送り（第49図2・5～16、第50図1～4・6～8）の2種が確認できた。第50図12は緯材が2本1組のように見受けられる。第50図1は模様編み。なお、第50図9～13の原体は細いのみではなく、質感がかなり柔らかくある種の繊維を思わせる。

4類(第50図14・15) 底面に圧痕等の見られないもの。14は若干の張り出し底で、胴部には縄文が見られる。15の底部ははみ出し状であり、胴部には竹管による条痕が施されている。

b 石器(第52～61図)

打製石斧(第52～56図)

第52図1～7は分胴形打製石斧。1は両面に自然面が残り、礫素材から作られている。3・7は成形時のものと思われる敲打痕が認められる。3は基部欠損品、5は刃部欠損品である。

第53図1～6、第55図1・2、第56図3は肩の張らない撥形打製石斧である。第53図2は刃部欠損品。第53図3～5は自然面のカーブをそのまま利用して刃部を形成しており、刃部表面にはほとんど調整剥離痕は確認できない。第53図6は刃部欠損、第55図1は刃部側縁を欠損している。第55図2は両面に自然面を残す。第56図3は小型で直刃となっている。

第54図1～7、第56図1は肩の張る形態の撥形打製石斧であるが、第54図2は分胴形に近く、第54図5は肩の張りがやや弱く、第54図4、第56図1は強い。第54図1は片面に自然面を大きく残し、基部はやや抉れる。第54図3はやや抉りが入り、直刃。第54図6・7は分胴形の可能性のある欠損品。

第55図3～7、第56図2は基部を欠損するが、厚さ等から大型の撥形になると思われる。

第56図4・5は短冊形打製石斧であるが、第56図4は欠損部分も大きく他の形態の可能性も否定できない。第56図5は側縁全面に調整剥離が施され、幅狭で細長い形状を示す。

磨製石斧(第56図6)

横方向の研磨痕が観察される。稜は弱く、刃部は欠損している。

石皿(第57図1～4)

1～3はいずれも欠損品であり、詳しい形状は不詳。1は厚い部分、2・3は薄い部分の破片である。いずれも凹石としても利用されていたようだ。4は概ね完形であり中央部がなだらかに窪む。

磨石(第58図1～5)

1～4は側縁に敲打痕が顕著に認められ、敲石としての使用頻度の高さも窺える。5は両面の中央部に窪みを有する。

砥石(第58図6～9)

6は粗い砂岩製で、側縁全面に研磨痕が認められる。7は細かい擦痕が表面全体に見られる。8はシルト岩製で、一部表面が剥落している。9はかつて石包丁様石器と称呼されたこともある縄文晩期に特徴的な形態の砥石である。

石鏃(第59図、第60図1～3)

第59図1～5・9～18は無茎鏃である。うち1～3・5は平基。1は砂岩製で粗雑な作りである。9・10・12～18は凹基。9・15・17は基部の抉入が弱く弧状を示す。15は裏面に主要剥離面が見られる。10・12・14・16は基部の抉入は深く調整は細かい。13は先端部をわずかに欠損する。4・11は円基。4は表面右側縁に調整が集中するが、先端部の調整は粗く鋭さが無い。11は側縁全面に細かな調整が施されている。

第59図19～26は有茎鏃である。19・21・24は基部欠損。19～23は比較的丁寧な作りであり、両側

縁には細かい調整剥離が施されている。23 は非常に小型であり、基部は若干凹む。24 は先端部片側がやや肩を持つ形状を示す。欠損箇所を再調整したものであろう。26 は片側の返しが欠損している。

第 60 図 1～3 は尖基鏃。いずれもやや凸基気味である。

なお、第 59 図 6～8 は基部を欠損しており形態は不詳である。

スクレイパー（第 60 図 5・7・10・16）

5 は表面右側縁、7・16 は両側縁に細かい調整剥離が施され、10 は剥片の一部に調整剥離が見られる。

横刃型石器（第 60 図 13）

表面には自然面を残し、刃部は調整されていない。裏面には縦方向の主要剥離面が残り、側縁全面に調整剥離が施されている。

円盤状打製石器（第 60 図 14・15）

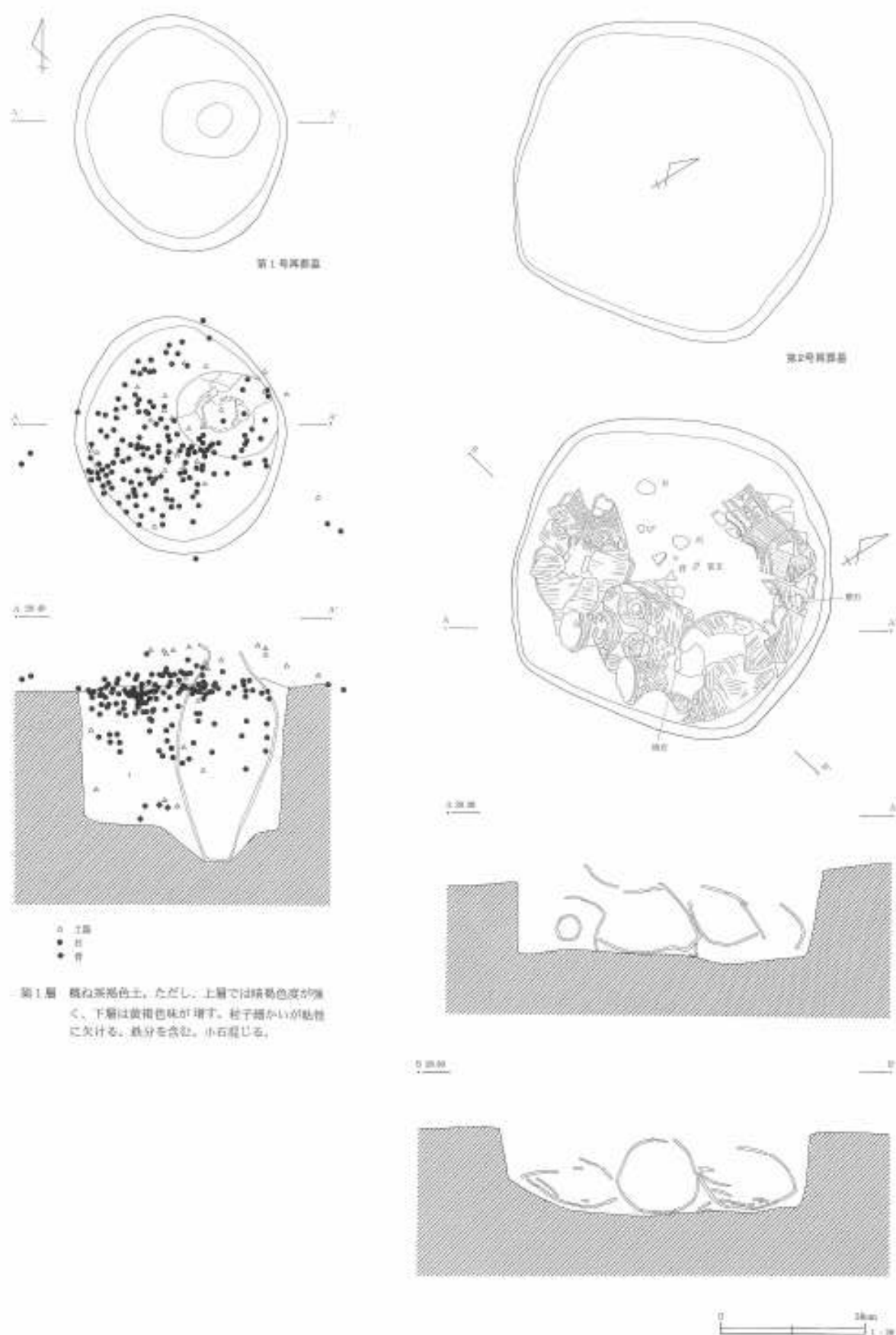
14 は肉厚で側縁全面に階段状の調整剥離が施されるが、表面には自然面が残り調整剥離はほとんど施されていない。15 は 14 に比較するとやや扁平であるが、ほぼ同じような作りである。形状的に円形に近いことから環状石器の未製品である可能性も否定できない。

剥片石器（第 60 図 4・6・8・9・11・12）

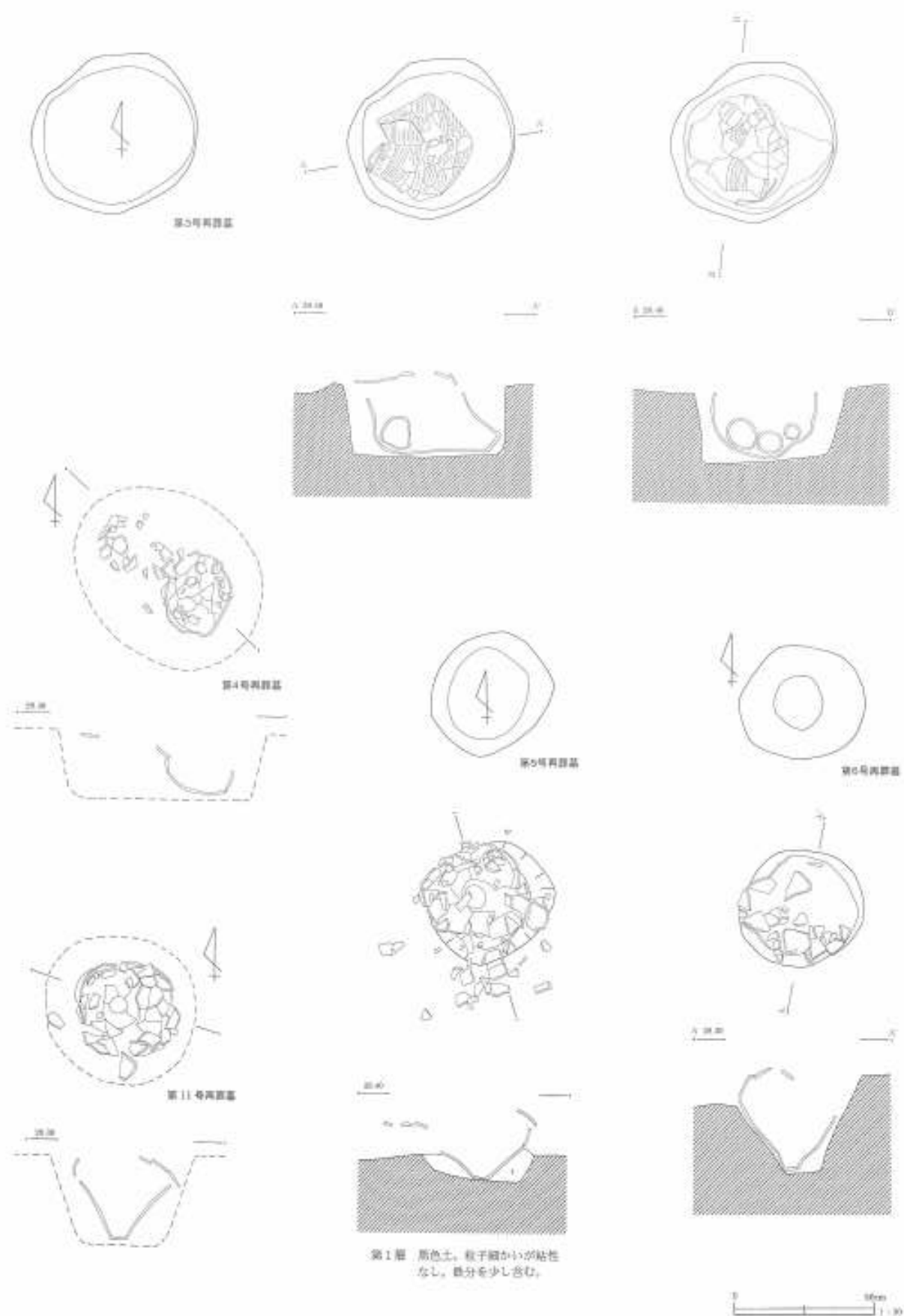
4・6 は横長剥片末端に使用痕が残る。8・9 は縦長剥片の一部に使用痕が認められる。11・12 は抉りが設けられている類。いずれも小型で、抉りが入る箇所は細かい調整剥離がみられる。ノッチドスクレイパー、あるいは石鏃の未製品であろうか。

玉類（第 61 図）

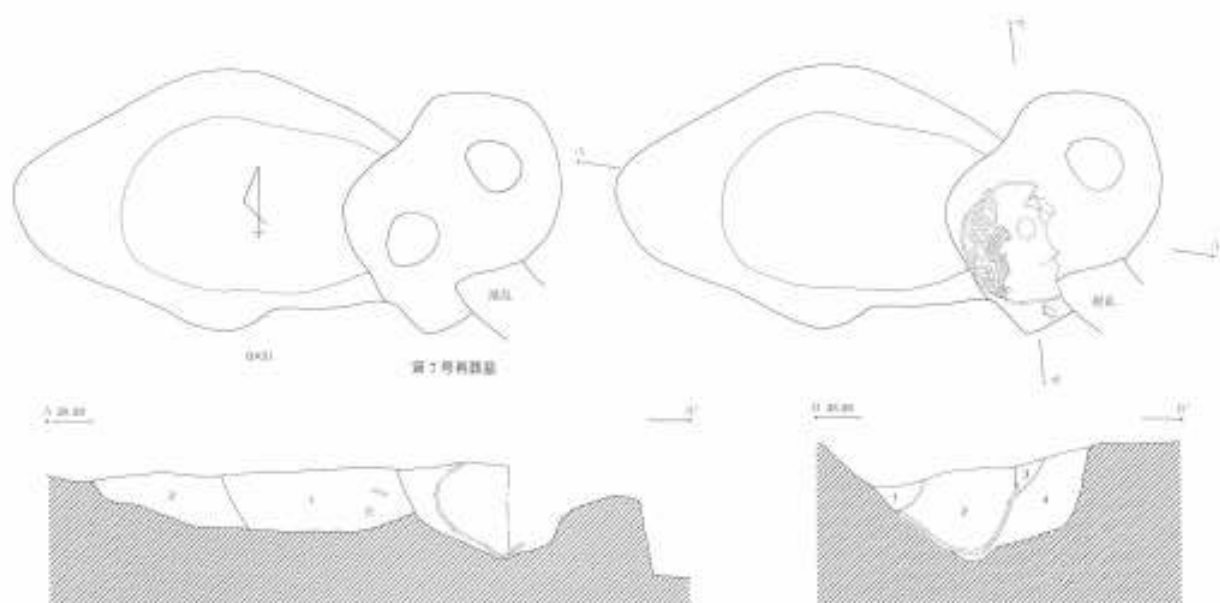
1～9 はいずれも滑石製の白玉。全てが両面からの穿孔による。10 の垂飾はヒスイ製品であるが、つくりはやや雑であり、穿孔は裏面からのみである。



第6図 第1号・第2号再葬墓

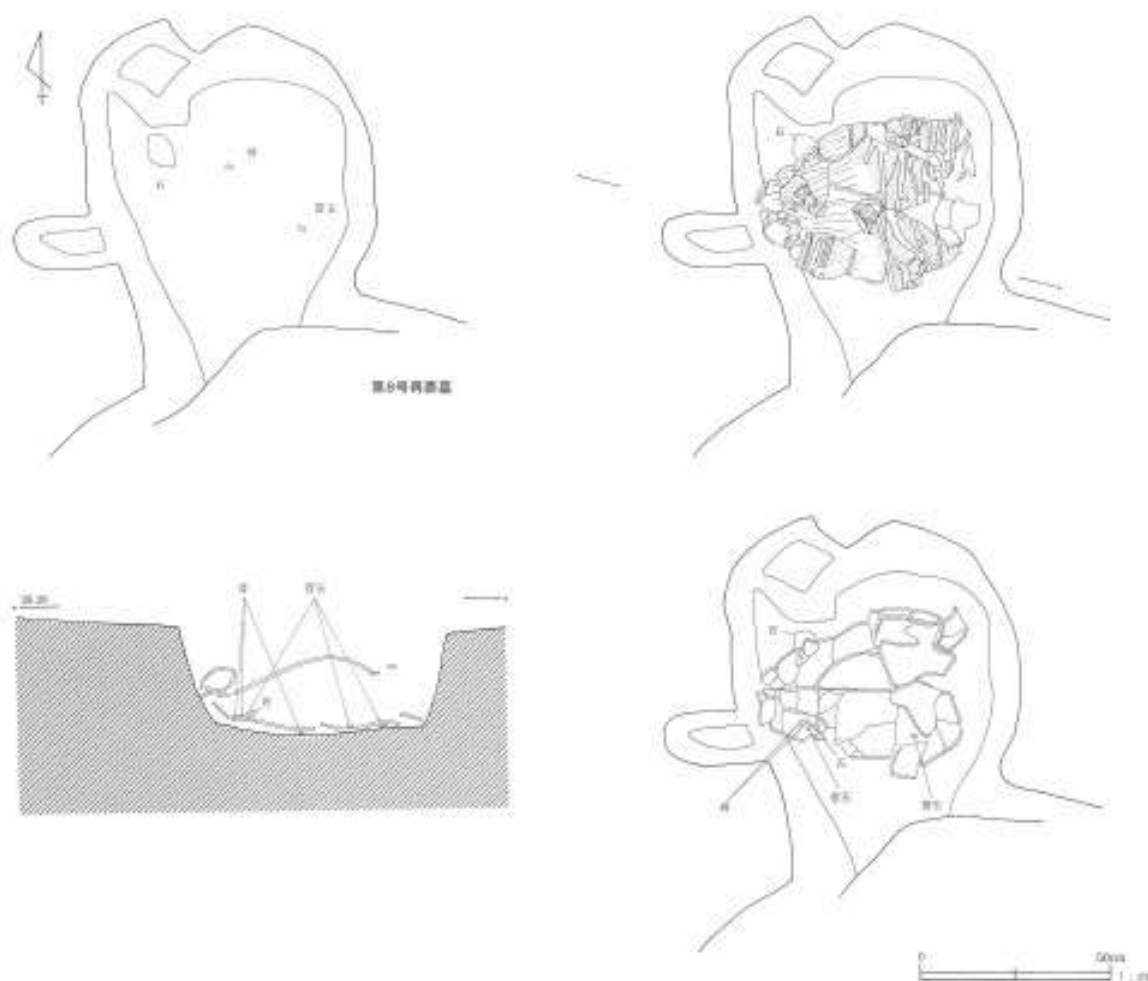


第7図 第3～6・11号再葬墓

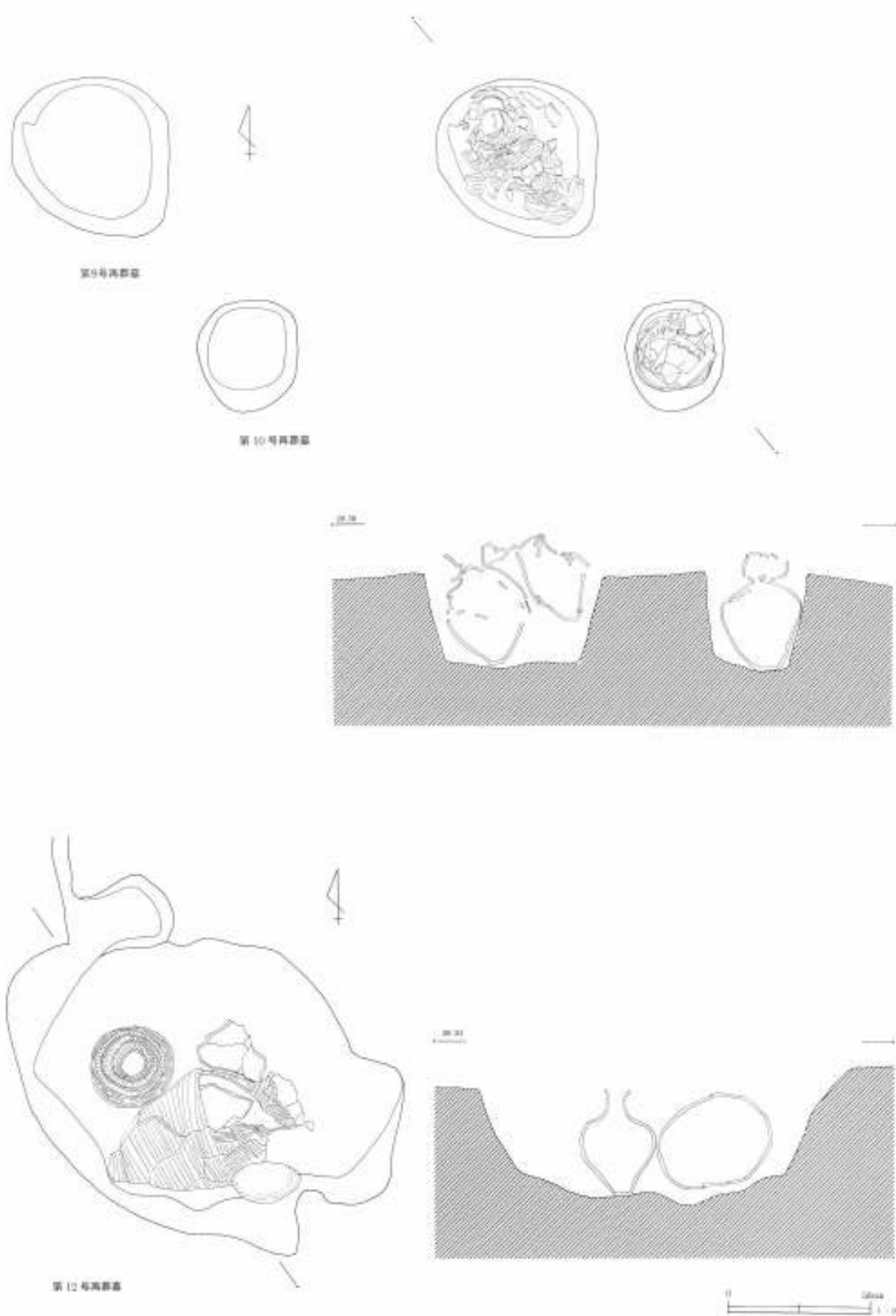


第1層 暗灰褐色土。粒子やや粗く粘性なし。鉄分少し含む。
第2層 暗緑褐色土。砂質で粒子細かい。若干鉄分を含む。

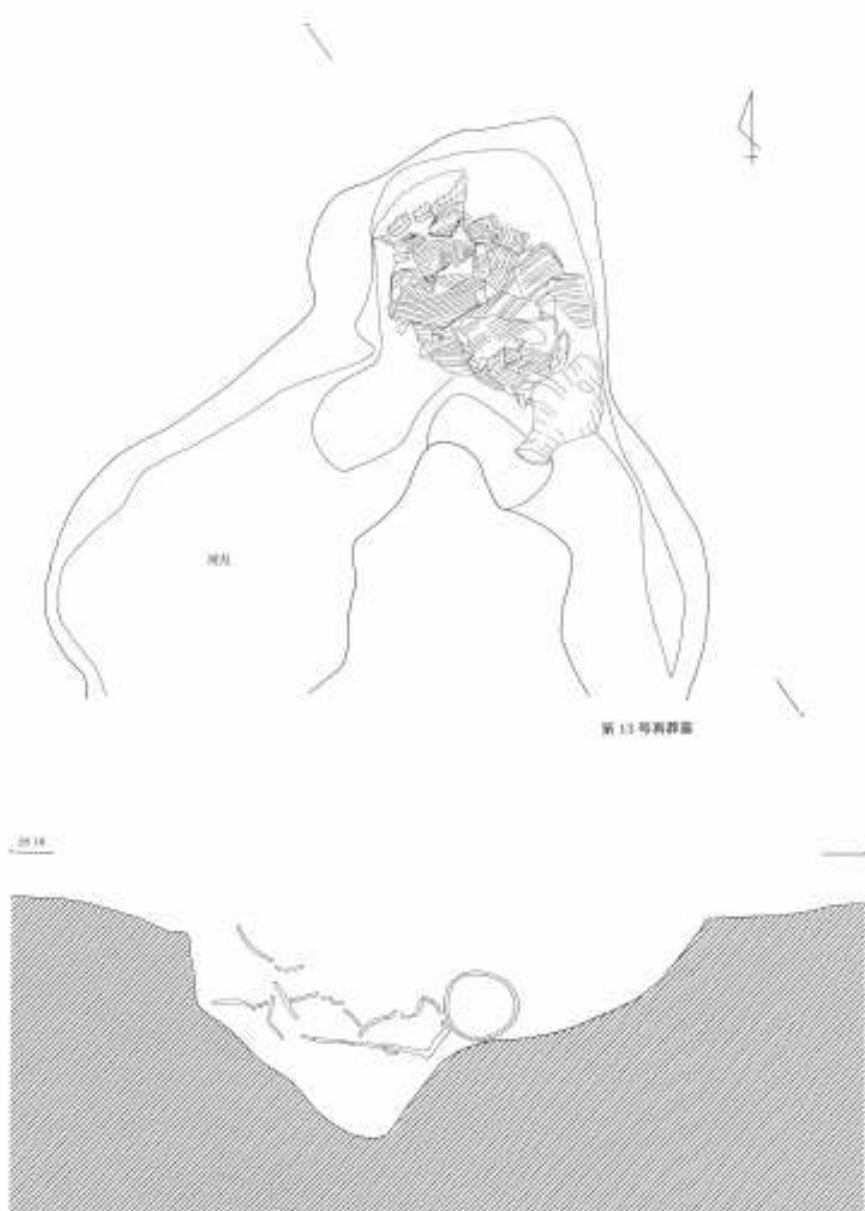
第1層 暗緑褐色土。砂質で粒子細かい。若干鉄分を含む。
第2層 暗褐色土。粒子細かいが粘性なし。（土器の中）
第3層 暗灰褐色土。粒子やや粗く粘性なし。鉄分少し含む。
第4層 灰褐色土。粒子やや粗く粘性なし。鉄分多く含む。



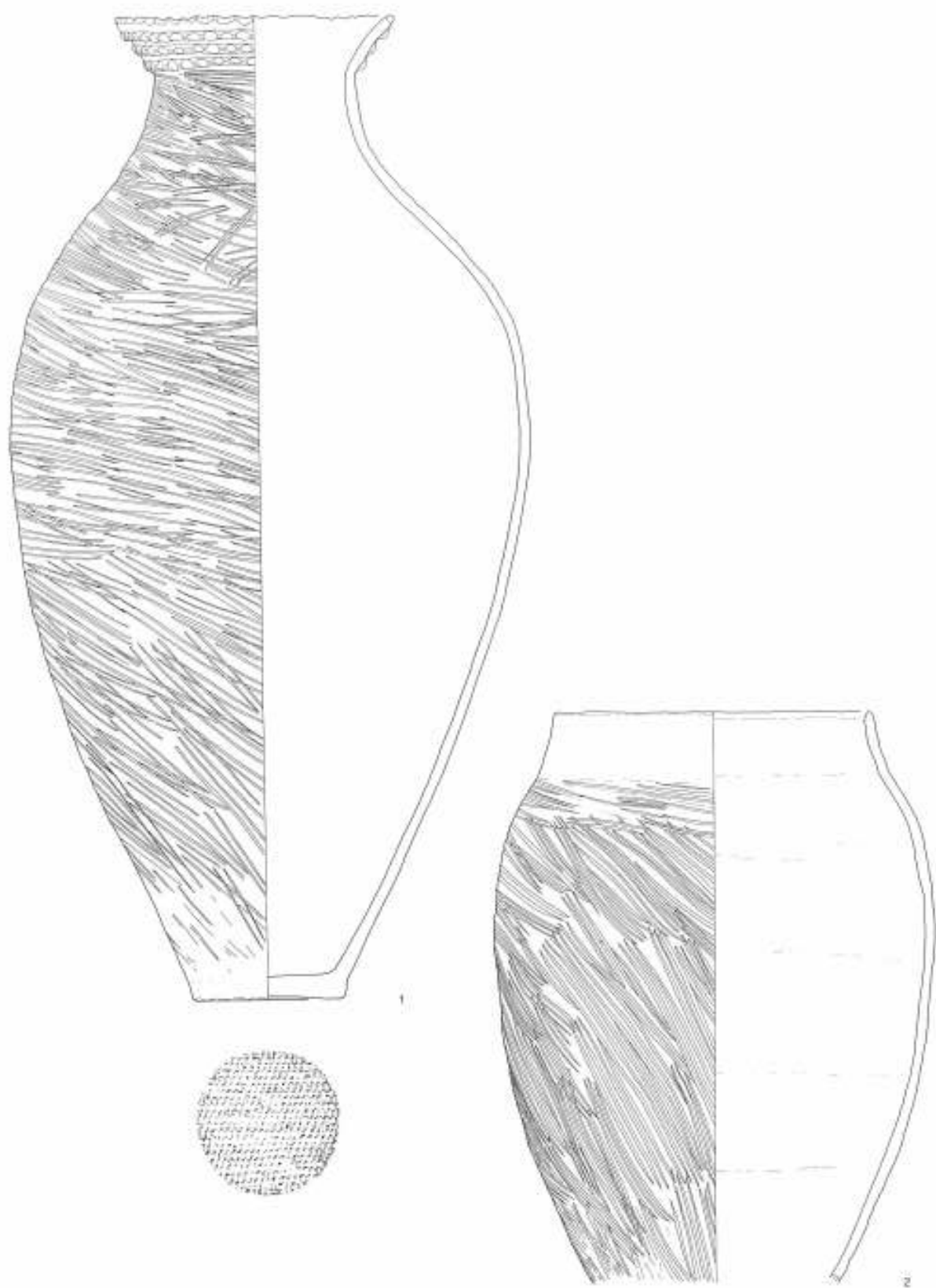
第8図 第7・8号再葬墓



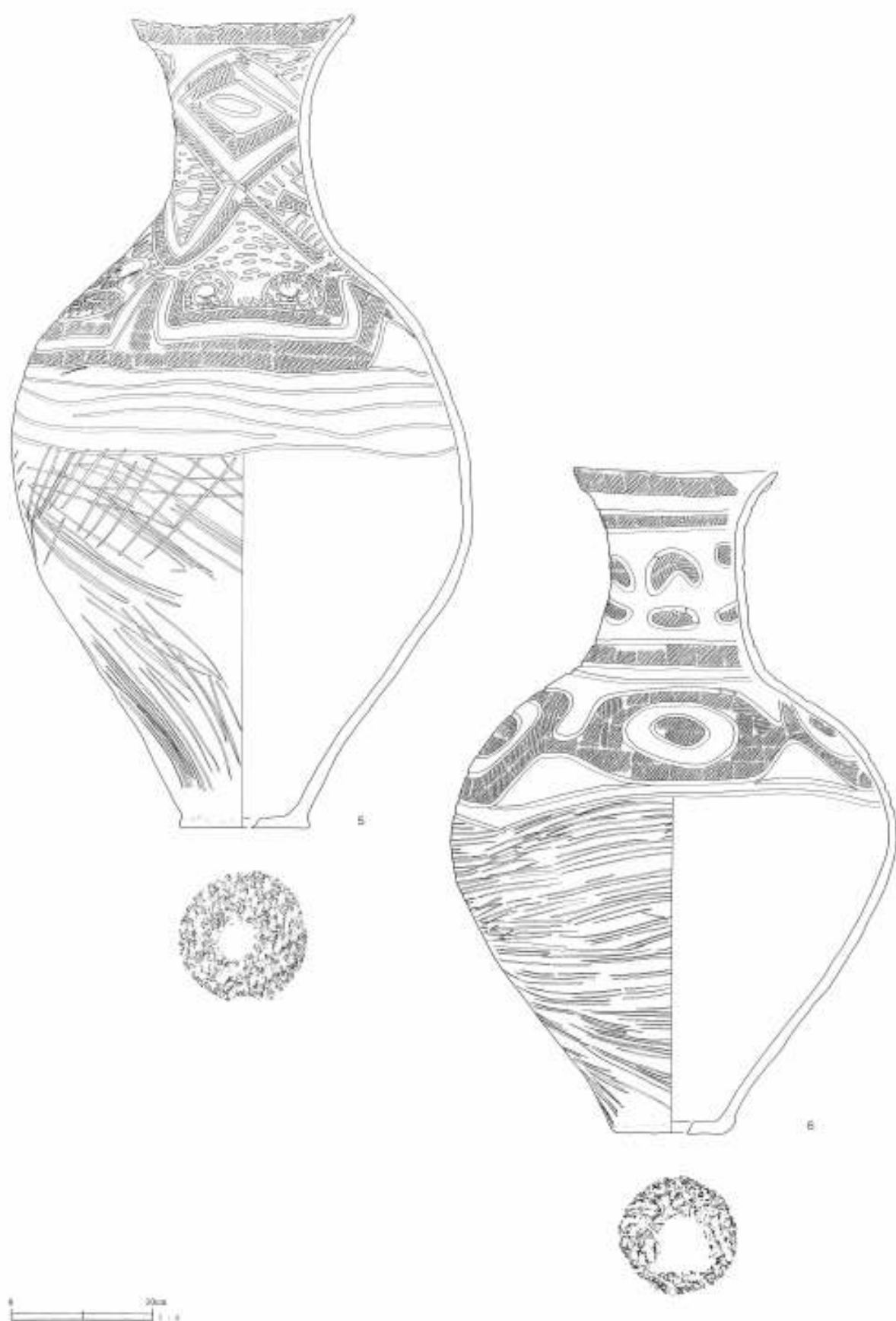
第9图 第9・10・12号再葬墓



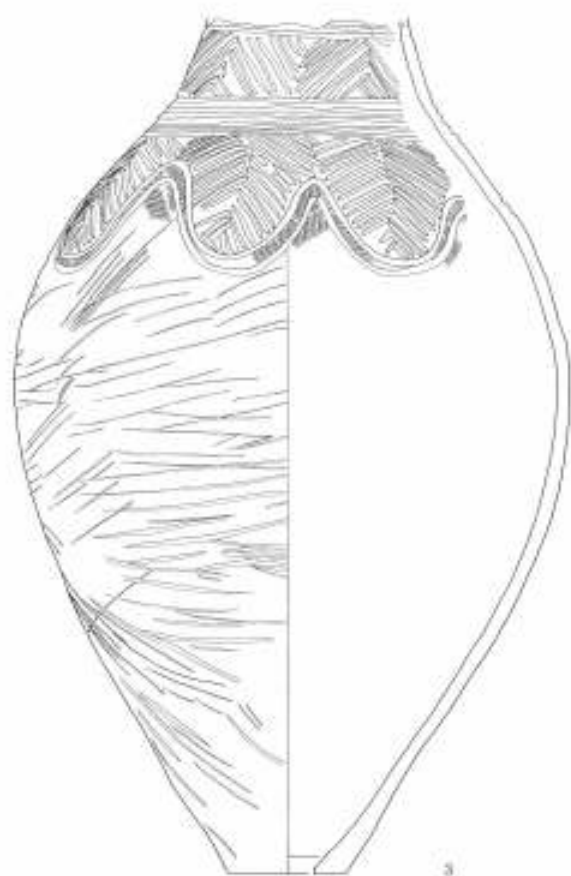
第10圖 第13号再葬墓



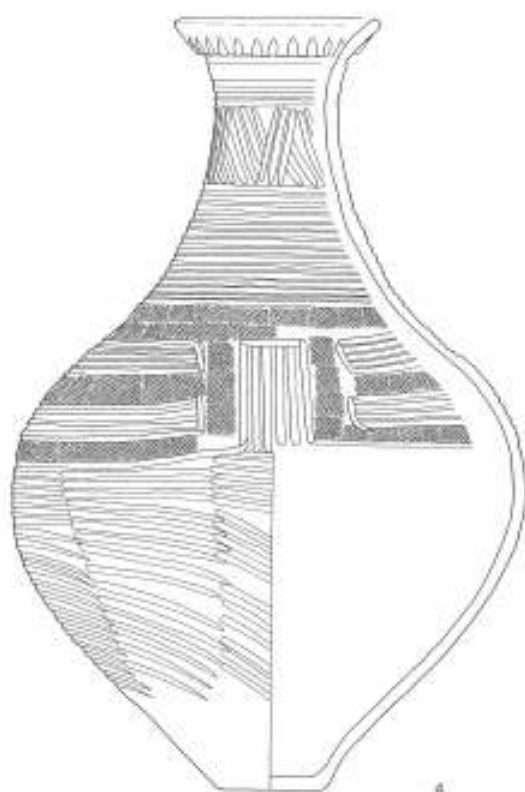
第11圖 再葬墓出土土器（1）



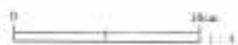
第12图 再葬墓出土土器 (2)



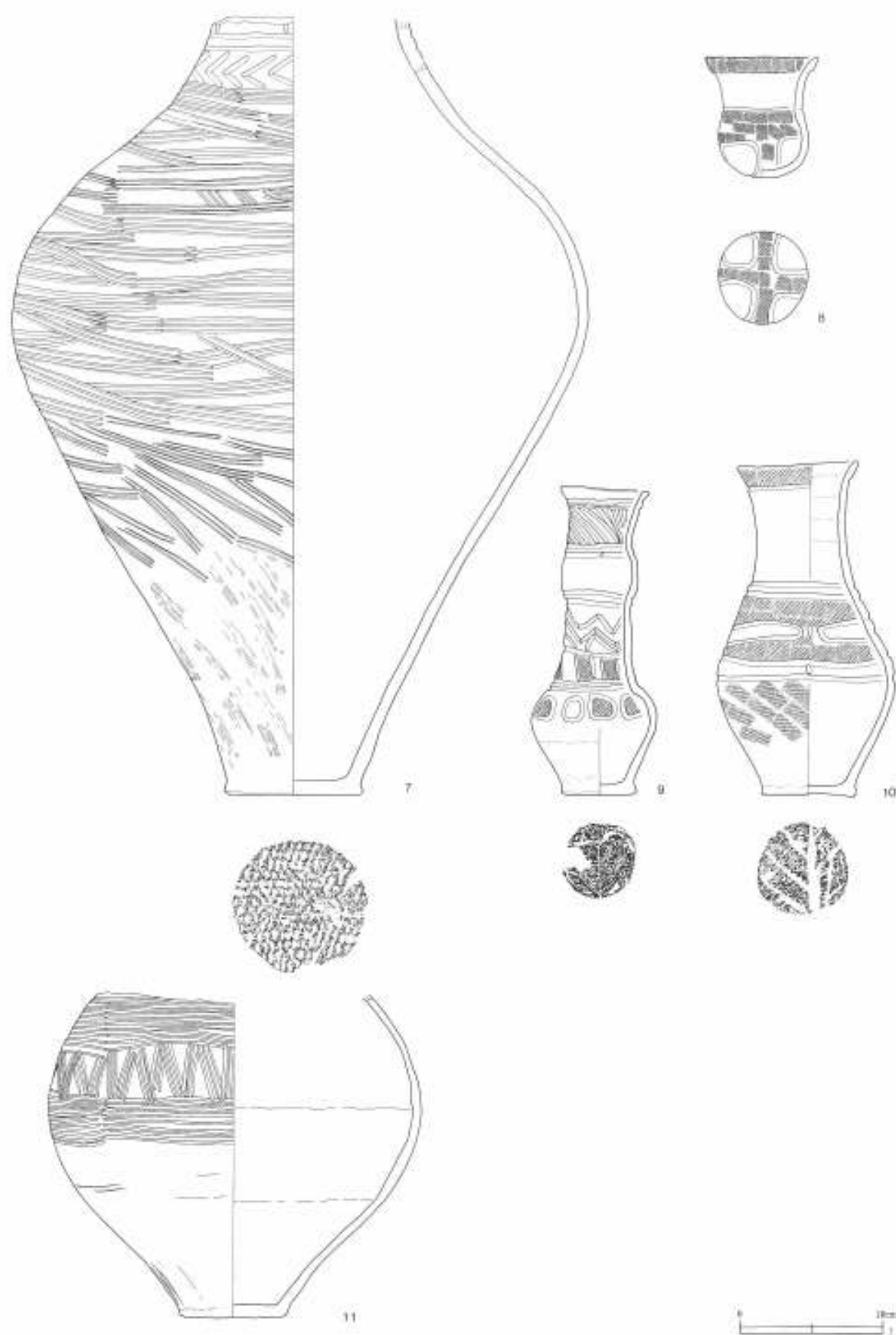
3



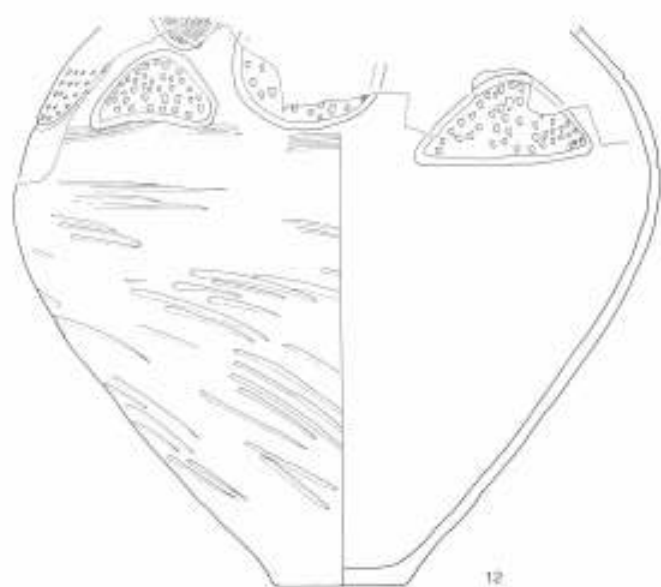
4



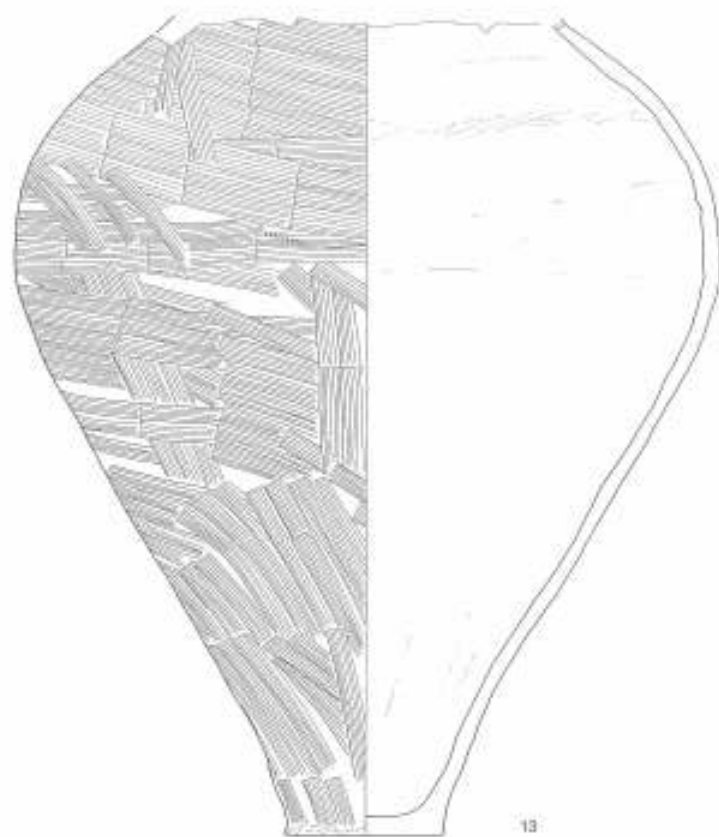
第13図 再葬墓出土土器 (3)



第14図 再葬墓出土土器（4）



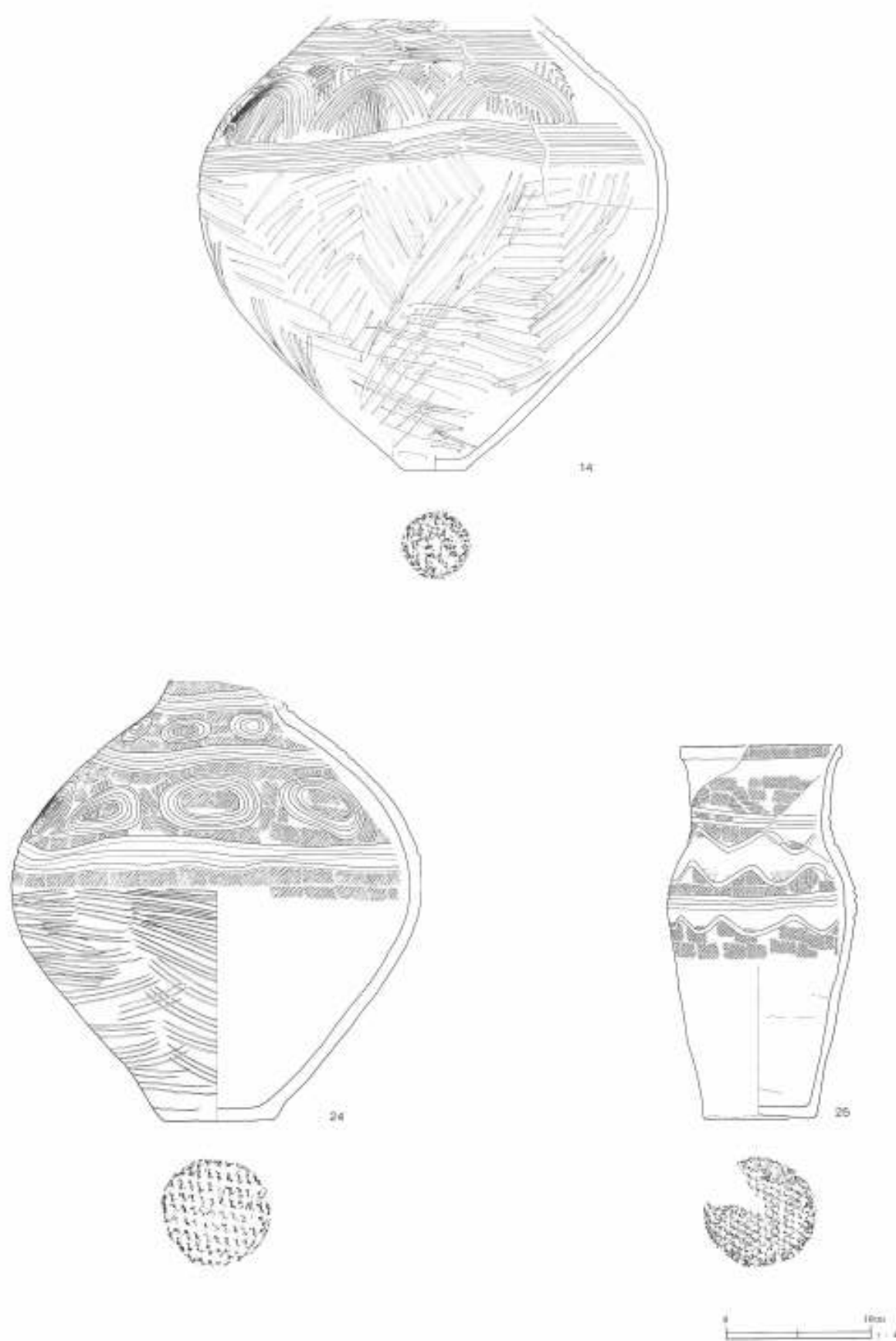
12



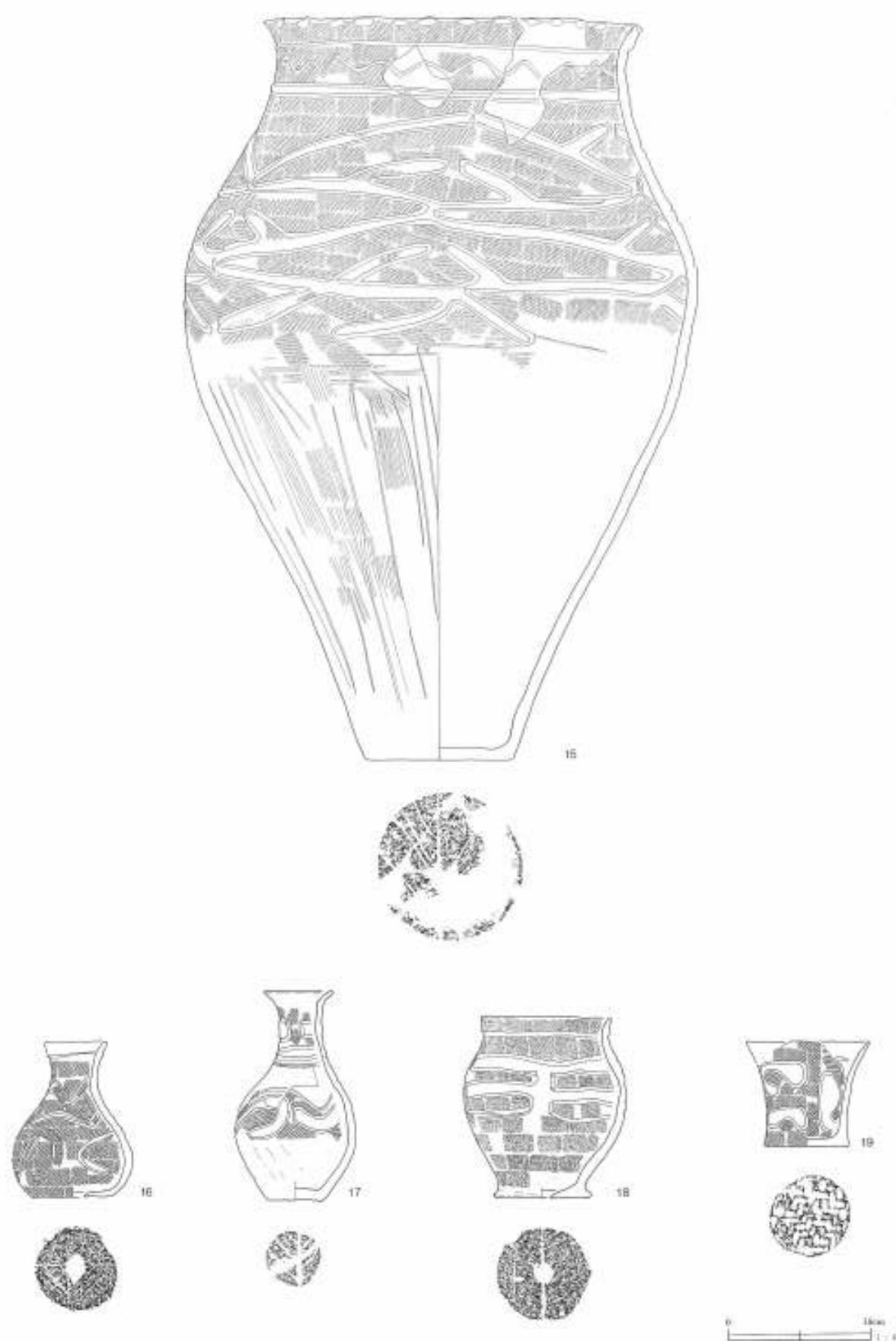
13



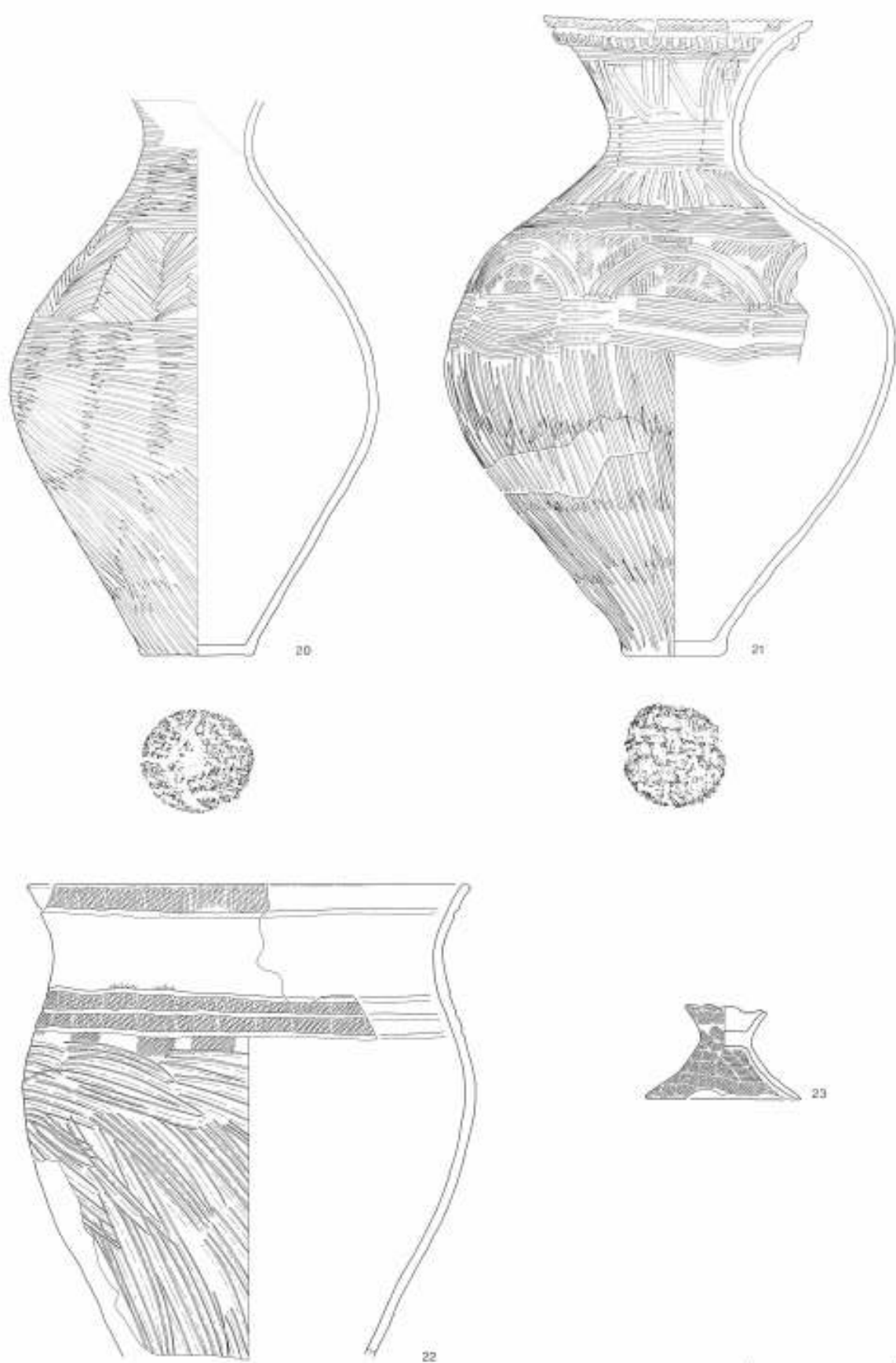
第15図 再葬墓出土土器（5）



第16図 再葬墓出土土器(6)



第17圖 再葬墓出土土器 (7)



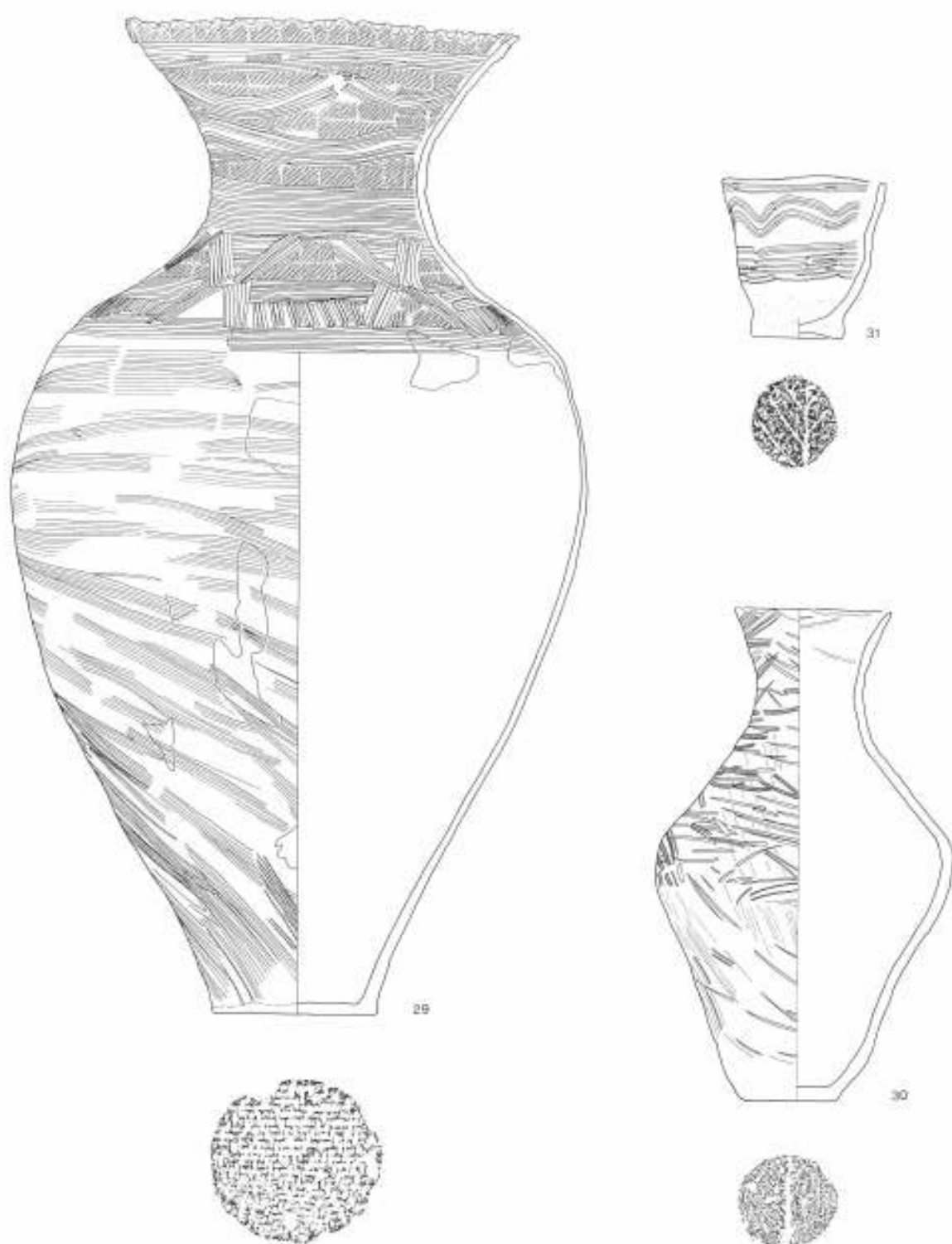
第18圖 再葬墓出土土器（8）



第19図 再葬墓出土土器（9）



第20図 再葬墓出土土器 (10)



第21圖 再葬墓出土土器 (11)

条痕文の分類（施文具ごと）

※数字は土器番号※

- I 櫛状施文具
- a 沈線間が窄く、数条1単位のもの 13・26・29
 - b 沈線間がやや広く、3条1単位のもの 21
- II 半縦竹管状施文具
- a 細い竹管使用のため条線幅は狭く、条線そのものも細い 1・6・7・15・20・22・24
 - b やや太目の竹管使用のため条線幅はやや広く、条線も太め 28
- III へら状施文具
- a 浅くやや幅広い条線が引かれる 4・27
- IV へら状施文具と半縦竹管状施文具の併用
- a 条線の細いもの 3・5
 - b 条線のやや太いもの 12・14



第21図 29



第13図 13



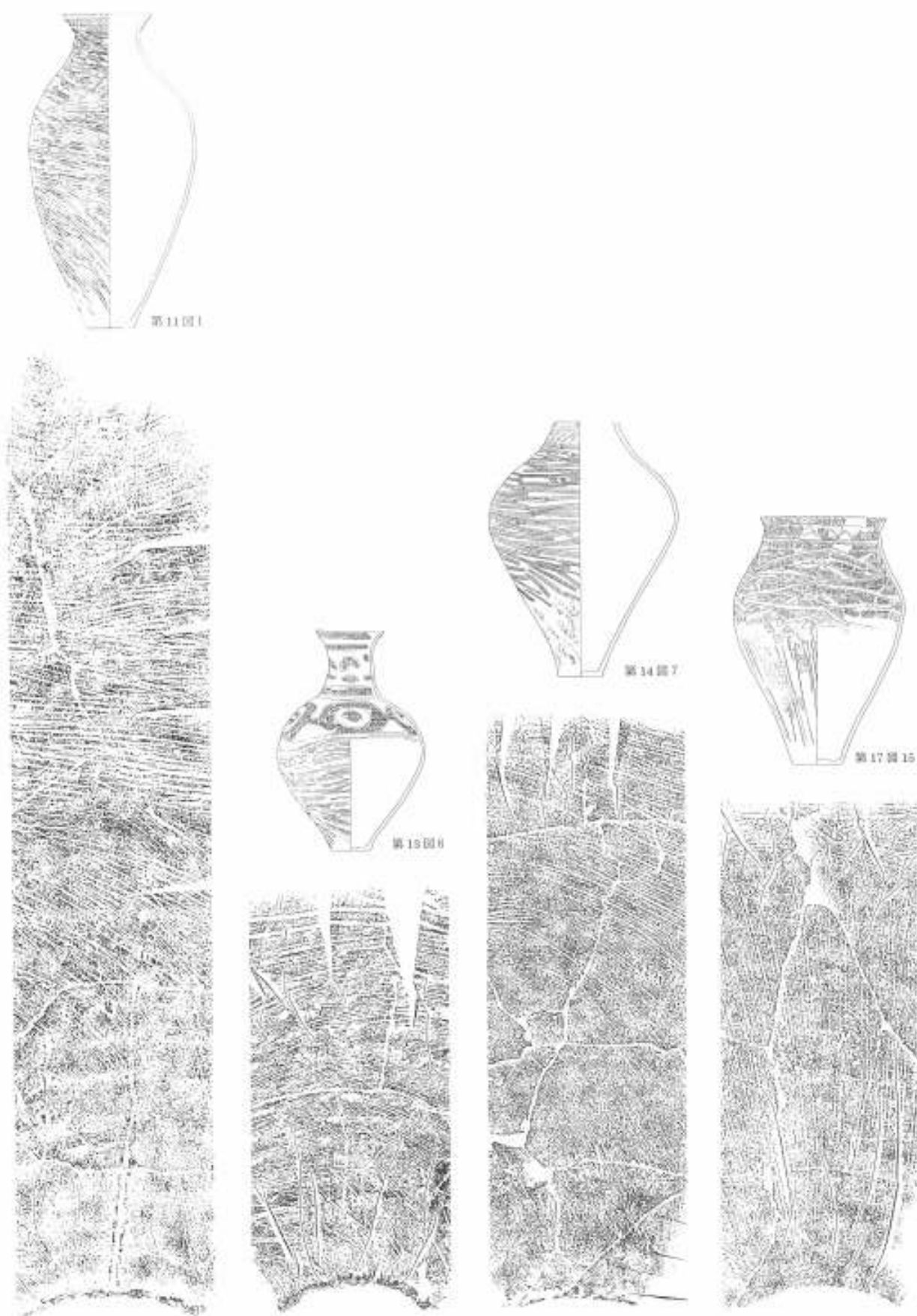
第19図 26



第18図 21



第22図 再葬墓出土土器の条痕（1）



第23図 再葬墓出土土器の条痕（2）



第18図 22



第20図 28



第18図 20



第16図 24



第12図 3



第24図 再葬墓出土土器の条痕 (3)



第15図12



第13図5



第10図34



第19図27



第12図4



第25図 再葬墓出土土器の条痕（4）



第12図3



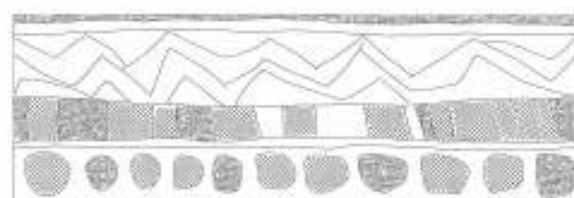
第12図4



第13図5



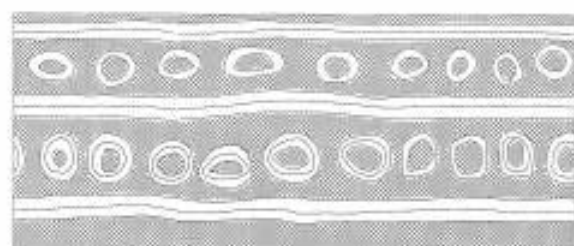
第13図6



第14図9



第14図10



第16図24



第16図25



第17図15



第17図16



第17図17



第17図18



第17図19



第18図21

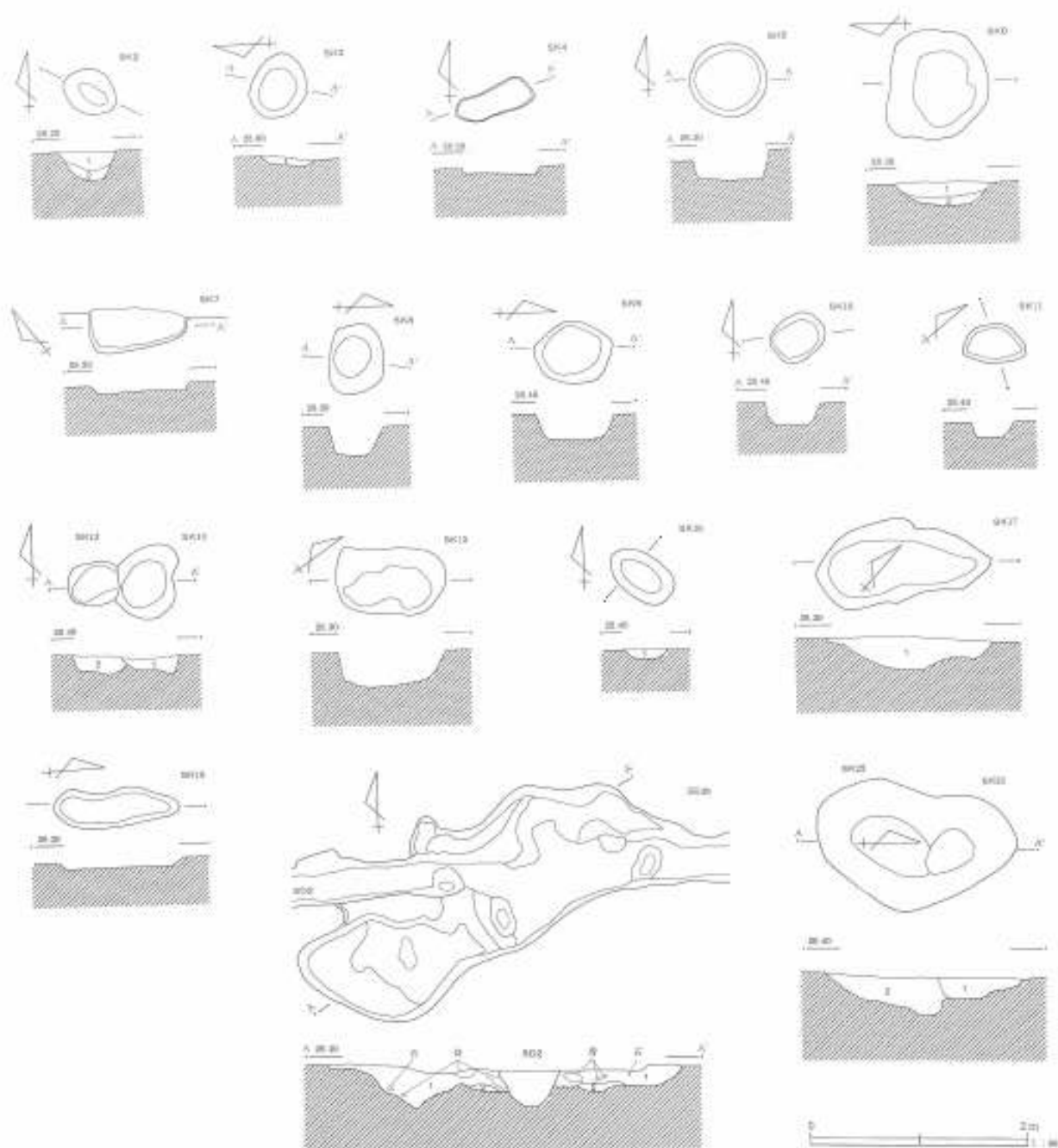


第20図28



第21図29

第26図 再葬墓出土土器の展開模式図



第2号土坑

第1層 黄褐色土。粒子細かく粘性に富みしまり良。鉄分を僅かに含む。
第2層 黄褐色土。粒子細かく粘性に富むが、しまり若干不良。

第3号土坑

第1層 黄褐色土。砂質。粒子粗く粘性に欠けるが、しまり非常に良。鉄分を僅かに含む。

第6号土坑

第1層 黄褐色土。粒子細かく粘性に富み、しまり良。鉄分・黄褐色土粒子を含む。

第2層 黄褐色土。粒子細かく粘性に富み、しまり良。鉄分・黄褐色土粒子を含む。

第12・13号土坑

第1層 黄褐色土。粒子粗いがややしまり良。鉄分多く含む。炭化物を若干混入。

第2層 黄褐色土。粒子粗いがややしまり良。鉄分多く含む。炭化物の塊を混入。

第16号土坑

第1層 黄褐色土。粒子粗かくややしまりある。鉄分を少し含む。黄褐色土を少し。炭化物を混入する。

第17号土坑

第1層 黄褐色土。粒子粗かくややしまり良。鉄分多く含む。

第20号土坑

第1層 黄褐色土。粒子粗いが、やや軟質でしまり悪い。鉄分を少し含む。骨片を多く、炭化物を若干混入。

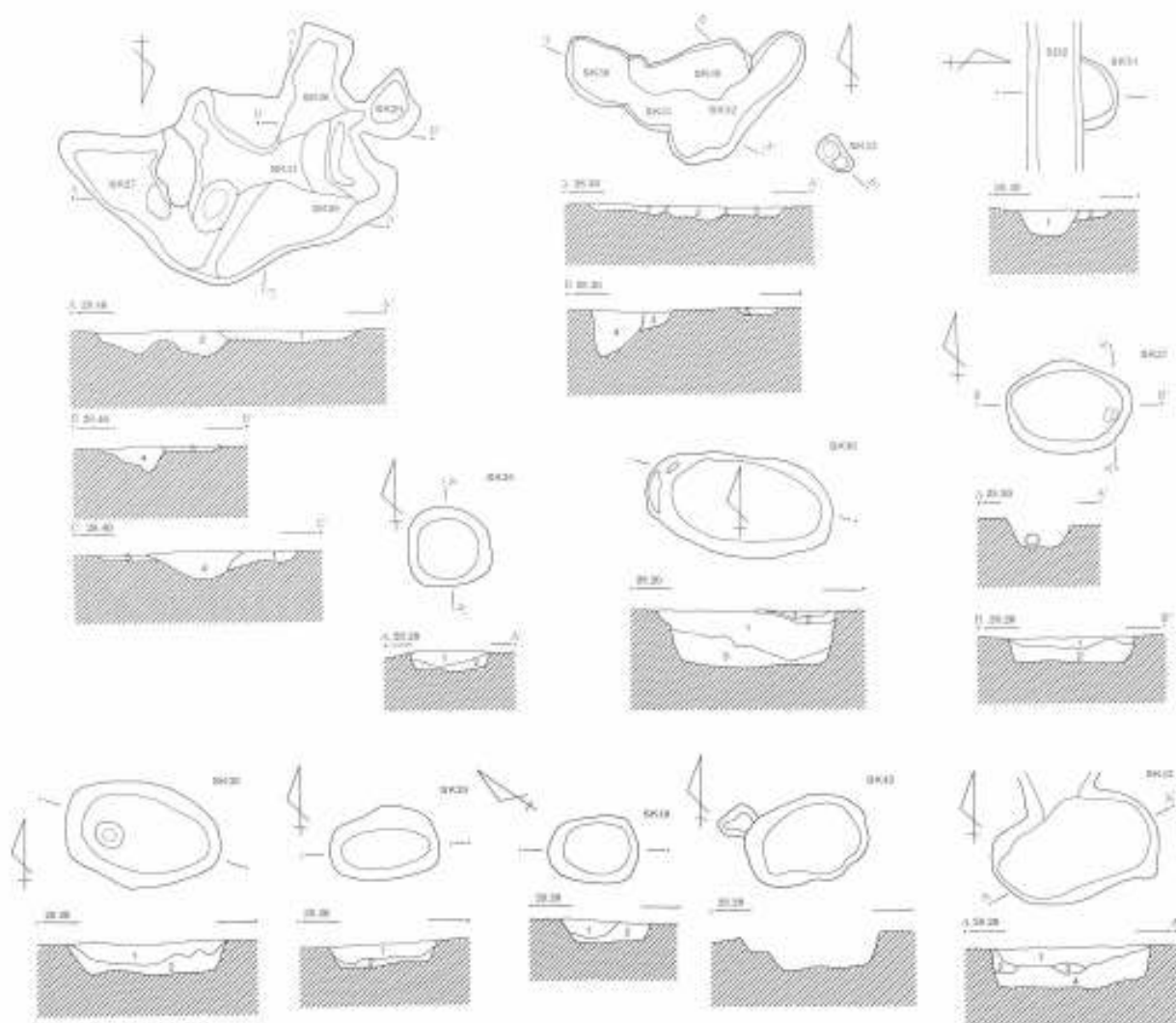
第2層 黄褐色土。粒子粗いが、やや軟質でしまり悪い。鉄分を少し含む。

第22号土坑

第1層 黄褐色土。粒子粗いがしまり良。鉄分多く含む。黄褐色土粒子を若干混入。

第2層 黄褐色土。粒子粗かくややしまり良。鉄分多く含む。

第27図 土坑 (1)



第26～29・41号土坑

- 第1層 褐色土。粒子やや粗いがしまり良。鉄分少し含む。黄褐色土粒子を少し混入。
 第2層 暗褐色土。粒子細かくしまり良。鉄分少し含む。炭化物・焼土粒子を少し混入。
 第3層 灰褐色土。粒子細かく粘性にやや富む。鉄分少し含む。
 第4層 黒茶褐色土。粒子やや粗いがやや粘性に富む。鉄分少し含む。
 第5層 暗茶褐色土。粒子粗いがやや粘性に富む。鉄分少し含む。

第30～33号土坑

- 第1層 黒色土。粒子細かくしまり良。鉄分少し含む。
 第2層 暗茶褐色土。粒子細かくややしまり良。鉄分少し含む。
 第3層 暗褐色土。粒子やや粗い。鉄分若干含む。第4層土を少し混入。
 第4層 黄褐色土。粒子細かく粘性なし。
 第5層 黒褐色土。粒子やや粗いがしまり良。炭化物・第4層土を若干混入。

第34号土坑

- 第1層 暗灰色土。やや粘性に富む。鉄分多く含む。
 第2層 暗褐色土。粒子細かくしまり良。鉄分少し含む。

第35号土坑

- 第1層 暗褐色土。粒子細かく粘性なし。鉄分若干含む。褐色土粒子を少し混入。
 第2層 暗灰色土。粒子やや粗く粘性なし。褐色土粒子を多く混入。

第36号土坑

- 第1層 暗茶褐色土。粒子やや粗いが若干粘性ある。鉄分少し含む。炭化物若干混入。
 第2層 砂層。
 第3層 暗褐色土。やや砂質で粒子細かい。鉄分少し含む。少し黄褐色土粒子を混入。

第37号土坑

- 第1層 暗褐色土。粒子細かいが粘性なし。鉄分少し含む。
 第2層 暗黄褐色土。粒子細かいが粘性なし。鉄分多く含む。

第38号土坑

- 第1層 黒褐色土。粒子細かいが粘性なし。鉄分多く含む。若干の黄褐色土を混入。
 第2層 暗褐色土。粒子細かいが粘性なし。鉄分多く含む。若干の黄褐色土を混入。

第39号土坑

- 第1層 灰褐色土。粒子やや粗く粘性なし。鉄分多く含む。
 第2層 暗緑褐色土。粒子やや粗く若干砂質に富む。粘性はなし。鉄分多く含む。

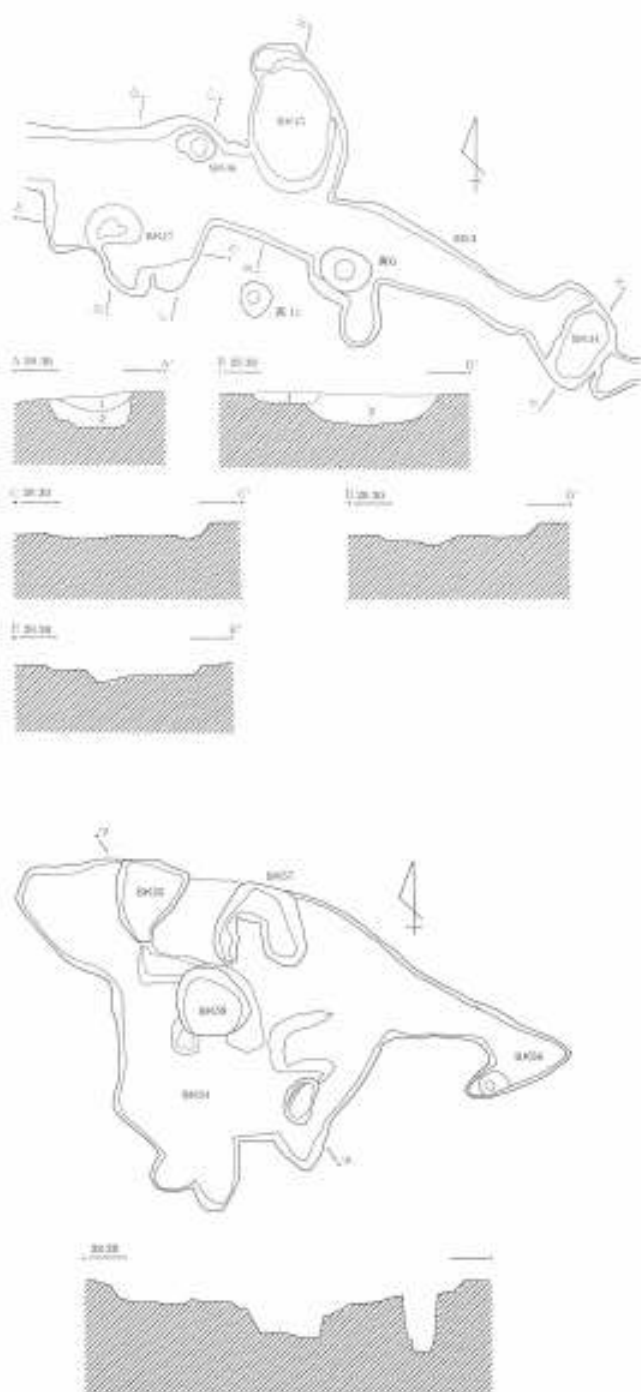
第40号土坑

- 第1層 灰褐色土。粒子細かいが粘性なし。鉄分少し。炭化物若干含む。
 第2層 暗緑褐色土。粒子細かいが、やや砂質に富む。鉄分少し。炭化物若干含む。

第41号土坑

- 第1層 灰褐色土。粒子やや粗く粘性なし。黄褐色土粒子を多く。炭化物を若干混入する。
 第2層 暗褐色土。粒子細かく粘性ややある。鉄分少し含む。
 第3層 暗緑褐色土。粒子細かく。鉄分を若干含む。
 第4層 暗灰褐色土。やや砂質で粘性なし。鉄分多く含む。

第28図 土坑（2）



第44号土坑

第1層 灰色土。粒子細かくやや粘質。鉄分若干含む。

第2層 黒褐色土。粒子粗い。鉄分少し含む。

第45号土坑

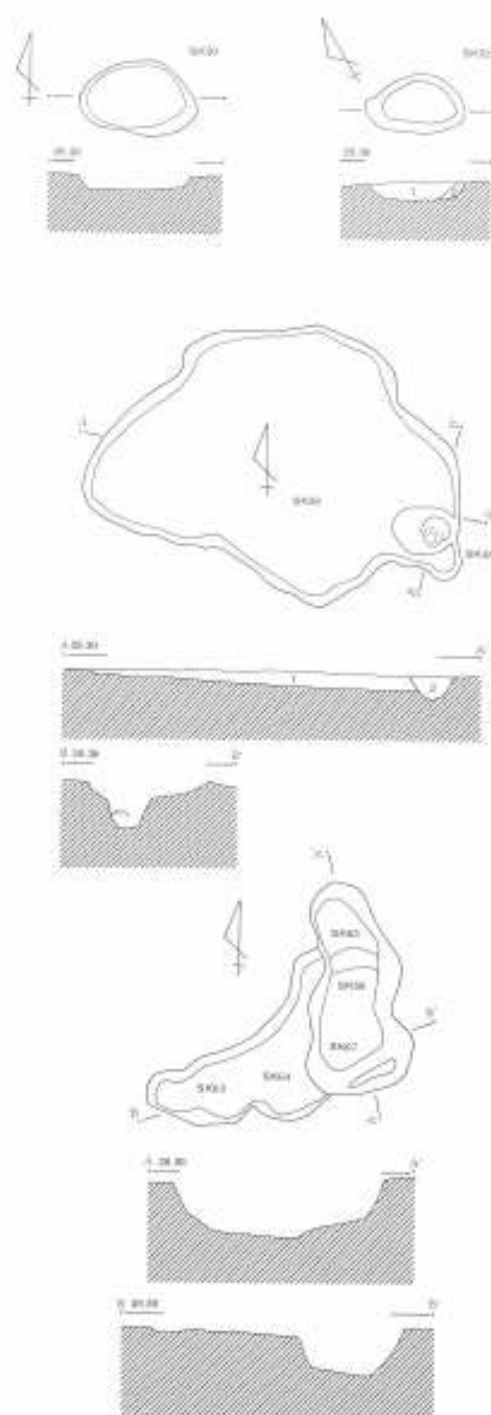
第1層 灰色土。粒子細かくやや粘質。鉄分若干含む。

第2層 暗褐色土。粒子細かくやや粘質に富む。鉄分若干含む。

第48号土坑

第1層 灰色土。粒子細かくやや粘質。少し鉄分を含む。炭化物若干混入。

第2層 暗褐色土。粒子細かく粘性なし。鉄分少し含む。



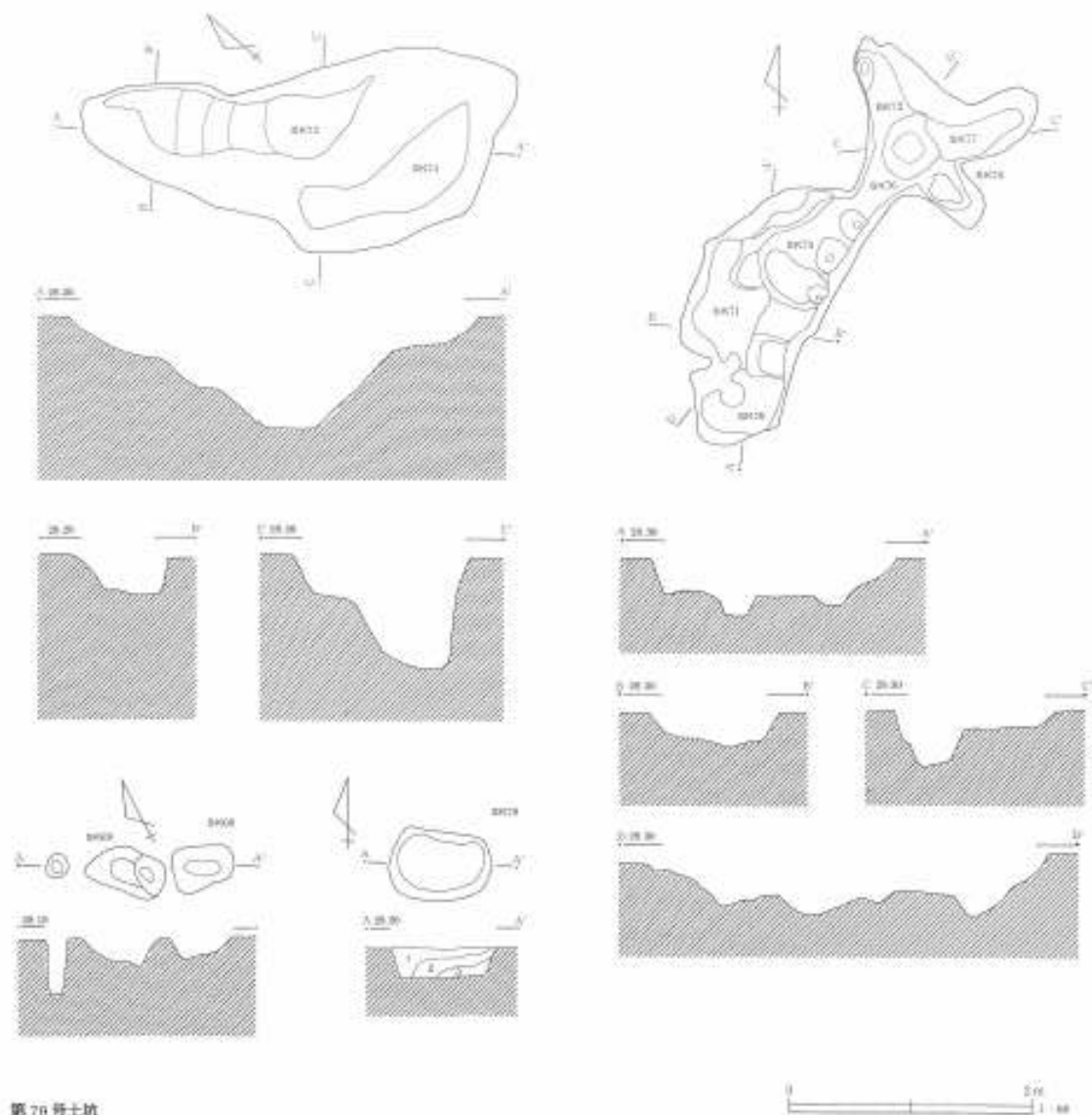
第50号土坑

第1層 暗褐色土。粒子細かく粘性なし。鉄分少し含む。褐色土粒子を少し混入。

第2層 暗褐色土。粒子細かく粘性なし。鉄分少し含む。第1層土を少し混入。



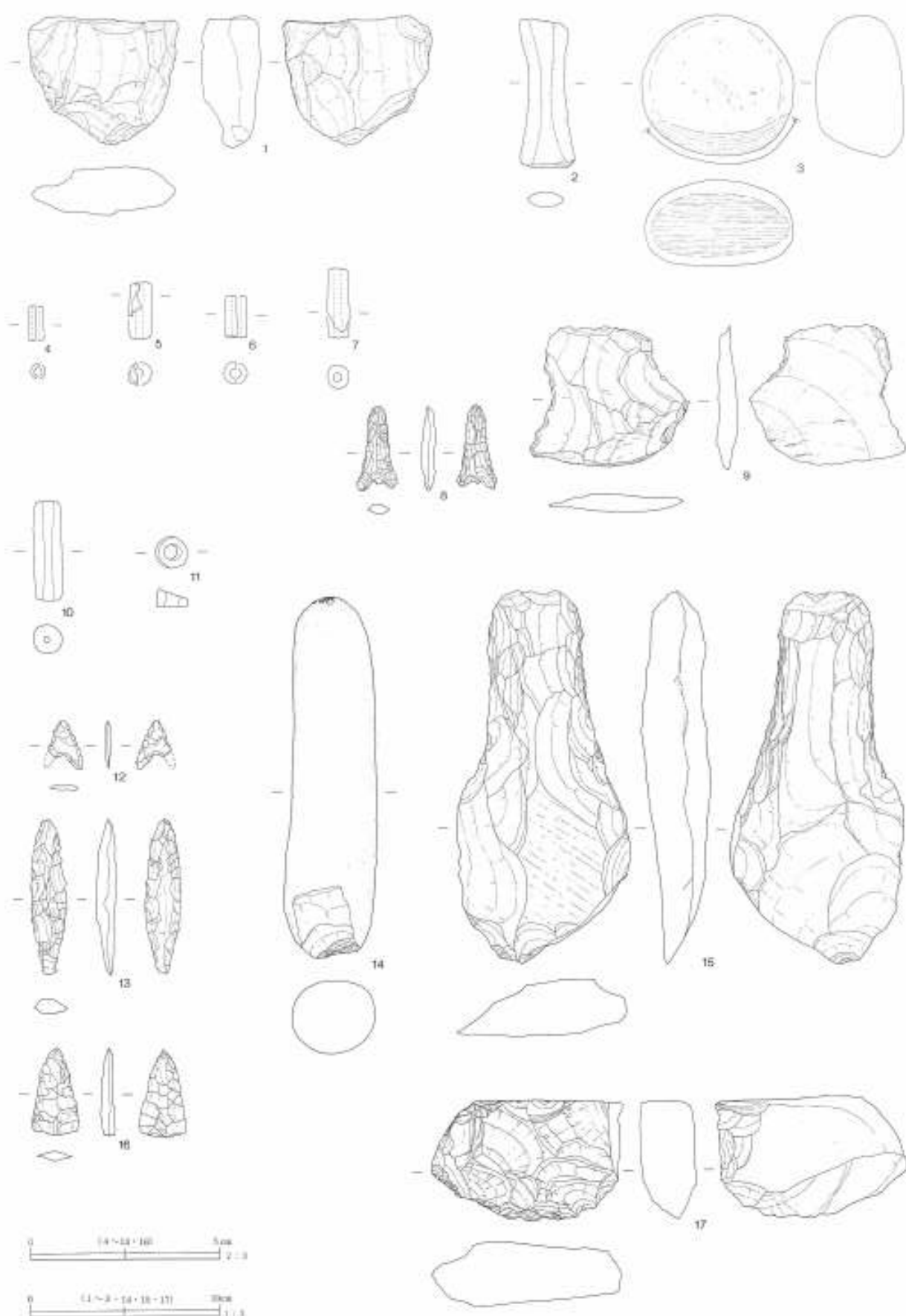
第29図 土坑(3)



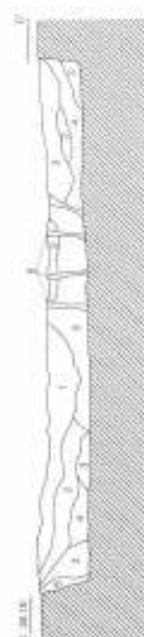
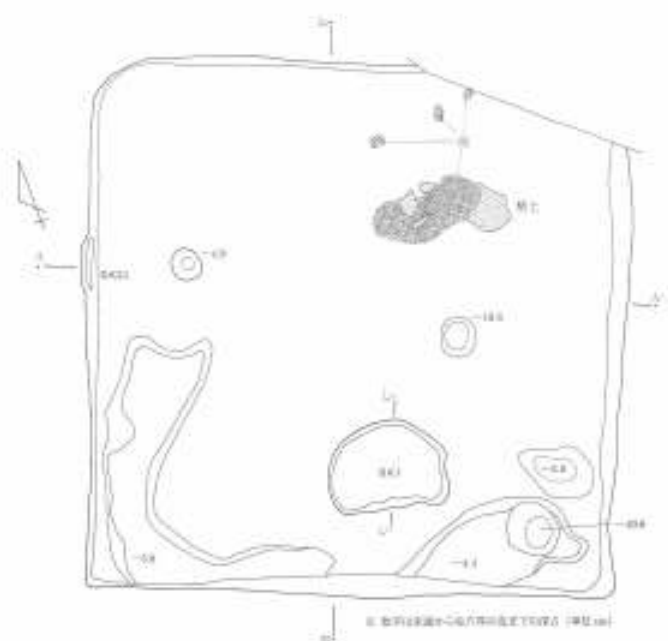
第30図 土坑(4)



第31圖 土坑出土土器

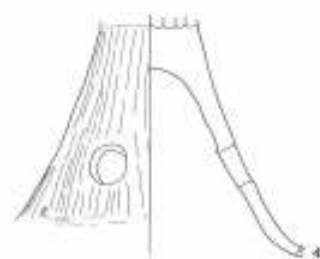


第32図 再葬墓及び土坑出土石器

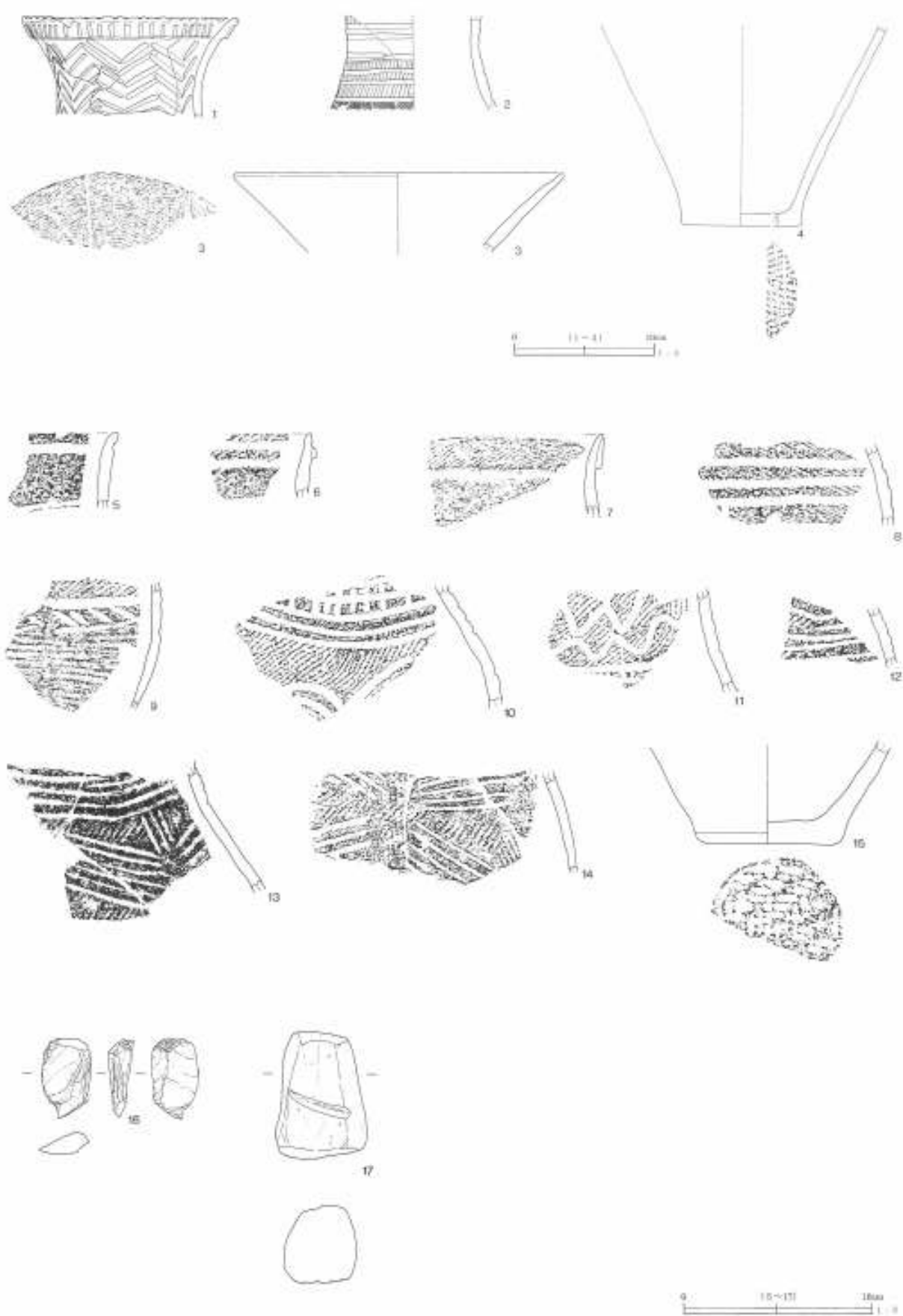


- 第1層 黒褐色土。粒子細かいが粘性なし。ロームブロックを多く含む。鉄分・パミス粒子を少し混入。
 第2層 黒灰色土。粒子やや粗いが粘性若干ある。ロームブロック・鉄分・パミス少し含む。炭化物を極少量混入。
 第3層 灰色土。砂質に富み粒子粗い。ロームブロック・鉄分を少し含む。パミス・炭化物・焼土粒子を極少量混入。
 第4層 灰褐色土。粒子やや粗く若干砂質。炭化物を若干混入。
 第5層 砂層。鉄分を多く含む。

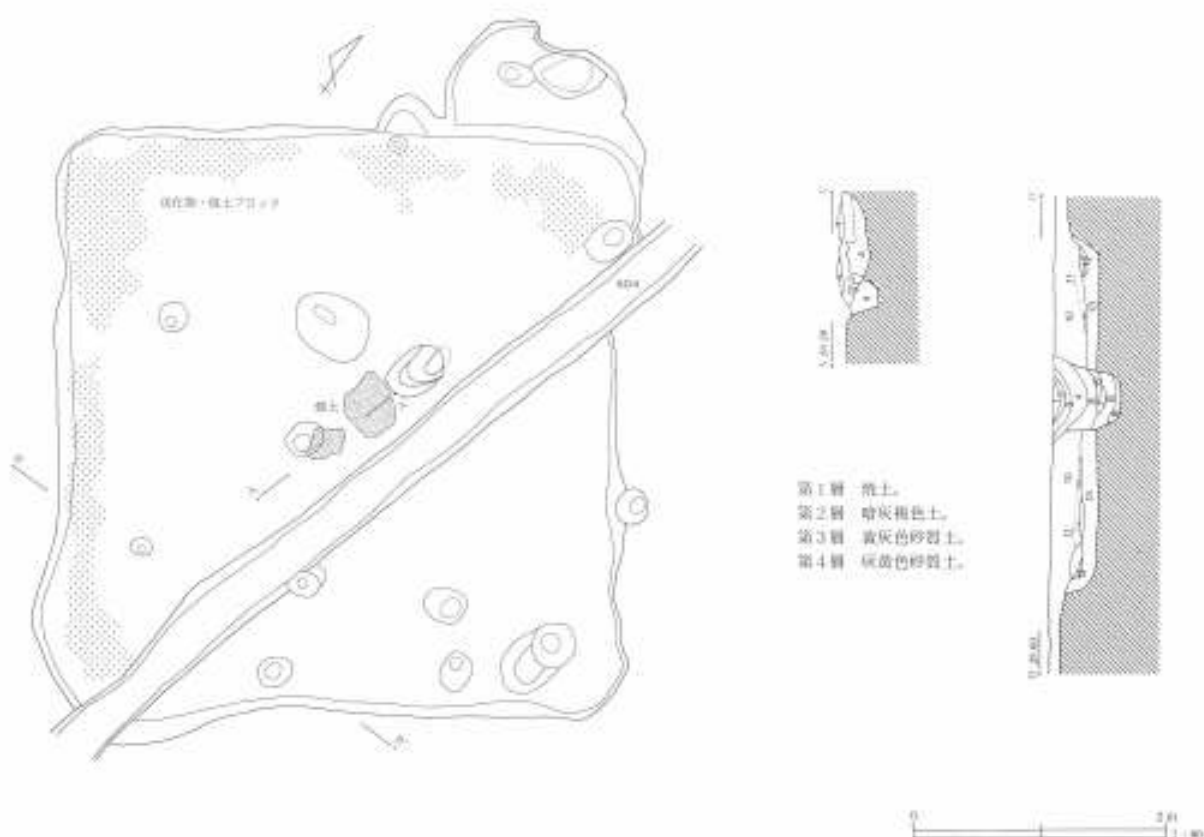
- 第1層 黒灰色土。粒子細かいがややしまり不良。鉄分多く含む。若干の炭化物を混入。
 第2層 暗緑褐色土。やや砂質で粒子も若干粗い。鉄分を多く含む。



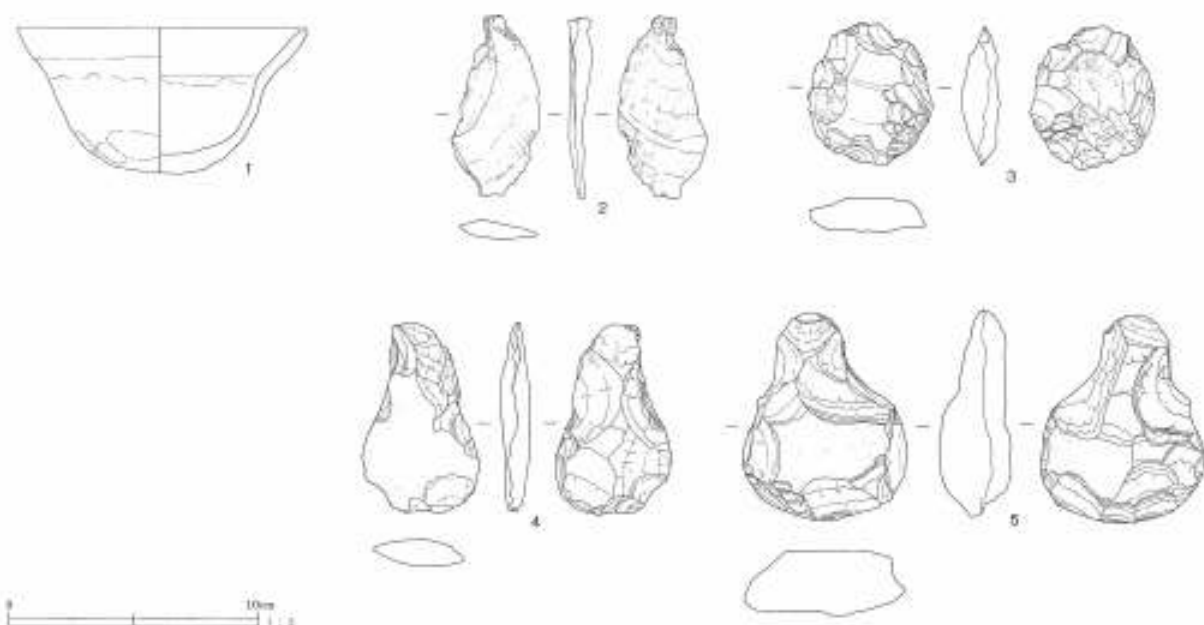
第33図 第1号住居跡と出土土器



第34図 第1号住居跡出土遺物



- | | |
|-------------------------|-------------------------------------|
| 第1層 灰黄色土。 | 第8層 暗灰色土。第5層より若干暗色。灰黄色土ブロック。炭化物を混入。 |
| 第2層 青灰色砂質土。炭化物混入。 | 第9層 暗灰色土。灰黄色土ブロックを多量に混入。 |
| 第3層 灰色土。 | 第10層 暗灰色土。 |
| 第4層 明黄灰色砂質土。 | 第11層 焼土。炭化物ブロック。 |
| 第5層 暗灰色土。 | 第12層 炭化物。 |
| 第6層 暗灰色土。青灰色砂質土ブロックを混入。 | 第13層 暗灰色土。灰黄色土ブロックを混入。 |
| 第7層 暗灰色土。炭化物混入。 | |



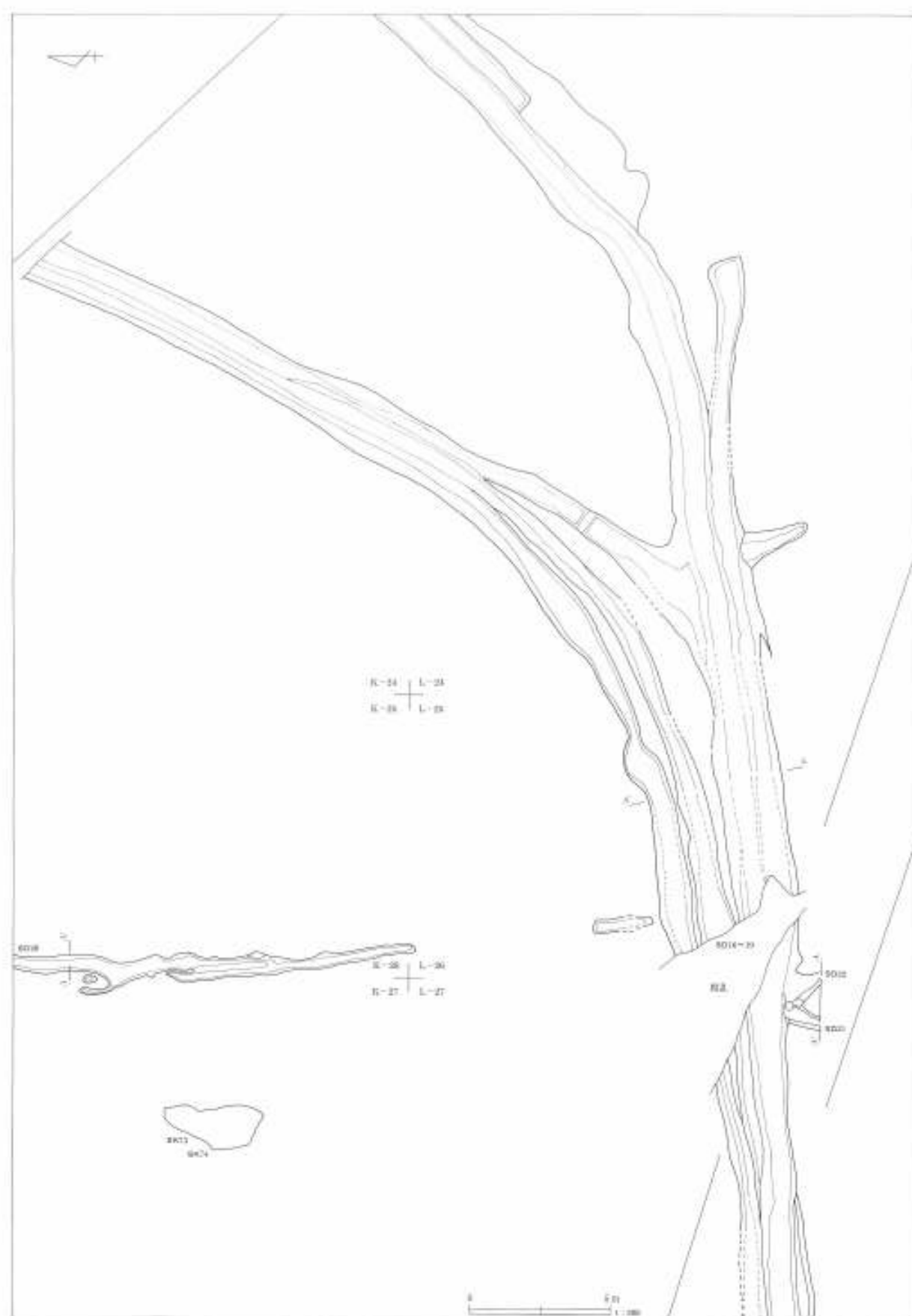
第35図 第2号住居跡と出土遺物



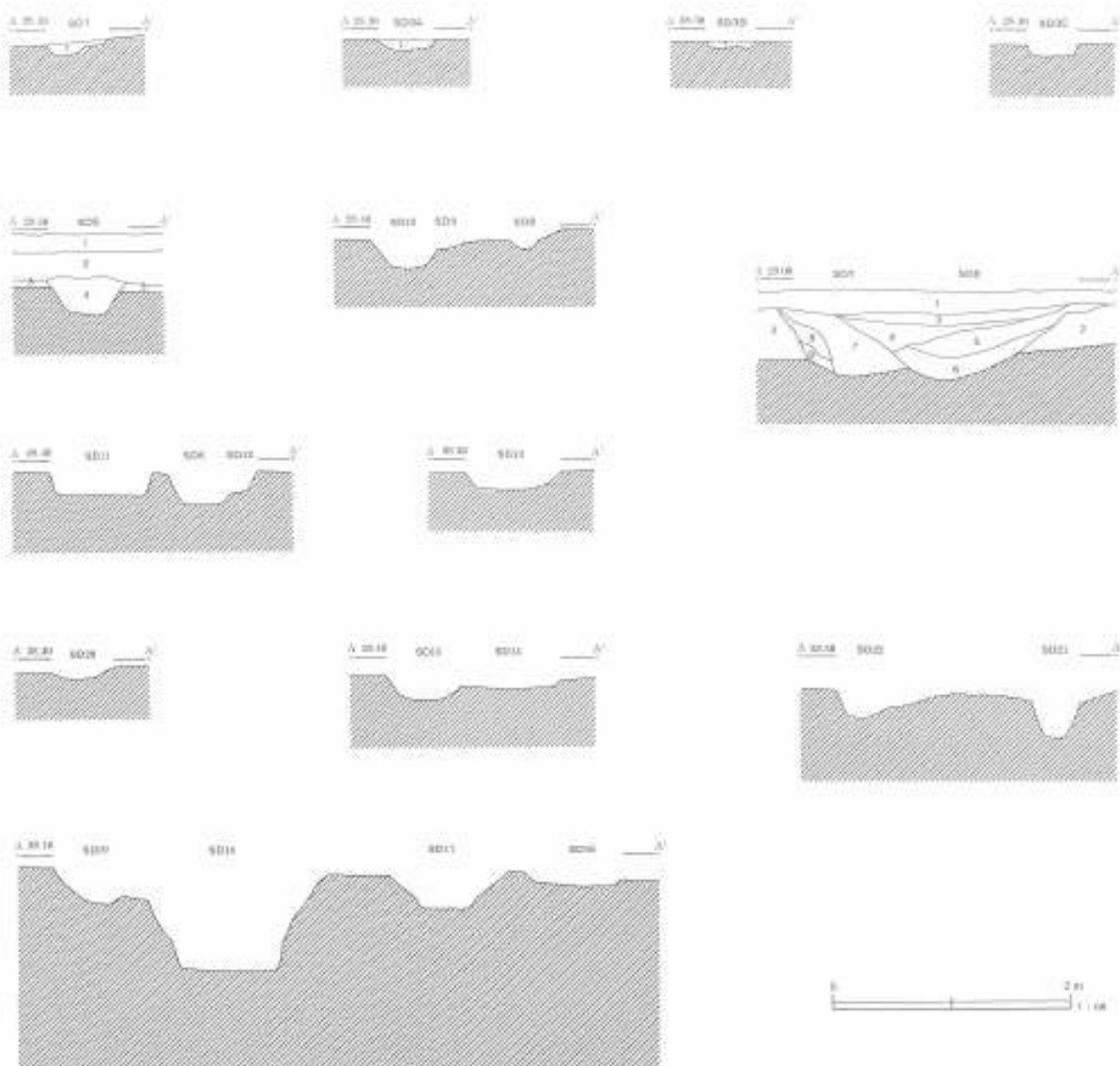
第36図 溝 (1)



第37図 溝 (2)



第38圖 溝 (3)



第1号溝

第1層 黒色土。粒子細かいが粘性なし。鉄分を少し含む。

第3A号溝

第1層 暗茶褐色土。粒子細かくしまり度が粘性なし。鉄分少し含む。

第3B号溝

第1層 暗茶褐色土。粒子やや細かくしまりは悪い。やや粘性あり。緑黄色土を少し混入する。

第5号溝

第1層 耕作土

第2層 暗灰褐色土。粒子細かいが粘性なし。パミス少々、鉄分多く含む。

第3層 灰褐色土。粒子細かいがしまりはやや不良。鉄分多く含む。

第4層 黒灰色土。褐色土をブロック状に少々混入。上層には若干のパミス。また粘土粒子を若干含む。

第6・7号溝

第1層 耕作土。若干パミスを含む。

第2層 暗灰褐色土。粒子細かいが粘性なし。上層に少しのパミスを混入。鉄分を多く含む。

第3層 暗黄灰色土。粒子やや粗く粘性なし。多量の鉄分と若干のパミスを混入する。

第4層 青灰褐色土。粒子細くやしまりは悪い。パミスを少々混入。

第5層 赤茶色土。鉄分層。粒子細かいが粘性なし。

第6層 灰褐色土。ややしまり悪い。パミス。鉄分を若干混入。

第7層 灰色土。火山灰層。粒子細かい。パミス。鉄分を多量に混入。

第8層 灰色土。火山灰層。パミスを多く含む。

第9層 赤茶褐色土。ややしまり悪い。鉄分少し混入。

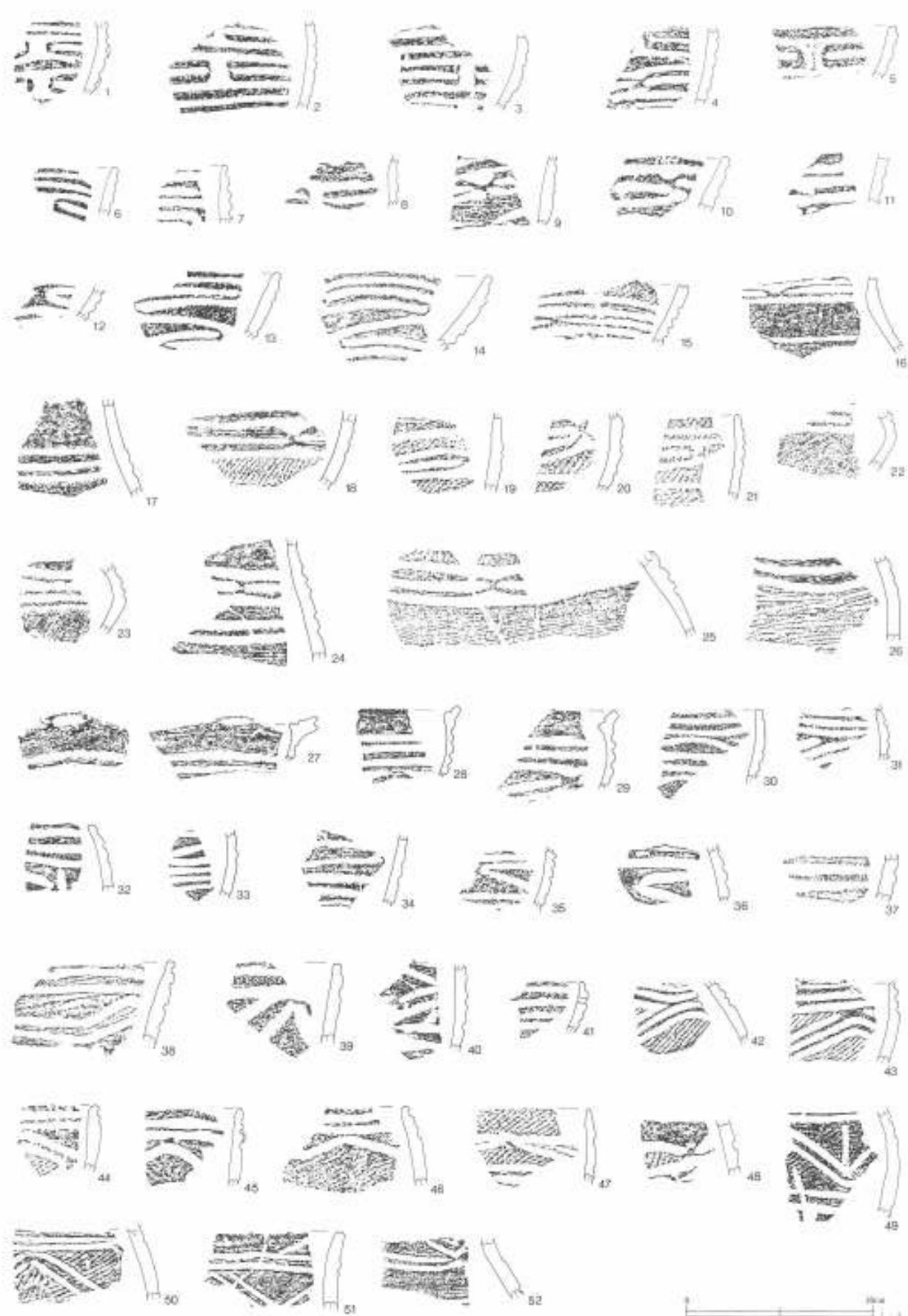
第39図 溝断面図



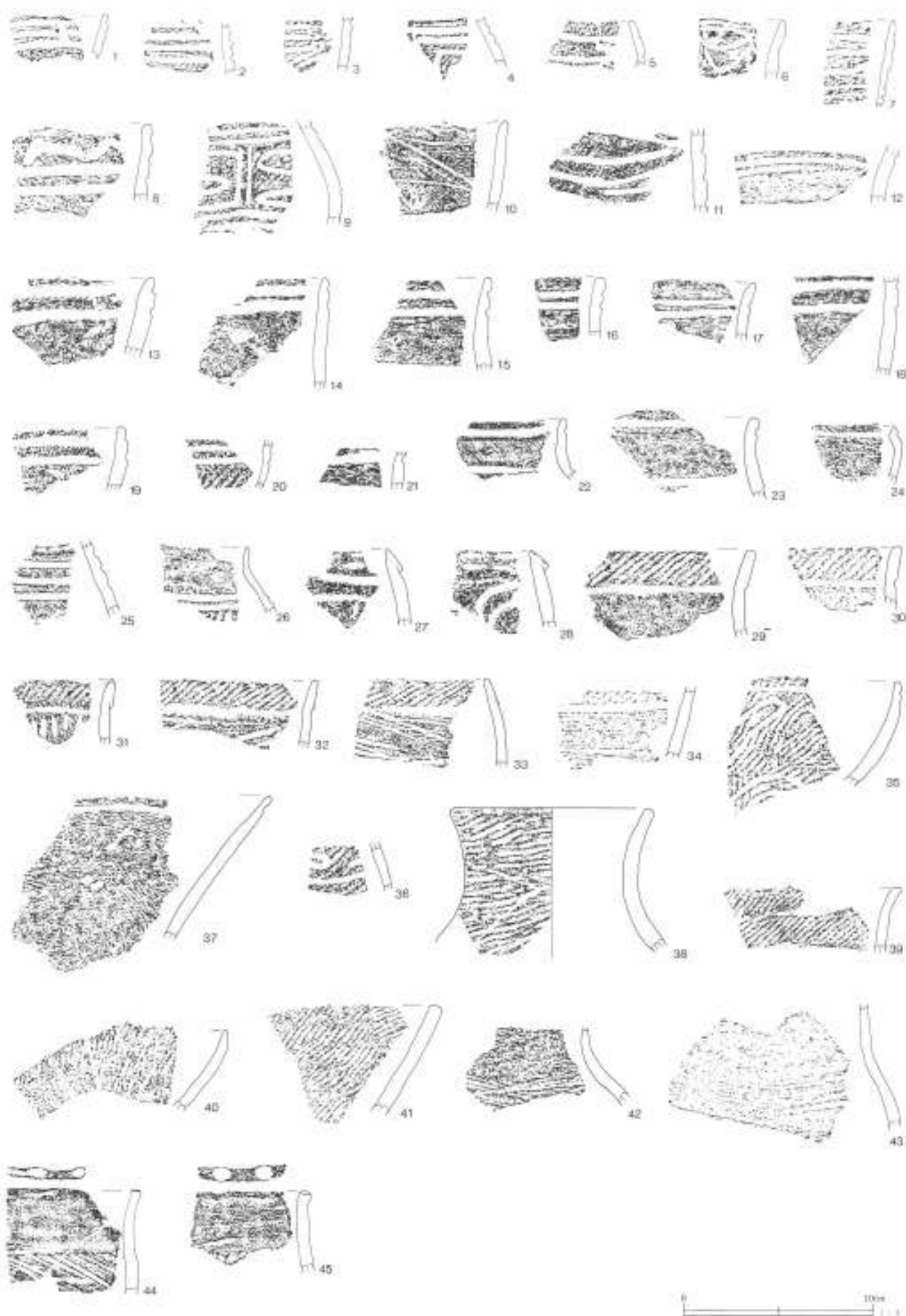
第40圖 遺構外出土土器 (1)



第41圖 遼陽外出土土器 (2)



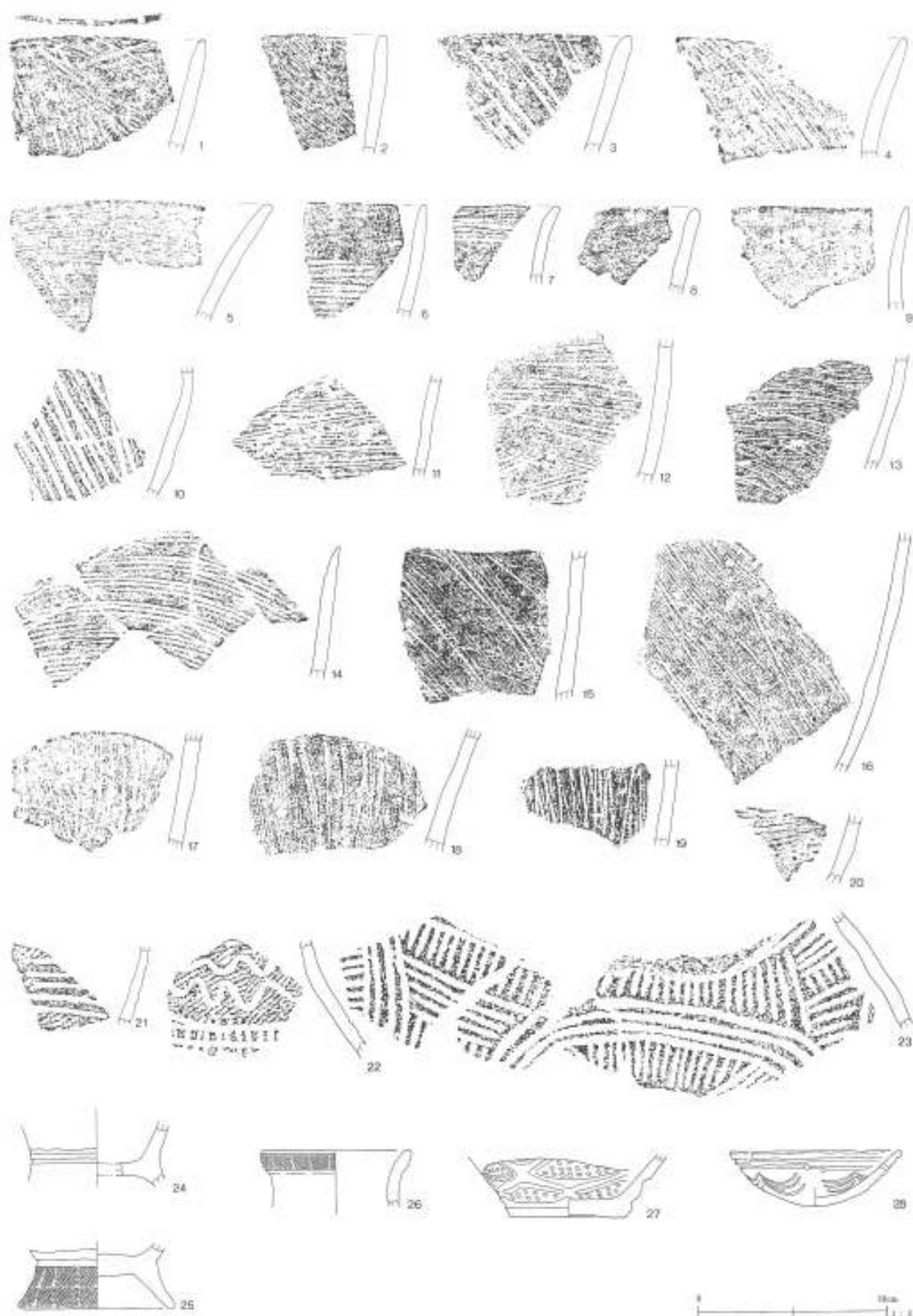
第42図 遺構外出土土器 (3)



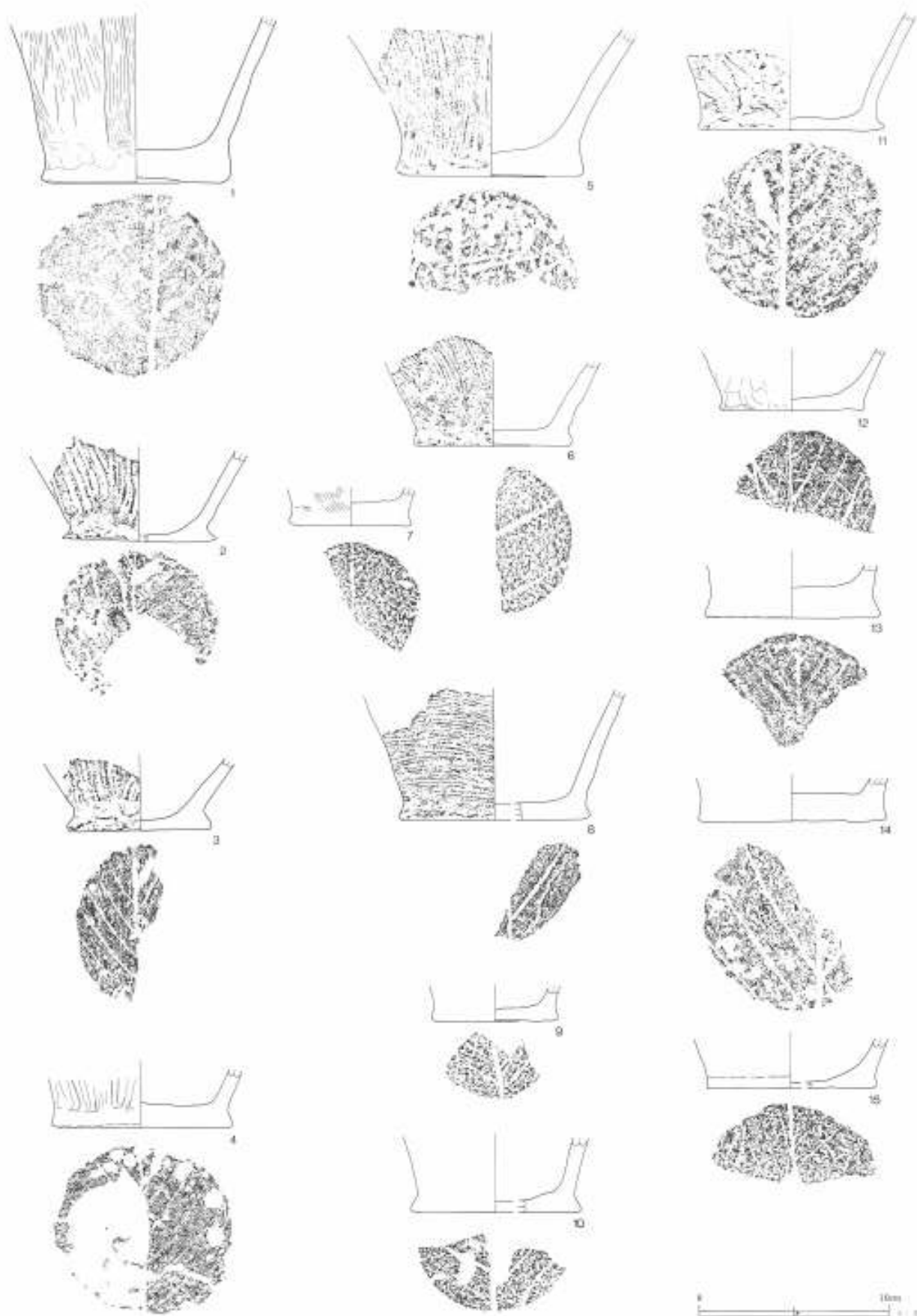
第43図 這橋外出土土器 (4)



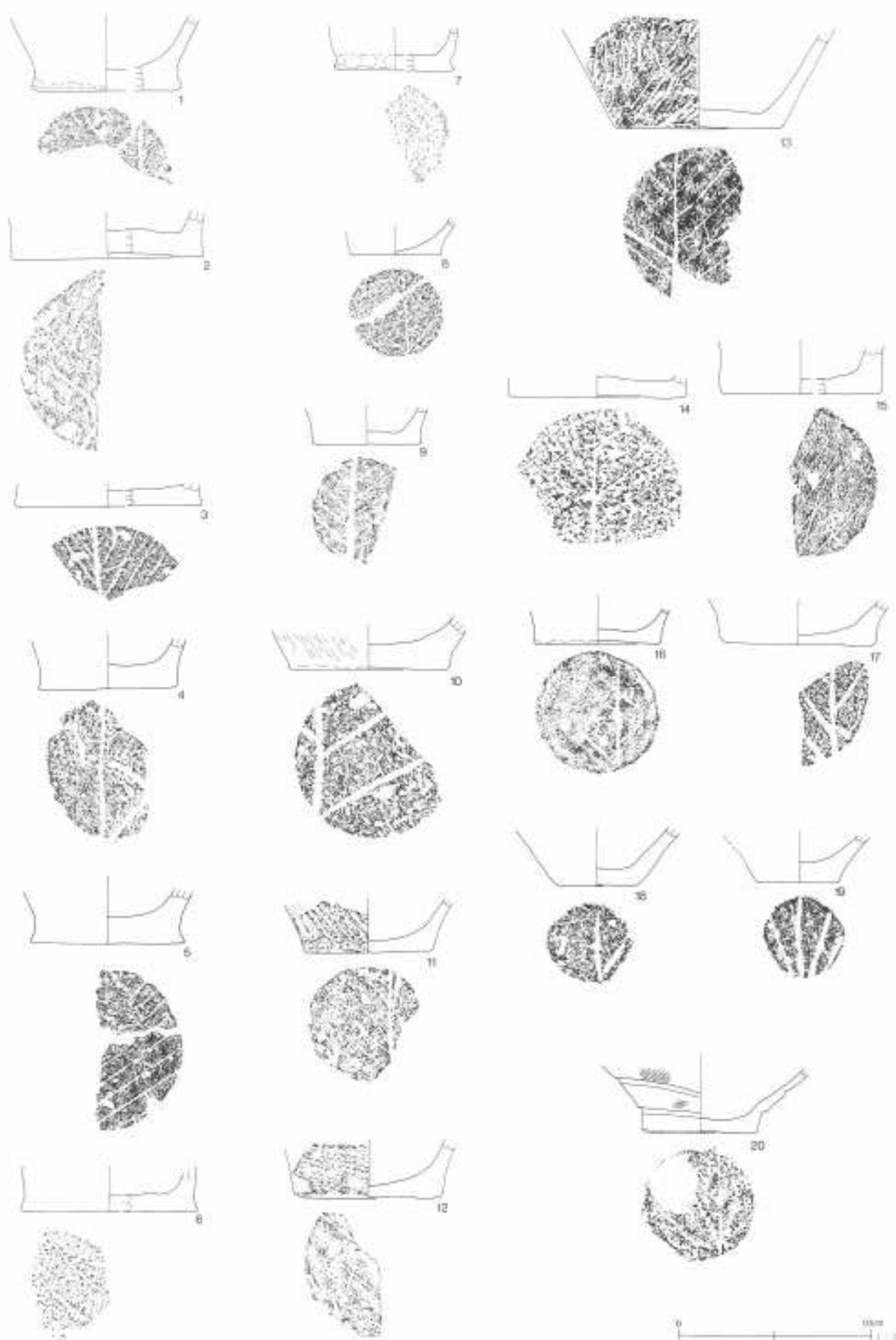
第44図 遺構外出土土器 (5)



第45圖 遺構外出土土器 (6)



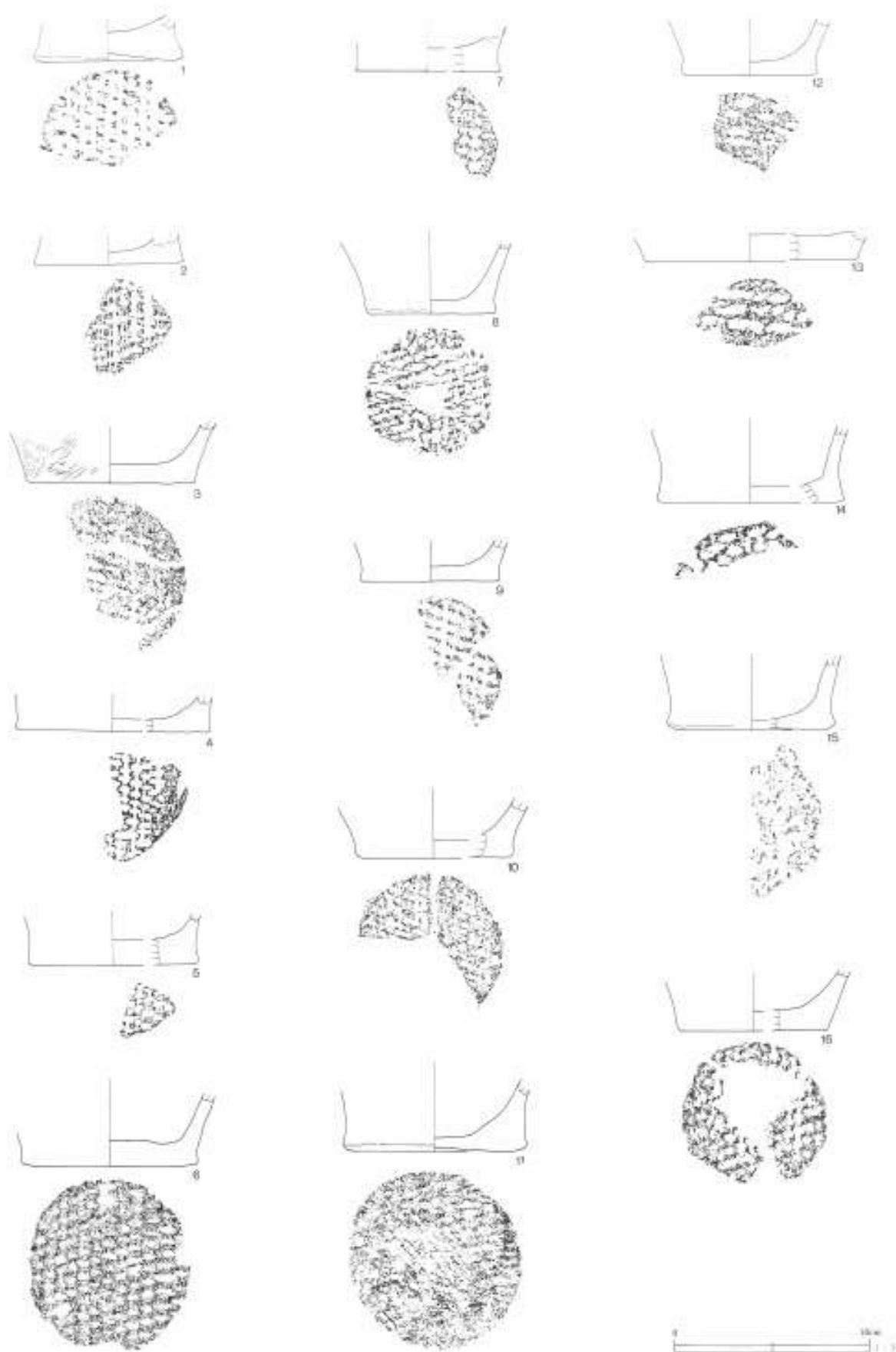
第46圖 遠橋外出土土器（7）



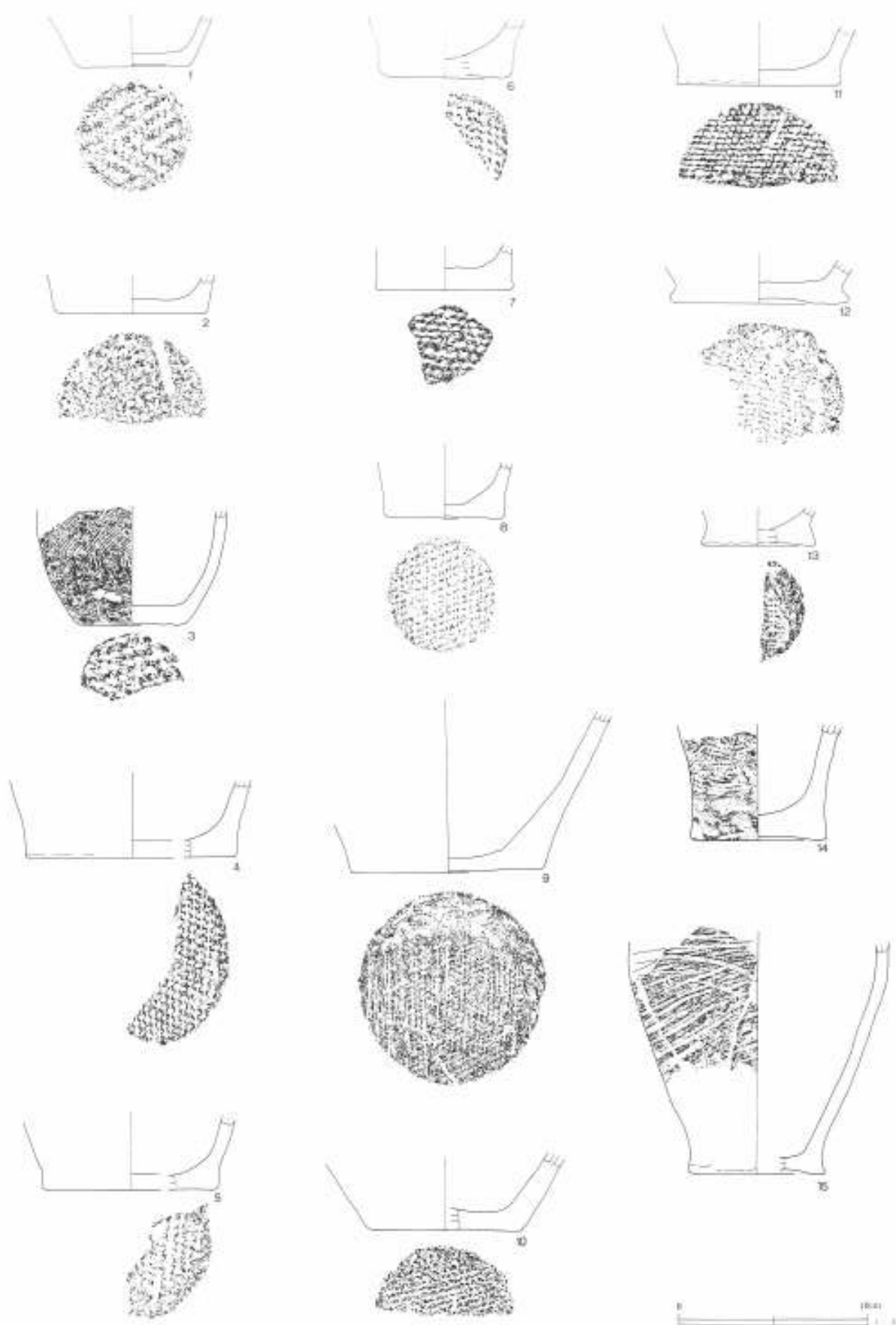
第47図 遺構外出土土器 (8)



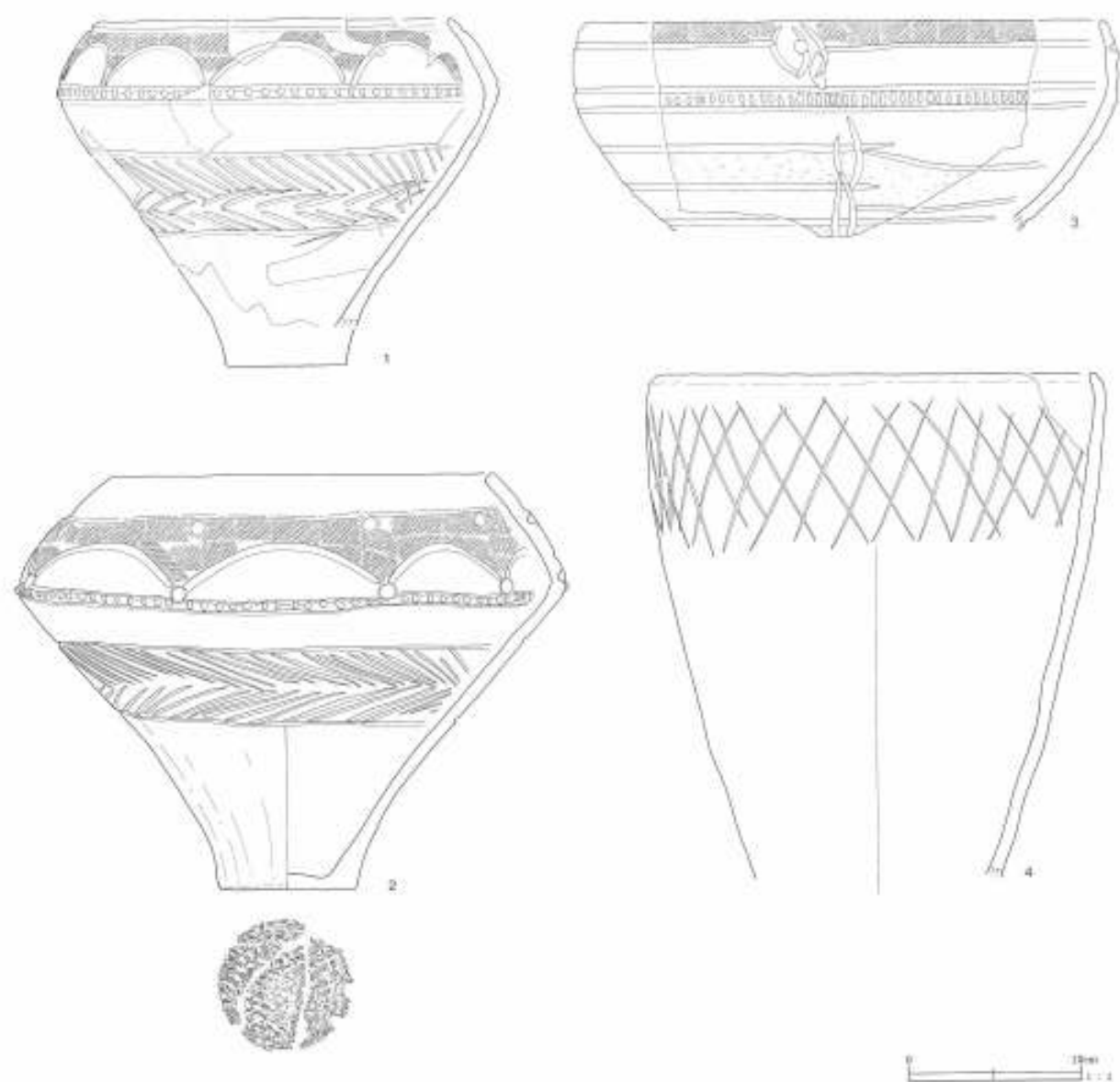
第48図 遺構外出土土器 (9)



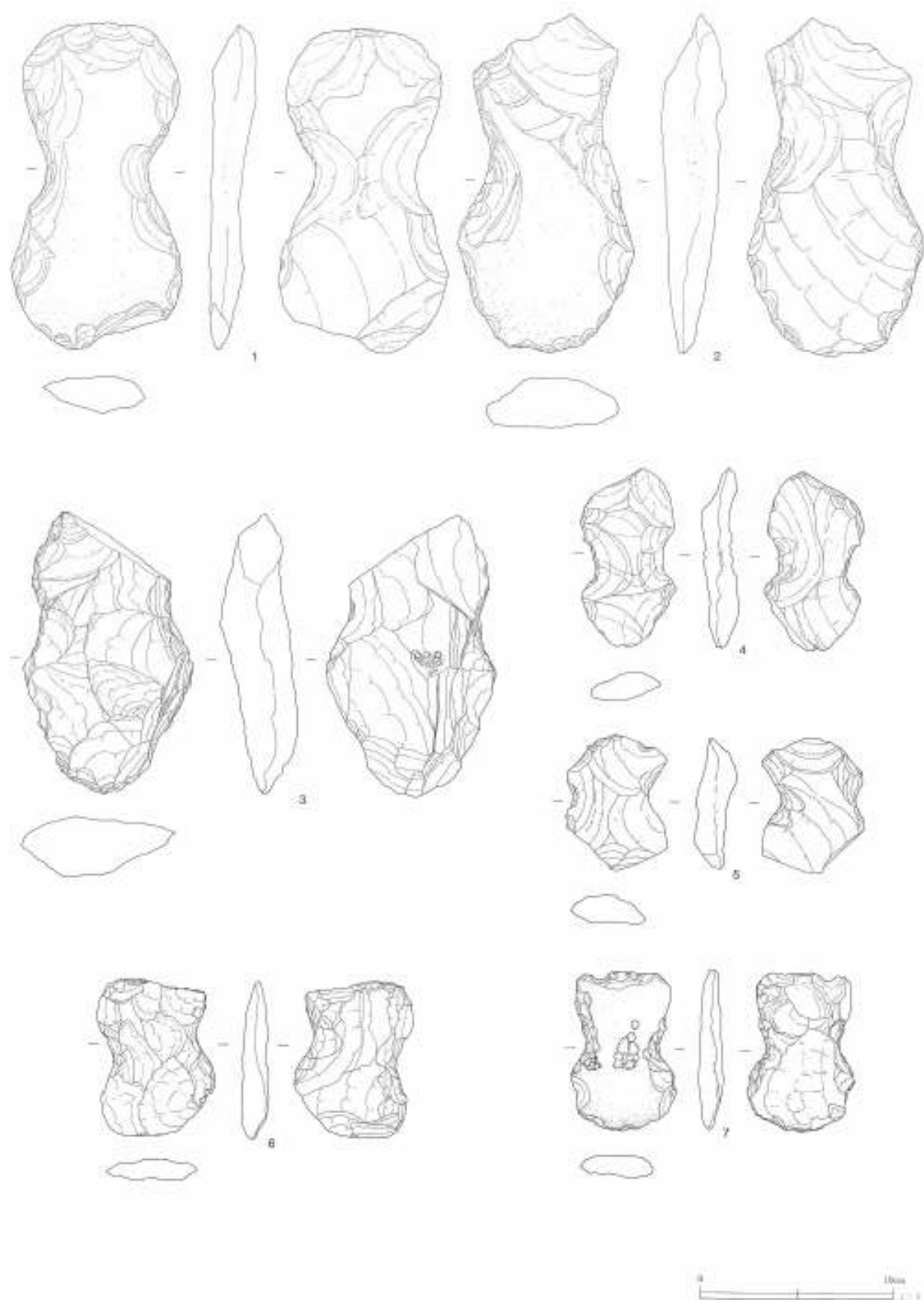
第49圖 遺構外出土土器 (10)



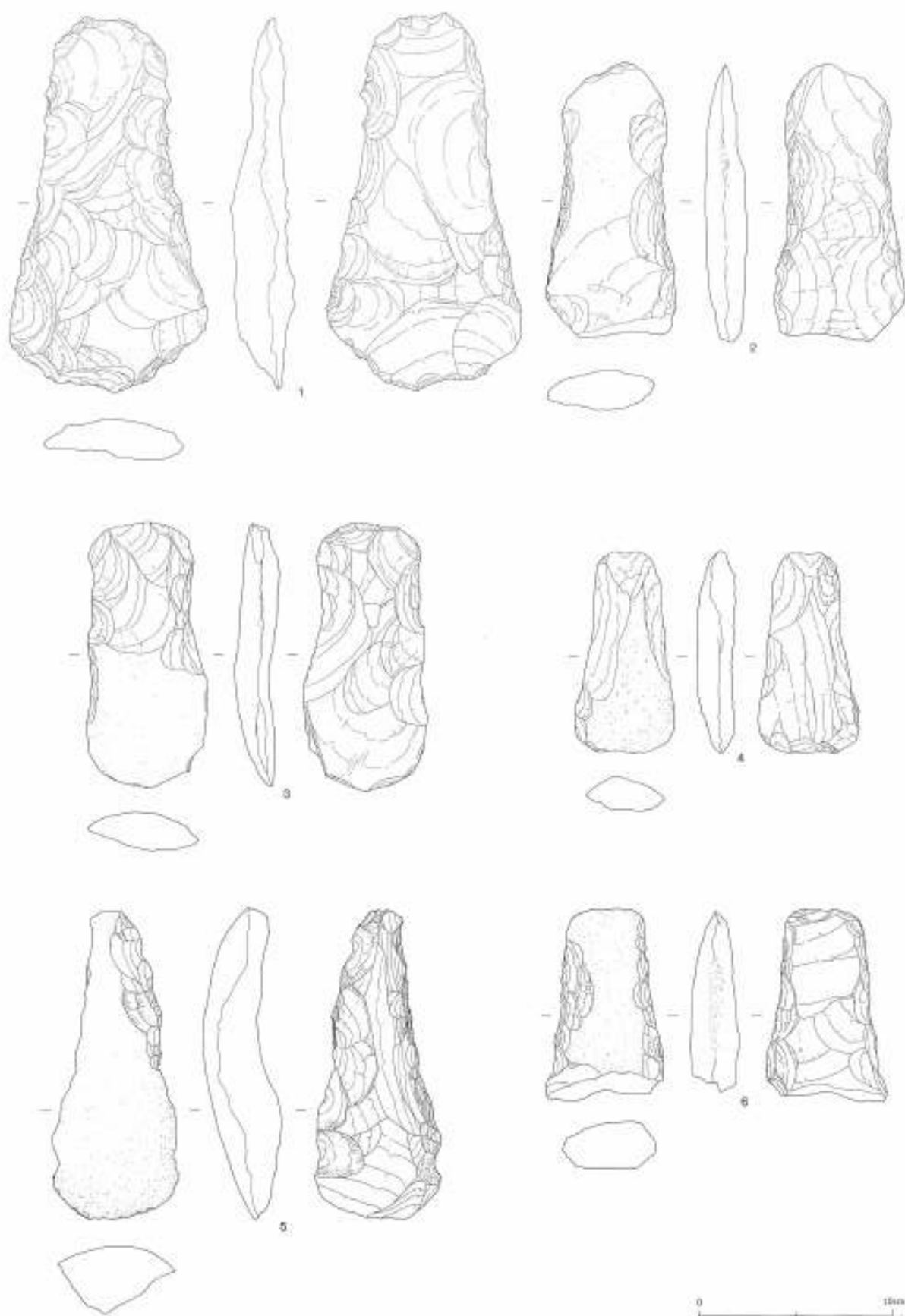
第50圖 遺構外出土土器 (11)



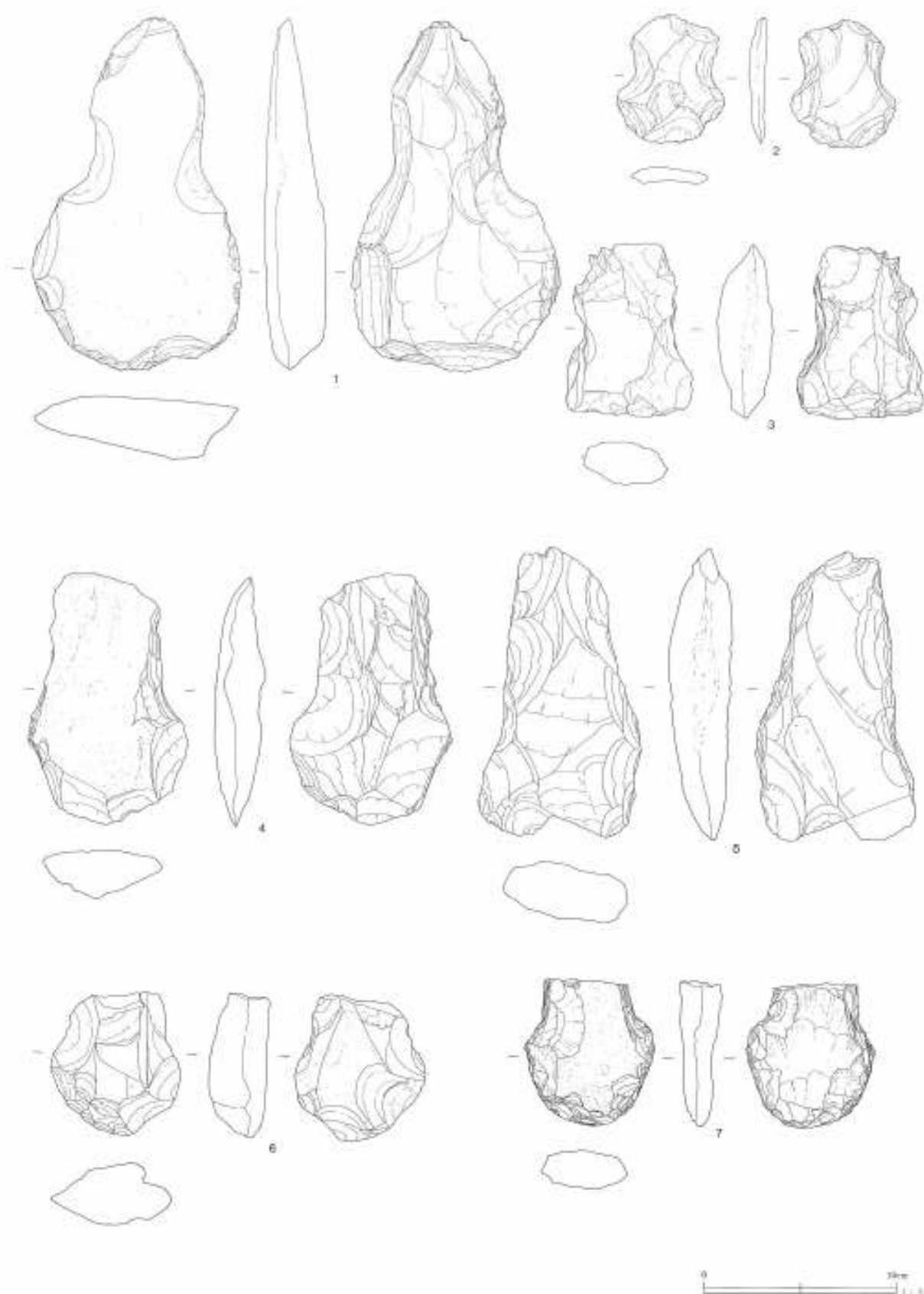
第51圖 遺構外出土土器 (12)



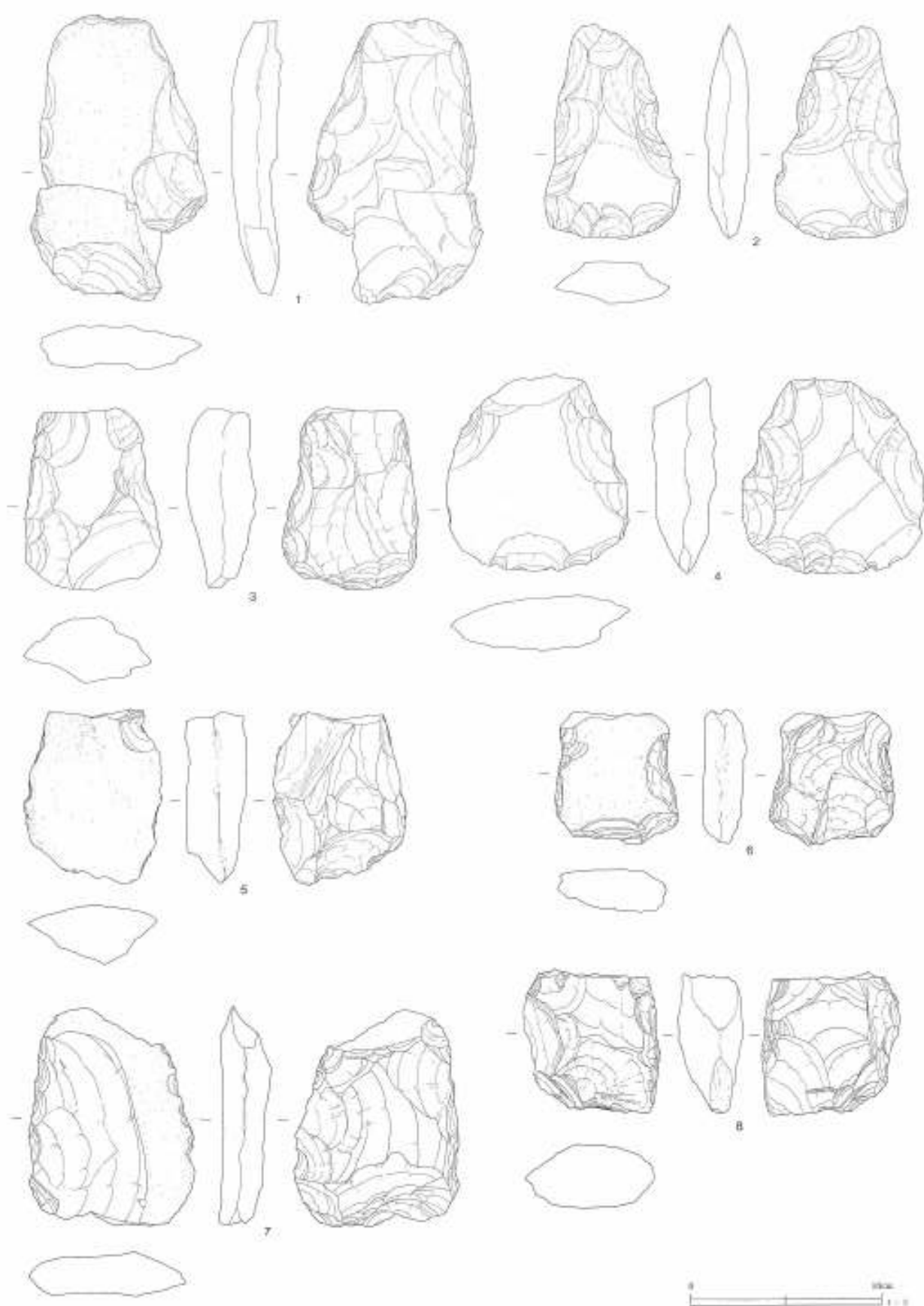
第52図 遺構外出土石器（1）



第53圖 遺構外出土石器 (2)



第54図 遺構外出土石器 (3)

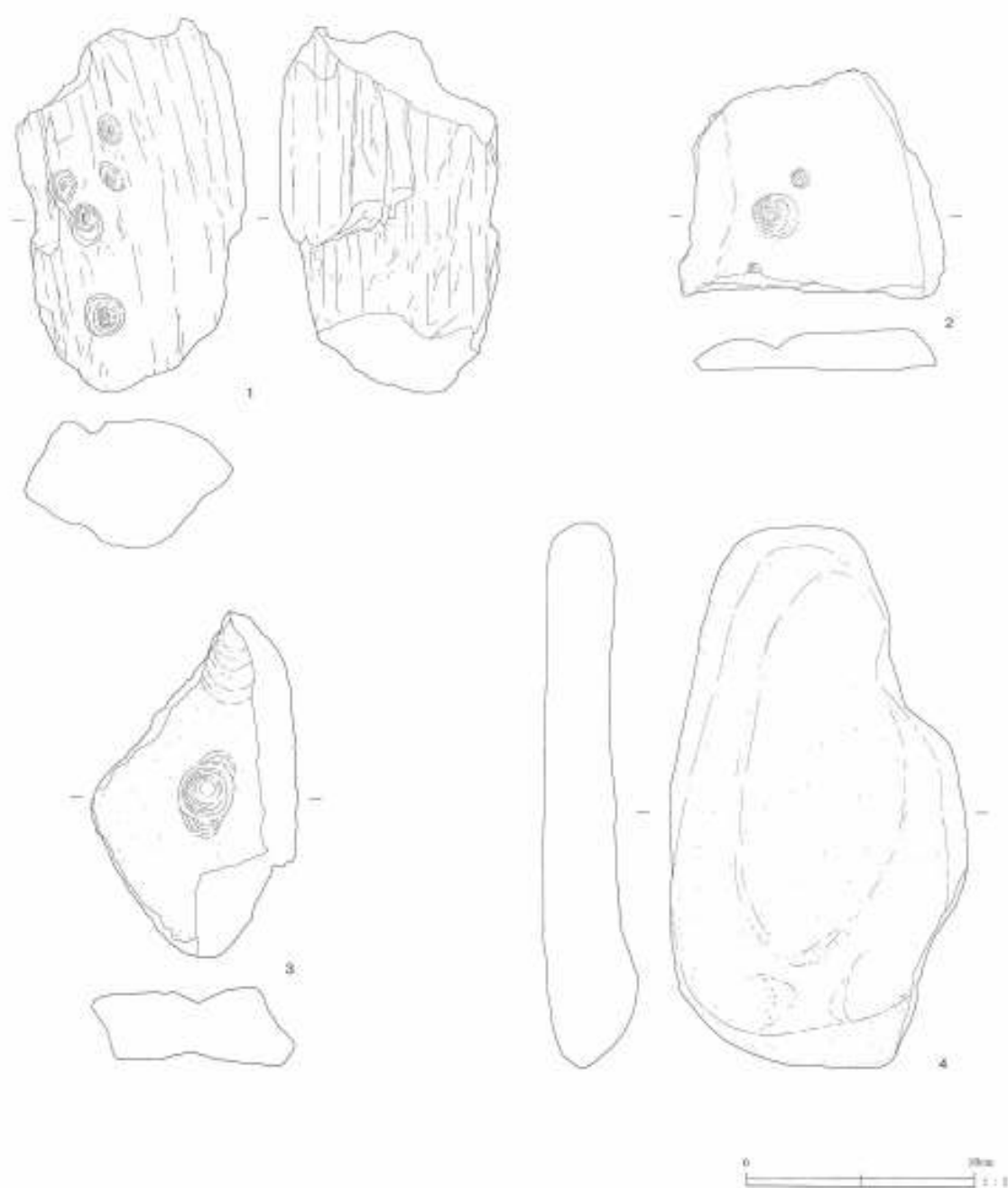


第55圖 遺構外出土石器（4）

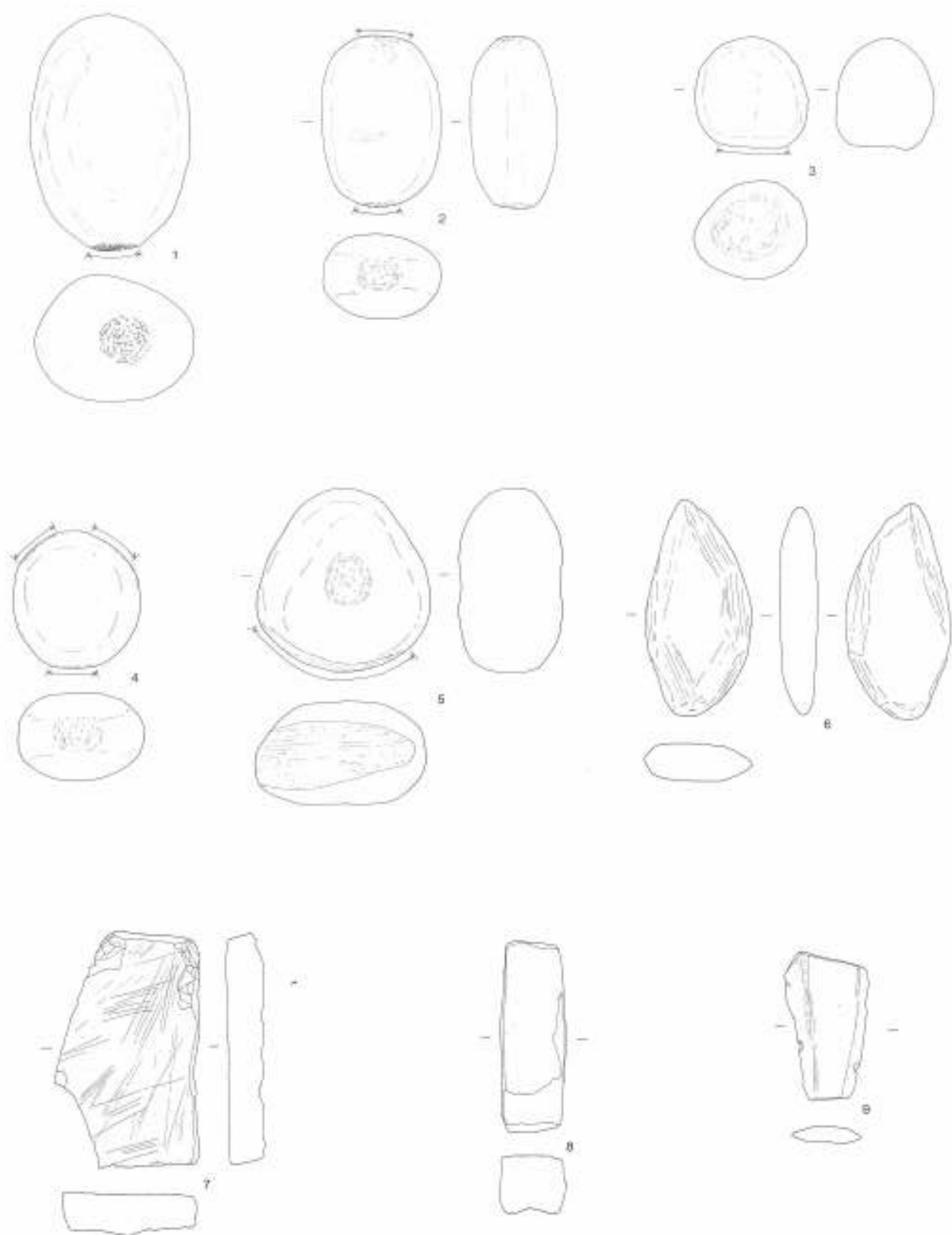


第56図 遺構外出土石器 (5)

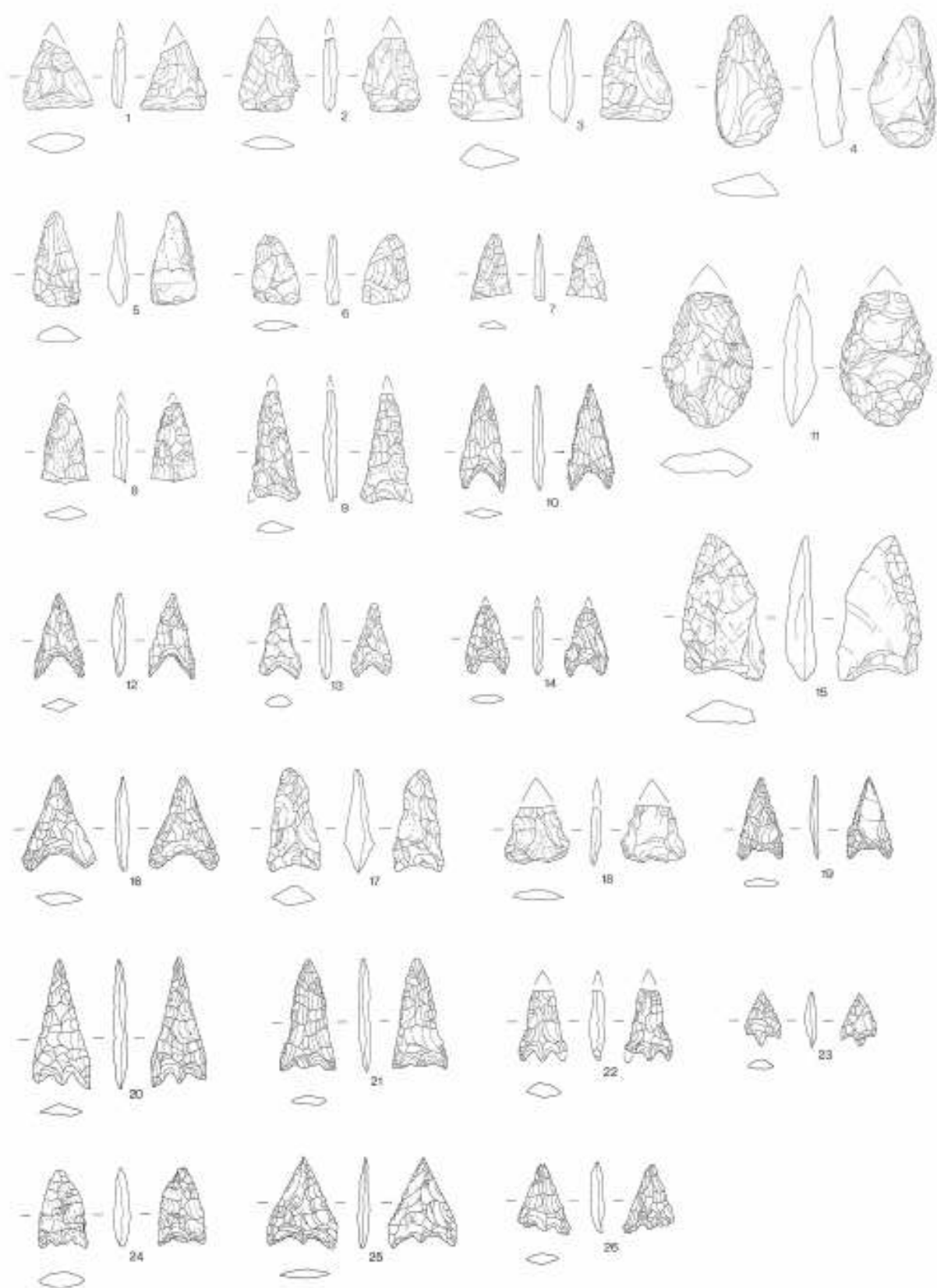




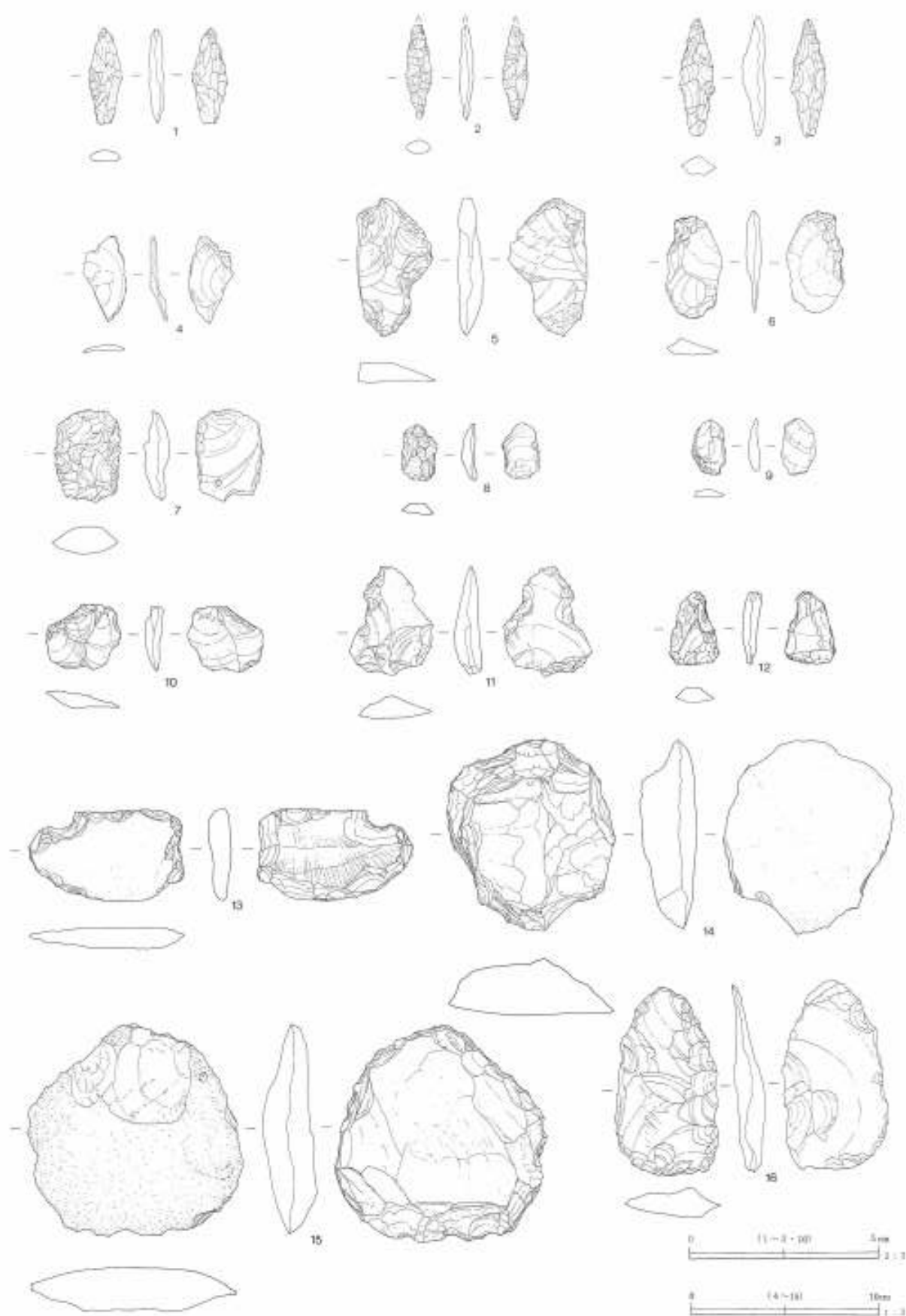
第57圖 遺構外出土石器 (6)



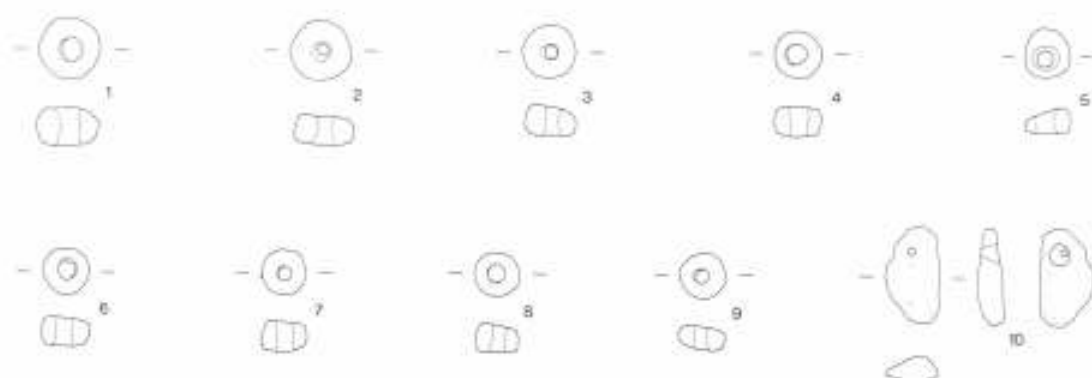
第58図 遺構外出土石器 (7)



第59図 遺構外出土石器 (8)



第60図 遺構外出土石器 (9)



第61図 遺構外出土石器 (10)

第1表 石器観察表 (2kg以上1g以下の計測値は省略)

図番番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	出土地点
第34図16	剥片石器	4.2	2.6	1.3	12.5	チャート	1号住居址
第34図17	砥石	6.7	4.9	4.2	55	多孔質安山岩	1号住居址
第35図2	縦形石匙	7.1	3.5	0.9	15	ガラス質黒色安山岩	2号住居址
第35図3	スクレイパー	5.6	5.0	1.4	45	チャート	2号住居址
第35図4	打製石斧	7.5	4.7	1.0	40	砂岩	2号住居址
第35図5	打製石斧	8.2	6.5	2.4	145	ホルンフェルス	2号住居址
第32図1	打製石斧	(6.7)	7.8	2.6	(180)	ホルンフェルス	1号再葬墓
第32図2	砥石	7.8	2.9	0.8	20	砂岩	2号再葬墓
第32図3	磨石	7.5	8.1	4.5	450	安山岩	2号再葬墓
第32図4	管玉	0.9	(0.2)	(0.2)	—	碧玉	3号再葬墓
第32図5	管玉	(0.9)	(0.4)	(0.3)	—	碧玉	8号再葬墓
第32図6	管玉	1.1	(0.3)	(0.3)	—	碧玉	8号再葬墓
第32図7	管玉	(1.7)	0.6	0.6	—	碧玉	8号再葬墓
第32図8	石鏃	2.1	1.1	0.3	—	黒色頁岩	9号再葬墓
第32図9	剥片石器	3.7	4.2	0.5	10	ガラス質黒色安山岩	9号再葬墓
第32図10	管玉	2.6	0.8	0.8	—	碧玉	6号土坑
第32図11	白玉	0.8	0.9	0.5	—	滑石	9号土坑
第32図12	石鏃	1.3	(0.8)	0.2	—	黒曜石	20号土坑
第32図13	石鏃	4.2	1.0	0.6	—	黒色頁岩	20号土坑
第32図14	砥石	19.2	4.8	3.8	675	砂岩	36号土坑
第32図15	打製石斧	19.8	9.1	3.0	552	ホルンフェルス	36号土坑
第32図16	石鏃	(2.3)	1.2	0.4	—	黒色安山岩	55号土坑
第32図17	横刃形石器	6.4	(9.9)	2.9	281	ホルンフェルス	70号土坑
第52図1	打製石斧	16.7	8.8	2.0	375	ホルンフェルス	遺構外
第52図2	打製石斧	17.5	9.1	3.2	499	安山岩	〃
第52図3	打製石斧	(13.9)	8.6	3.2	(395)	ホルンフェルス	〃
第52図4	打製石斧	9.0	4.8	1.5	72	ホルンフェルス	〃
第52図5	打製石斧	6.9	(5.0)	1.7	(60)	ホルンフェルス	〃
第52図6	打製石斧	8.0	6.1	1.4	(60)	ホルンフェルス	〃
第52図7	打製石斧	8.2	5.4	1.3	58	ホルンフェルス	〃
第53図1	打製石斧	19.6	10.2	3.1	471	ホルンフェルス	〃
第53図2	打製石斧	(14.1)	6.8	2.1	(265)	ホルンフェルス	〃
第53図3	打製石斧	13.9	6.4	2.0	250	ホルンフェルス	〃
第53図4	打製石斧	10.5	5.2	2.0	121	ホルンフェルス	〃
第53図5	打製石斧	16.1	6.6	3.5	352	ホルンフェルス	〃
第53図6	打製石斧	(9.6)	(6.0)	2.5	(201)	ホルンフェルス	〃
第54図1	打製石斧	17.8	10.8	3.2	623	ホルンフェルス	〃
第54図2	打製石斧	6.6	5.5	0.9	40	ホルンフェルス	〃
第54図3	打製石斧	8.8	6.8	2.9	156	ホルンフェルス	〃
第54図4	打製石斧	13.0	8.4	2.6	265	ホルンフェルス	〃
第54図5	打製石斧	(14.8)	(8.5)	3.2	(412)	ホルンフェルス	〃
第54図6	打製石斧	(7.4)	6.7	3.0	(186)	ホルンフェルス	〃
第54図7	打製石斧	(7.6)	6.8	(2.2)	(115)	ホルンフェルス	〃
第55図1	打製石斧	(14.9)	(9.2)	2.4	(40.5)	ホルンフェルス	〃
第55図2	打製石斧	11.1	6.9	2.1	179	ホルンフェルス	〃
第55図3	打製石斧	(9.5)	7.0	3.4	(270)	ホルンフェルス	〃
第55図4	打製石斧	(10.2)	9.4	3.7	(380)	ホルンフェルス	〃
第55図5	打製石斧	(8.9)	7.1	(3.2)	(213)	ホルンフェルス	〃

図番番号	器種	長さ (cm)	幅 (cm)	厚さ (cm)	重さ (g)	石質	出土地点
第55図6	打製石斧	(6.9)	6.4	2.3	(143)	ホルンフェルス	遺溝外
第55図7	打製石斧	(10.9)	8.6	(2.5)	(300)	砂岩	〃
第55図8	打製石斧	(7.4)	7.3	(3.2)	(240)	ホルンフェルス	〃
第56図1	打製石斧	(10.7)	12.4	1.9	(261)	ホルンフェルス	〃
第56図2	打製石斧	(10.5)	8.5	2.5	(299)	粘板岩	〃
第56図3	打製石斧	7.3	6.4	2.0	113	砂岩	〃
第56図4	打製石斧	(5.2)	(6.0)	(1.9)	(74)	砂岩	〃
第56図5	打製石斧	(12.3)	(4.8)	(2.0)	(210)	緑泥片岩	〃
第56図6	磨製石斧	(7.8)	(3.9)	(1.8)	(94)	砂岩	〃
第57図1	石皿	(15.9)	(9.7)	(5.9)	(1025)	石炭片岩	〃
第57図2	石皿	(10.0)	(11.6)	(1.8)	(330)	緑泥片岩	〃
第57図3	石皿	(14.5)	(9.1)	(3.5)	(620)	緑泥片岩	〃
第57図4	石皿	23.6	(13.0)	(3.9)	—	安山岩	〃
第58図1	磨石	12.0	8.1	6.8	928	安山岩	〃
第58図2	磨石	8.6	6.0	4.4	330	安山岩	〃
第58図3	磨石	5.7	5.5	4.8	193	シルト岩	〃
第58図4	磨石	6.5	6.8	4.9	317	閃緑岩	〃
第58図5	磨石	9.2	8.7	5.5	655	閃緑岩	〃
第58図6	砥石	10.8	5.3	1.9	111	砂岩	〃
第58図7	砥石	(11.8)	(7.0)	(1.9)	(231)	砂岩	〃
第58図8	砥石	(9.5)	3.4	2.9	(155)	シルト岩	〃
第58図9	砥石	7.5	4.3	1.0	36	砂岩	〃
第59図1	石鏃	(1.8)	1.7	0.3	—	砂岩	〃
第59図2	石鏃	(1.9)	1.5	0.4	—	チャート	〃
第59図3	石鏃	2.6	1.9	0.6	—	黒色頁岩	〃
第59図4	石鏃	3.3	1.7	0.6	—	チャート	〃
第59図5	石鏃	2.4	1.2	0.5	—	黒色頁岩	〃
第59図6	石鏃	1.7	1.2	0.4	—	チャート	〃
第59図7	石鏃	(1.6)	(1.0)	(0.3)	—	チャート	〃
第59図8	石鏃	(2.1)	(1.2)	(0.4)	—	チャート	〃
第59図9	石鏃	(2.7)	(1.2)	0.3	—	チャート	〃
第59図10	石鏃	2.2	1.2	0.3	—	黒色安山岩	〃
第59図11	石鏃	(3.5)	2.4	0.8	—	チャート	〃
第59図12	石鏃	1.6	1.3	0.4	—	黒色安山岩	〃
第59図13	石鏃	1.6	1.1	0.3	—	チャート	〃
第59図14	石鏃	(1.5)	1.1	0.3	—	黒色安山岩	〃
第59図15	石鏃	3.5	2.1	0.8	—	黒色頁岩	〃
第59図16	石鏃	2.0	1.8	0.4	—	ホルンフェルス	〃
第59図17	石鏃	2.5	1.3	0.8	—	チャート	〃
第59図18	石鏃	(1.4)	1.5	0.3	—	チャート	〃
第59図19	石鏃	1.9	1.2	0.9	—	チャート	〃
第59図20	石鏃	3.2	1.5	0.4	—	黒色頁岩	〃
第59図21	石鏃	(2.8)	1.5	0.3	—	チャート	〃
第59図22	石鏃	(1.8)	(1.3)	0.4	—	黒色安山岩	〃
第59図23	石鏃	1.4	0.9	0.3	—	チャート	〃
第59図24	石鏃	(1.9)	1.2	0.4	—	黒色頁岩	〃
第59図25	石鏃	2.2	1.7	0.3	—	黒色頁岩	〃
第59図26	石鏃	(1.8)	1.3	0.4	—	黒色頁岩	〃
第60図1	石鏃	2.5	0.9	0.4	—	黒色頁岩	〃
第60図2	石鏃	2.5	0.7	0.4	—	チャート	〃
第60図3	石鏃	3.1	0.9	0.6	—	黒色頁岩	〃
第60図4	剥片石器	4.6	2.2	0.4	—	黒色安山岩	〃
第60図5	スクレイパー	7.3	4.0	1.2	36	黒色頁岩	〃
第60図6	剥片石器	5.4	3.0	0.8	—	黒色頁岩	〃
第60図7	スクレイパー	4.8	3.4	1.4	24	チャート	〃
第60図8	剥片石器	3.0	1.8	0.7	—	黒曜石	〃
第60図9	剥片石器	3.0	1.8	0.6	—	チャート	〃
第60図10	スクレイパー	4.1	3.3	0.8	11	黒色頁岩	〃
第60図11	剥片石器	5.8	4.5	1.4	—	黒色頁岩	〃
第60図12	剥片石器	3.9	2.6	0.9	—	チャート	〃
第60図13	横刃形石器	4.8	8.1	1.2	65	粘板岩	〃
第60図14	円盤状打製石器	10.1	8.7	3.7	295	ホルンフェルス	〃
第60図15	円盤状打製石器	11.2	11.0	2.6	361	粘板岩	〃
第60図16	スクレイパー	4.9	2.7	0.8	9	黒色頁岩	〃
第61図1	白玉	1.2	1.2	0.7	—	滑石	〃
第61図2	白玉	1.2	1.2	0.5	—	滑石	〃
第61図3	白玉	1.1	1.0	0.6	—	滑石	〃
第61図4	白玉	0.9	0.9	0.6	—	滑石	〃
第61図5	白玉	0.9	1.0	0.4	—	滑石	〃
第61図6	白玉	0.9	0.9	0.5	—	滑石	〃
第61図7	白玉	0.9	0.9	0.6	—	滑石	〃
第61図8	白玉	0.9	0.9	0.5	—	滑石	〃
第61図9	白玉	0.9	0.9	0.4	—	滑石	〃
第61図10	垂飾	1.9	1.1	0.5	—	ヒスイ	〃

V 調査のまとめ

(縄文時代)

横間栗遺跡最古の足跡は縄文時代前期後半に遡る。諸磯 a 式土器の使われていた頃である。しかし、それは僅か一かけらの土器という証拠物件があったに過ぎず、具体的な暮らしについては語りようもない。そこにムラがあったという事実は認められなかったのである。それは横間栗遺跡の立地が台地上になく、荒川と利根川の氾濫の影響を受け易い自然堤防上にあったという事情と不可分の関係にあるように思われる。一時的ではあるが、当地がある程度安定したムラを営み易い環境となったのは、ようやく縄文時代後期中頃になった頃かららしい。当遺跡出土土器のうち第Ⅰ群とした土器の大半がその頃の所産である。しかし、もちろん当該時期の住居跡が発見された訳ではないので、ここにムラがあったとは断言できない。だが、完形土器や実測復元が可能な土器を含む豊富な土器の出土は、間違いなく近くにムラがあったことを示唆している。

なお、土器群の編年的位置を述べれば、加曾利 b 1 (新) 式段階 [註 1] 以降、加曾利 b 2 式段階までが特にまとまっていると言える。特に、実測図化した算盤玉状の形態をした土器 (第 51 図 1・2) や浅鉢 (第 51 図 3) [註 2] などを主体とする当遺跡の土器群は、川里村赤城 12 号住居跡 (新屋他 1988) や寿能泥炭層遺跡第 10 地区土器群 (大塚・新屋他 1984) に連動する要素が強く、さらに武蔵野台地方面へと類例は広がる。また、胴部に配される矢羽根状あるいは羽状沈線文は信州方面へと連動する要素でもあり注目しておくべきであろう。

(弥生時代)

一時賑わった横間栗遺跡から、まもなく人々の往来は絶える。再び人々の関心にのぼるのは弥生時代に入ってからのことであった。弥生人は当地を墓地として開拓したのである。13 基の再葬墓と 71 基の土坑 (すべてが弥生時代の所産である保証はない) がそれを雄弁に物語る。

再葬墓とは、<①土葬 (一次埋葬) →②発掘→③選骨→④壺等への納骨 (二次埋葬)> の手順を踏むと一般的に理解されている。また、時には①、②が省略されて、すぐに遺骸の解体が行われ、③→④へと進行するとも言われる。前者の場合には、壺等の埋納された墓壇の他に、いわゆる墓壙 (土坑) の存在もクローズアップされなければなるまい。もちろん風葬や鳥葬等のように土中への埋葬を必要としない葬法の存在が証明されればその限りではないが、しかし、一次埋葬を伴わない後者は、原則的に土坑を必要とすることはない [註 3]。果たして、当横間栗遺跡の土坑は何を意味するのだろうか。

ここでもう一度、再葬墓や土坑の遺跡でのあり方を確認するために、第 4・5 図を参照願いたい。①再葬墓は V-11 グリッド周辺に集中する一群 (第 1・5・7・10・12・13 号…A 群と仮称する) と V-15 グリッド周辺に集中する一群 (第 6・11 号…B 群と仮称する) とに分けられる。②土坑は再葬墓より若干広範な分布を示すが、その集中地点は再葬墓と一部重なる。以上の 2 点を明瞭に指摘することができる。つまり、再葬墓の分布と土坑の分布は極めて類似しており、不可分の関係にあったと推測されるのである。特にまとまっているのは A 群であり、11 基の再葬墓と 20 基の土坑が存在している。土坑は一次埋葬用であると結論付けてしまえば事は簡単であろうが、果たしてそうだろうか。その証拠は発見されていない。11 基と 20 基という関係はどのように説明すれば良いのだろうか。また、この小群の単位は何を意味するの

か。現代の墓地に見るように、代々の家族乃至一族を示すのだろうか。いずれにしろ当遺跡のみで解決できる問題ではない。

一方、再葬墓A群から南西へ約20 m離れたZ-13・14 グリッド付近からは4×1 mの範囲に焼土や骨、骨粉、炭化物等の集積及び赤化土層が確認されたという（Z遺構と仮称する）。当遺跡では、再葬墓出土の人骨や歯が火を受けていたとする分析データはないが、再葬までの過程でか、あるいは再葬の後に選骨されなかった他の部位をここで火葬していたのかも知れない。しかし一方で、再葬墓内で検出される壺等の土器類は、ほとんど例外なく二次的な火熱を受け、煤の付着が見られたり、胴部以下が赤化して相当脆くなっていたり、あるいは器壁が膨隆していたりしているが、これらの土器類は一体どこで火を受けたのだろうか、また何時火を受けたのだろうか。一般的には日常生活の器からの転用によるためであると説明されているようではあるが、しかし、ここで日常の器から非日常の器（ここでは納骨器）へと生まれ変わるための火を伴う儀式的存在を想定しておくことは唐突であろうか。納骨されなかった骨（全部か一部かは不明）の火葬場（焼骨を納骨する場合もあったろう）＝納骨器誕生の場合＝Z遺構と仮に想定しておこう。選骨から納骨への過程は種々検討されても、納骨されなかった骨の行方や納骨器としての有資格のための手続き等についての意見はあまり聞かない。再葬墓・土坑・Z遺構という三位一体の関係を今後、他遺跡例をも参考に検討していく必要があるだろう。なお、群馬県藤岡市沖Ⅱ遺跡（荒巻他1986）は横間栗遺跡同様三者の遺構がよく似た状態で検出されており注目しておきたい。

次は、再葬墓の被葬者の性別と伴出遺物との関係であるが、付篇によれば第1号が女性、第6号が女性、第12号が男性であろうとのことであるが、第1号からは打製石斧が出土しており注目されたが、残念ながら他の再葬墓からは副葬品等の出土はなく、遺物と性別との関係を窺うことはできなかった。しかし、出土石器は明らかに再葬墓ごとに違う。つまり、第2号からは磨石と砥石という組み合わせが、第9号からは石鐮とスクレイパーという組み合わせが見られたのである。前者はどちらかといえばムラの中で使用されるもの、後者はムラの外で用いられる道具と考えることができよう。前者は女の道具、後者は男の道具と考えて良いように思われる。つまり第2号は女性、第9号は男性が葬られていたと見るのである。同様の視点で土坑を見ると、第20号、第55号は石鐮のみで男性、第36号は打製石斧と敲石で女性、第70号は打製石斧のみなので女性ということになる。当遺跡では、男性用石器と女性用石器の混在は認められなかった。検出石器が被葬者の持ち物であったと仮定するならば、道具の所有形態は極めて縄文人的であったとすることができるであろう。

さて、ここで各再葬墓を時期別にまとめておこう。それぞれの再葬墓は切り合いがあるわけでもなく、当遺跡のみでの段階設定は難しいが、種々の意見の相違を承知の上で、次のⅠからⅢ期に取りあえず分けておきたい。すなわち、Ⅰ期には第1・6・11号再葬墓、Ⅱ期には第3・8・9・10・12・13号再葬墓、Ⅲ期には第2・4・5・7号再葬墓を該当させておく。しかし、例えば第9・10・12・13号はⅢ期に限りなく近い。またⅢ期としたものでも第5号以外はおそらくⅢ期の中でもより古相を示しているともみなすことができるであろう。いずれにしろ当該時期の土器群の検討は筆者自身緒に着いたばかりであり、今後の課題として積極的に取り組んでみたいと考えているところである。識者のご意見を切に請うものである。なお、Ⅰ期は沖Ⅱ段階、Ⅱ期は岩櫃山段階、Ⅲ期は上敷免段階と今は大雑把に捉えておこうと思う。（弥生時代の打製石斧）

横間栗遺跡出土の石器は、再葬墓から出土したものを除くと、縄文時代後期から弥生時代中期の土器群との共伴であるため、時期を特定するのは難しい。ここでは、多数出土した打製石斧に絞り、弥生時代前期から中期の他遺跡の事例との比較を試みたい。

弥生時代前期末を中心とする群馬県藤岡市沖Ⅱ遺跡（荒巻他 1986）では、打製石斧の形態は、縄文後・晩期に特徴的な分銅形はなく、肩の張らない撥形打製石斧が主体を占めている。いわゆる石鍬とされる大型の石器が主に出土しているが、長さは7～19cm代まで（第62図1）と幅広い〔註4〕。

一方、弥生時代中期中葉を中心とする埼玉県行田市・熊谷市の池上遺跡（中島他 1984）・小敷田遺跡（吉田他 1991）・池上西遺跡（宮他 1983）では、大型で肩の張る撥形打製石斧が主体で、10cm以下の小型品はまったく無くなる。また、肩が張ることと関係してか、幅が大きくなることが看取される（第62図2）。

横間栗遺跡は出土土器からみると、沖Ⅱ遺跡と池上・小敷田・池上西遺跡（以下池上遺跡と呼ぶ）との間の時期に再葬墓が営まれた遺跡であるが、以上の例を参考にすると、明らかに縄文後・晩期と考えられる分銅形（第52図1～7）と、撥形で肩が張らない小型の石斧（第54図3、第56図3）以外は、両遺跡で出土している形態と共通している。沖Ⅱ遺跡に特徴的な大型で肩の張らない撥形石斧は、本遺跡においては第53図1があげられよう。一方、池上遺跡で主体を占める大型で肩の張る撥形打製石斧は、第54図1や第36号土坑出土の第32図15があげられる。また、やや小さいが第54図4も同様であろう。その他は欠損品が多いため、時期は言及しづらいがこの時期のものも多いと思われる。なお、沖Ⅱ遺跡例と池上遺跡例との形態上の差異は地域差の可能性も否定できないが、当遺跡で、両遺跡に特徴的な形態の石器が出土していることをふまえると、横間栗の時期を境に形態的な変化があるともいえよう。

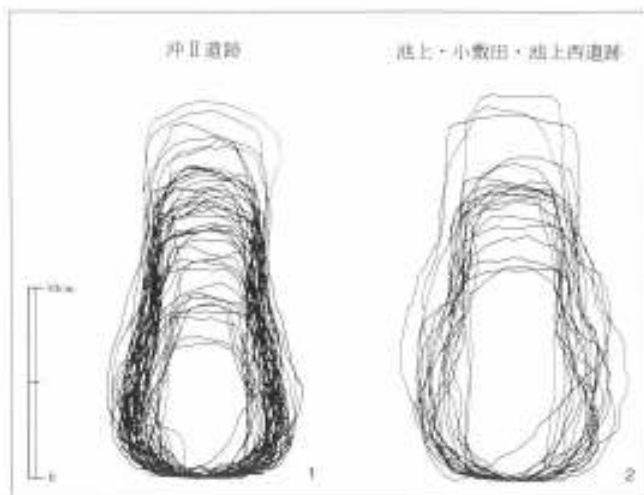
最後になるが、本遺跡では弥生期に特徴的な、大陸系磨製石斧は出土しなかった。関東北西部の該期の遺跡では稲作関係以外の石器が主体を占めることが指摘されている（石川 1994）。そうしたことから考えると、本遺跡もおおむね近隣の遺跡と同様な状況であると思われる。

註1 藤沢市西宮1号址出土土器群に最も近い。

註2 この手の土器の口縁部が縄文帯となっている例は僅少。

註3 納骨以外の遺骸を土中に埋葬するケースも当然想定しておかなければならないであろう。その場合にはやはり土坑が存在することになる。

註4 形態図は完形石斧のみで作成した。



第62図 打製石斧形態図

付篇 横間栗遺跡出土人骨

設楽博己・松村博文

(国立歴史民俗博物館) (国立科学博物館)

1 第1号再葬墓人骨遺存状態

第1号再葬墓は、土坑の中に大形の壺形土器が直立して埋置されている。深鉢形土器の破片が出土しており、蓋に用いられていたものと思われる。壺の中からは、人骨が出土している。松村氏の所見にもとづき、遺存状況について述べる。

長管骨が5本まとめて立てられている。左右の大腿骨、左右の脛骨、左腓骨である。腓骨は完全であるが、大腿骨と脛骨は近位部である。長管骨はいずれも骨端を欠く程度である。納入されたときから端部を欠いていたのか、腐食したのかよく分からない。それ以外の骨は土器の下方に肋骨が5～6片と鎖骨と思われる個体が認められ、さらに所々に5 mm～1 cm ほどの太さの骨体が数個体あるにすぎず、腕の長管骨や頭骨、寛骨などは見当たらない。残りやすい歯が一つも見つかっていないので、頭骨ははじめから入れられなかったのであろう。

大腿骨と脛骨はいずれも近位端を下にして入れており、骨端は壺の底面に接している。したがって、大腿骨と脛骨は腱などでつながっておらず、ばらばらにされた状態で納入されたものである。現状での骨端上位部分は土器の内側面から離れているので、土器を据え、骨を入れてすぐに土を入れながら土坑に埋納したのかもしれないし、遠位端は土器内面に接していたのかもしれない。あるいは肉がついた状態で入れたとも考えられるが、明確でない。

納入された骨に、同一の部位は2個体以上ない。したがって、この壺に取められた骨は一人分である。頭の骨や腕の骨は、別の土坑の土器に埋納されたのか、別の方法で処理されたのか分からないが、この壺に入れられた骨が脚の長管骨を中心としていることは注目される。再葬墓の土器棺からは人骨一体分がまとまって出土することは極めてまれで、多くは骨片や骨粉である。千葉県天神前遺跡の壺形土器から見つかった人骨も、成人の長管骨など一部の骨であった。一方、岩陰などには焼いた骨が大量に残されている。再葬のプロセスで、壺に入れる骨は選択されたものであり、残りは焼かれるなどしたのである。壺に入れる骨は一部で事足りたのである。(設楽)

2 部位の同定と所見

第1号再葬墓 (第63図)

- 1 左腓骨
- 2 左脛骨 (近位)
- 3 左大腿骨 (近位)
- 4 右大腿骨 (近位)
- 5 右脛骨 (近位)

6～10 不明

11～15 肋骨

性別の決め手となる関節部分に注目すると、大腿骨の骨頭の矢状径は 42 mm ある。縄文人の場合、女性が平均で 40mm 程、男性が平均 44mm 程であるので、本例は判断に苦しむが、全体的に華奢であることを考慮すると女性の可能性が高い。年齢は不明。骨体背面の柱状（ピラステル）はよく発達しており、縄文人的。すなわち在来系の弥生人と思われる。

第 6 号再葬墓

① 右上顎第 1 小白歯

左上顎第 3 大白歯

第 3 大白歯にいたっては、ほとんど咬耗がみられないことから、第 3 大白歯は萌出してまもないとみられる。第 1 小白歯

の咬耗は 1 度ほど。したがって年齢は青年（16 歳～20 歳）と推定される。第 1 小白歯の歯冠径がかなり小さいことから性別は女性の可能性があり、カリエス、歯石などは見られない。

第 9 号再葬墓

② 歯冠の破片

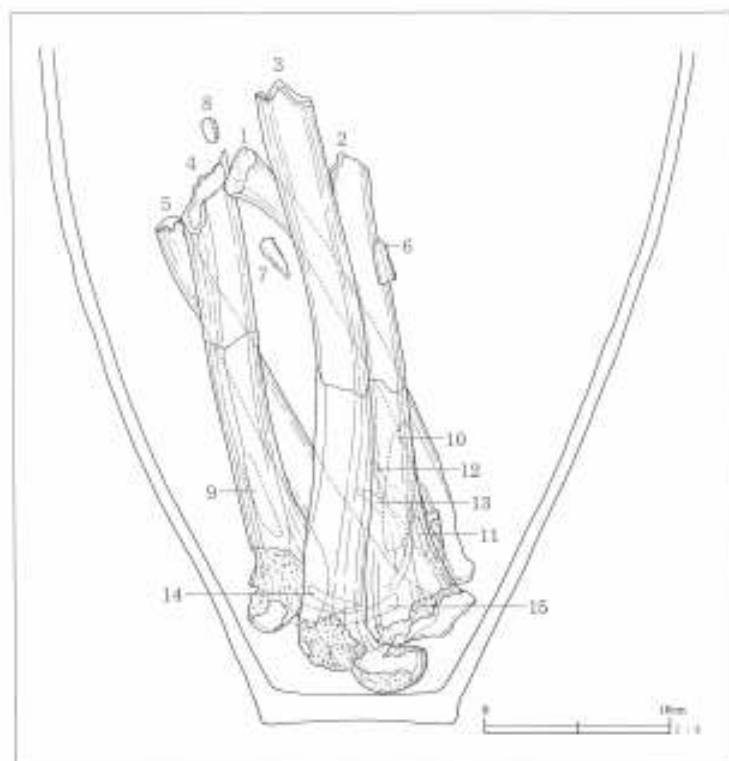
③ ？

第 12 号再葬墓

④ 右上顎第 1 小白歯

右上顎第 2 小白歯

咬耗は 1 度強。したがって、年齢は壮年前半（20 歳～30 歳）と推定される。歯冠径が大きいことから、性別は男性と思われる。カリエス、歯石などはない。（松村）



第63図 第1号再葬墓人骨出土状態（復元図）

主な引用・参考文献

- 愛知県考古学談話会 1985 『<条痕文系土器>文化をめぐる諸問題—縄文から弥生—』
- 青木幸一 1983・84 「荒海式土器の再検討 (一)・(二)」史館第15・16号
- 阿久津久 1979 「大宮町小野天神前遺跡の分析」茨城県歴史館報6
- 荒巻実・若狭徹他 1986 『沖Ⅱ遺跡』(藤岡市教育委員会)
- 新屋雅明他 1988 『赤城遺跡』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第74集
- 石川日出志 1985 「関東地方初期弥生土器の一系譜」『論集日本原史』(吉川弘文館)
- 石川日出志 1994 「東日本の大陸系磨製石器」考古学研究41-2
- 石川 均他 1985 『戸木内遺跡』(栃木県栗野町教育委員会)
- 井上唯雄・柿沼恵介 1977 「入門講座・弥生土器—関東 北関東1—」考古学ジャーナル140
- 大塚達朗・新屋雅明他 1984 『寿能泥炭層遺跡発掘調査報告書—人工遺物・総括編—』埼玉県教育委員会
- 書上元博他 1986 「神川村前組羽根倉遺跡の研究」埼玉県立博物館紀要12
- 葛西 功 1984 「甕形土器の変遷(上)」史館第16号
- 金子正之 1988 「弥生中期の再葬墓群—埼玉県横間栗遺跡」季刊考古学第23号
- 金子正之 1988 「熊谷市横間栗遺跡の調査(第2次)」第21回遺跡発掘調査報告会発表要旨(埼玉考古学会)
- 金子正之 1990 「弥生時代中期「再葬墓」の展開—熊谷市横間栗遺跡の発掘から—」埼玉自治8月号
- 北武蔵古代文化研究会他 1988 『東日本の弥生墓制』
- 木戸春男 1995 『根柢・横間栗・関下』埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第153集
- 工業善通 1987 「阿島式・須和田式土器のなかま」弥生文化の研究4(雄山閣出版)
- 栗原文蔵・石岡恵雄 1983 「四十板遺跡の初期弥生式土器再論」埼玉県立歴史資料館紀要第5号
- 群馬県考古学談話会他 1983 『東日本における黎明期の弥生土器』
- 小出輝雄 1997 「縄文時代末期から弥生時代中期前半の遺跡について—富士見市打越遺跡出土の追加資料の紹介をかねて—」埼玉考古第33号
- 埼玉県考古学会 1976 『埼玉県土器集成四—縄文晩期末葉～弥生中期』
- 斎藤 進 1990 「関東地方における弥生時代成立期の様相—「岩櫃山・須和田系」土器の編年と領域」研究紀要Ⅶ(東京都埋蔵文化財センター)
- 佐藤次男・井上義安・宮田毅 1978 「入門講座・弥生土器—関東 東関東1—」考古学ジャーナル146
- 設楽博巳 1988 「中部地方における弥生土器の成立過程」信濃第34巻第4号
- 設楽博巳 1993 「縄文時代の再葬」国立歴史民俗博物館研究報告第49集
- 杉原荘介 1967 a 「下総須和田出土の弥生土器に就いて」考古学集刊第3巻第3号
- 杉原荘介 1967 b 「群馬県岩櫃山における弥生時代の墓址」考古学集刊第3巻第3号
- 杉原荘介 1977 「須和田式土器の細分について」わかしおNo.1(若潮会連絡誌)
- 杉原荘介・大塚初重 1974 『千葉県天神前における弥生時代中期の墓址群』明治大学文学部研究報告考古学第四冊
- 杉原荘介 1981 『栃木県出流原における弥生時代の再葬墓群』明治大学文学部研究報告考古学第八冊
- 鈴木正博 1981 「「荒海」断想」利根川1

- 鈴木正博 1992 「隠蔽された荒海式」 婆良岐考古第 14 号
- 須藤 隆 1983 「東北地方の初期弥生土器—山王Ⅲ層式」 考古学雑誌第 68 巻第 3 号
- 須藤 隆 1987 「東日本における弥生文化の受容」 考古学雑誌第 73 巻第 1 号
- 須藤 隆 1987 「東日本における弥生文化の成立と展開」 弥生文化の研究 4 (雄山閣出版)
- 関 義則 1984 「須和田式土器の再検討」 埼玉県立博物館紀要 10
- 蓮瀬芳之他 1993 「上敷免遺跡」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 128 集
- 田中国男 1944 「縄文式弥生式接触文化の研究」
- 田部井功 1985 「須和田式土器の一考察—特に系譜の検討をふまえて」 古代第 80 号
- 中島 宏他 1984 「池守・池上」 (埼玉県教育委員会)
- 中村五郎 1972 「野沢Ⅰ式土器の類例とその時代」 小田原考古学研究会第 6 号
- 中村五郎 1982 「畿内第Ⅰ様式に並行する東日本の土器」
- 中村五郎 1988 「弥生文化の曙光」 (未来社)
- 西村正衛 1961 「千葉県成田市荒海貝塚」 古代第 36 号
- 西村正衛 1984 「石器時代における利根川下流域の研究—貝塚を中心として—」 (早稲田大学出版部)
- 春成秀爾 1993 「弥生時代の再葬制」 国立歴史民俗博物館研究報告第 49 集
- 蛭間真一他 1978 「上敷免遺跡」 (深谷市教育委員会)
- 増田逸朗他 1980 「甘粕山」 埼玉県遺跡発掘調査報告書第 30 集
- 馬目順一 1978 「入門講座・弥生土器—東北 南東北 3—」 考古学ジャーナル 154
- 馬目順一 1987 「柘形式と南御山式土器」 弥生文化の研究 4 (雄山閣出版)
- 宮 昌之他 1983 「池上西」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 21 集
- 古田 稔他 1991 「小敷田」 埼玉県埋蔵文化財調査事業団報告書第 95 集
- 若狭 徹 1992 「北関東における弥生土器の成立と展開」 戦台史学第 84 号
- 渡辺修一 1976 「関東地方における弥生時代中期前半の地域相」 研究紀要 10 (千葉県文化財センター)

写真図版



再葬墓集中地区全景(南方より)



第1号再葬墓(1)



第1号再葬墓(2)



第1号再葬墓内人骨



第2号再葬墓 (1)



第2号再葬墓 (2)



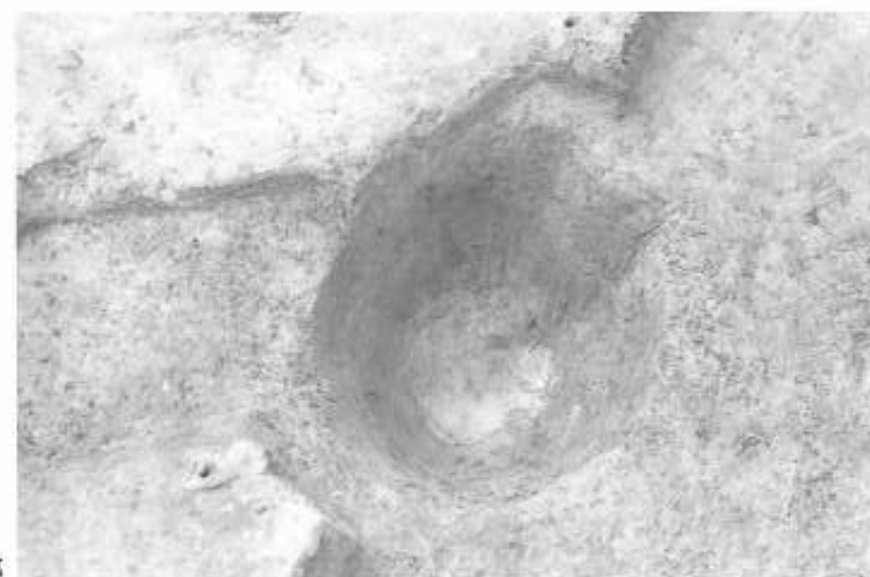
第3号再葬墓



第4号再葬墓



第5号再葬墓
(左側、右は3号再葬墓)



第6号再葬墓



第7号再葬墓



第8号再葬墓(1)



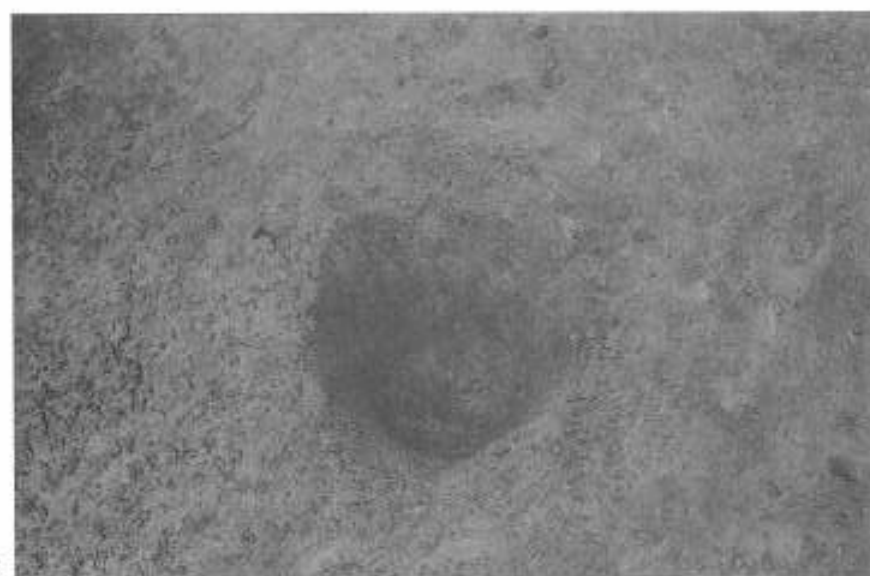
第8号再葬墓(2)



第9号再葬墓



第10号再葬墓



第11号再葬墓



第12号再葬墓



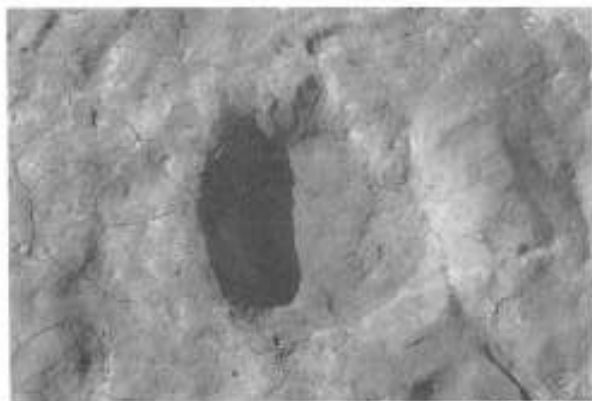
第13号再葬墓 (1)



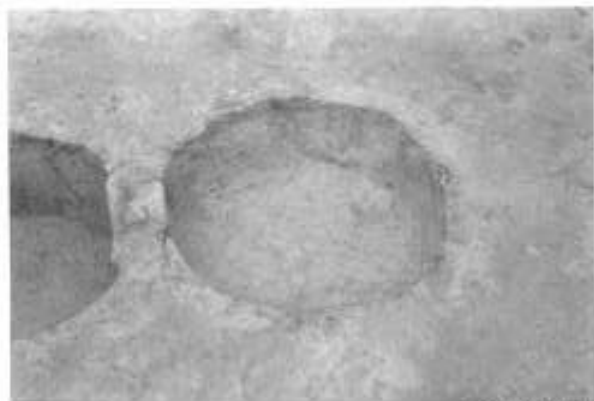
第13号再葬墓 (2)



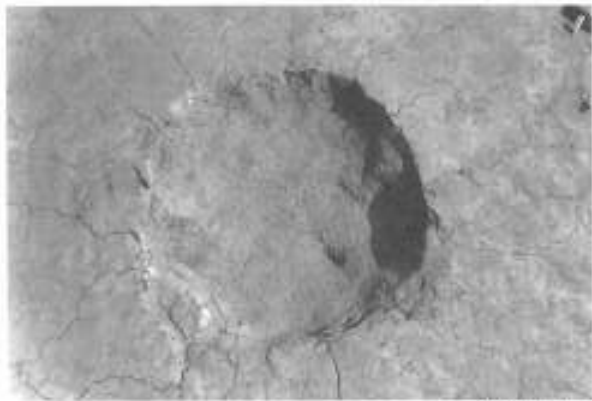
第2号土坑



第3号土坑



第5号土坑



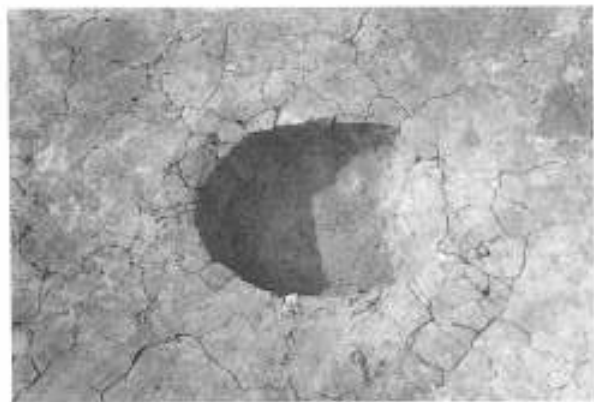
第6号土坑



第8号土坑



第9号土坑



第10号土坑



第11号土坑



第12·13·26~29·41号土坑



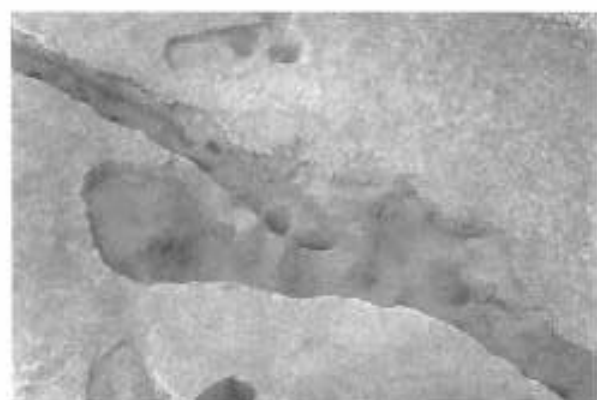
第15号土坑



第16号土坑



第17号土坑



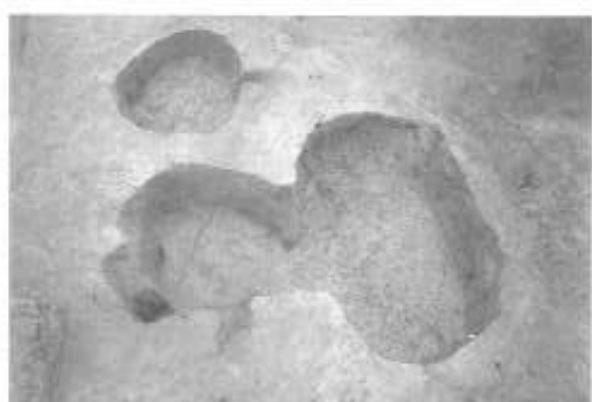
第20号土坑、第2号溝



第21·22号土坑



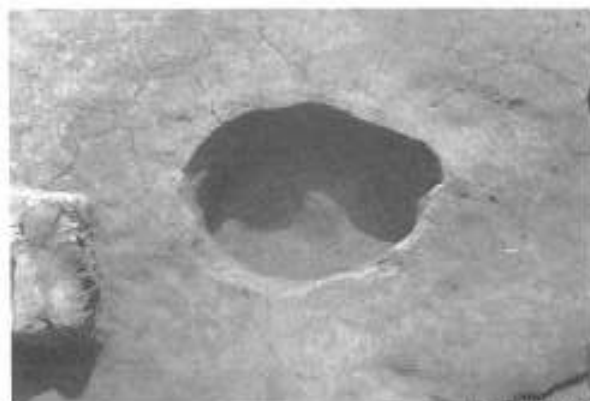
第30~32·49号土坑



第35·43号土坑



第36号土坑



第37号土坑



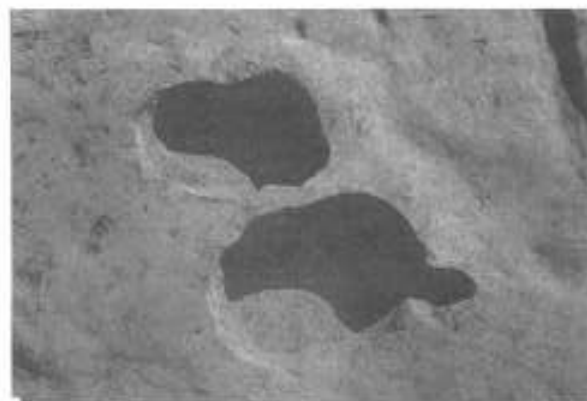
第38号土坑



第39号土坑



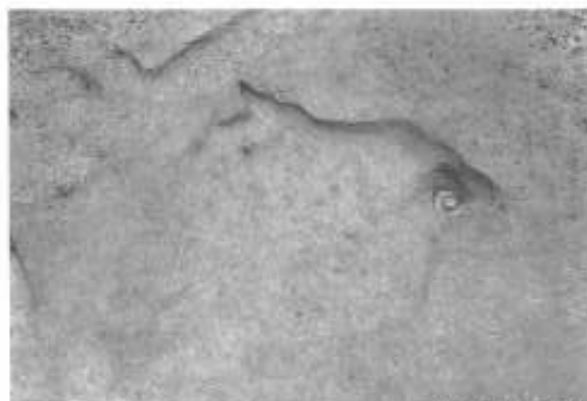
第40号土坑



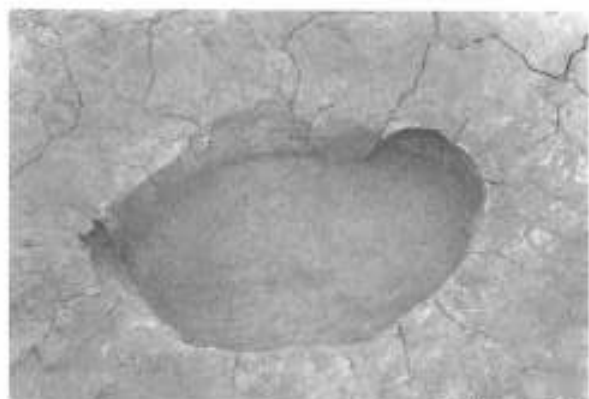
第42・79号土坑



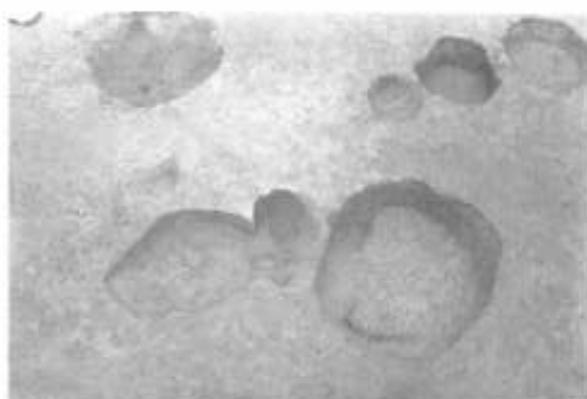
第44~47号土坑



第48・58号土坑



第50号土坑



第51号土坑、第2・3・5・7号再葬墓



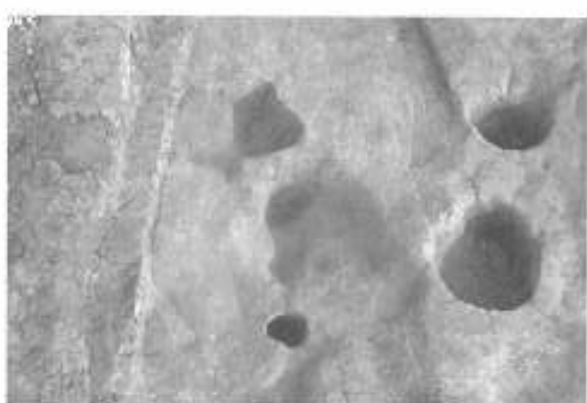
第52・63~67号土坑



第53号土坑



第54~57・59号土坑



第68・69号土坑、第9・10号再葬墓



第70~72・75~78号土坑



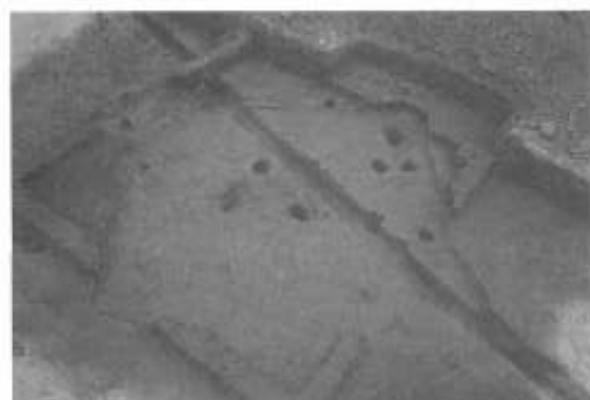
第73・74号土坑



第79号土坑



第1号住居跡



第2号住居跡



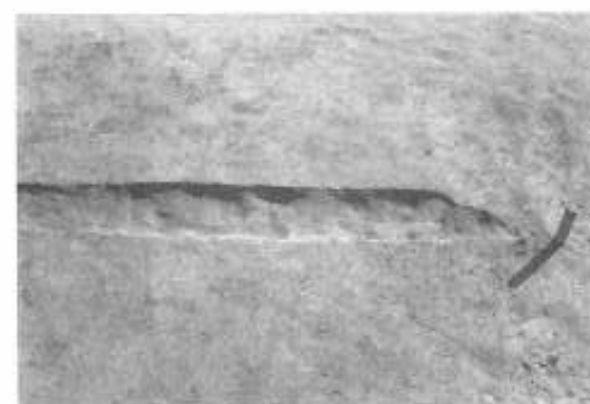
溝集中区遠景



第1号溝



第2号溝



第3A号溝



第5号溝



第6号溝(1)



第6号溝(2)



第6・11・12号溝



第16～19号溝



第1号再葬墓出土土器(第11図1)



第1号再葬墓出土土器(第11図2)



第2号再葬墓出土土器(第12图3)



第2号再葬墓出土土器(第12图4)



第2号再葬墓出土土器(第13图5)



第2号再葬墓出土土器(第13图6)



第3号再葬墓出土土器(第14図7)



第3号再葬墓出土土器(第14図8)



第3号再葬墓出土土器(第14図9)



第3号再葬墓出土土器(第14図10)



第6号再葬墓出土土器(第15图13)



第4号再葬墓出土土器(第14图11)



第5号再葬墓出土土器(第15图12)



第11号再葬墓出土土器(第19图26)



第7号再葬墓出土土器(第16图14)



第8号再葬墓出土土器(第17图15)



第8号再葬墓出土土器(第17图16)



第8号再葬墓出土土器(第17图18)



第8号再葬墓出土土器(第17图17)



第8号再葬墓出土土器(第17图19)



第9号再葬墓出土土器(第18图20)



第9号再葬墓出土土器(第18图22)



第9号再葬墓出土土器(第18图23)



第9号再葬墓出土土器(第18图21)



第13号再葬墓出土土器(第21图31)



第10号再葬墓出土土器(第16图24)



第12号再葬墓出土土器(第19图27)



第10号再葬墓出土土器(第16图25)



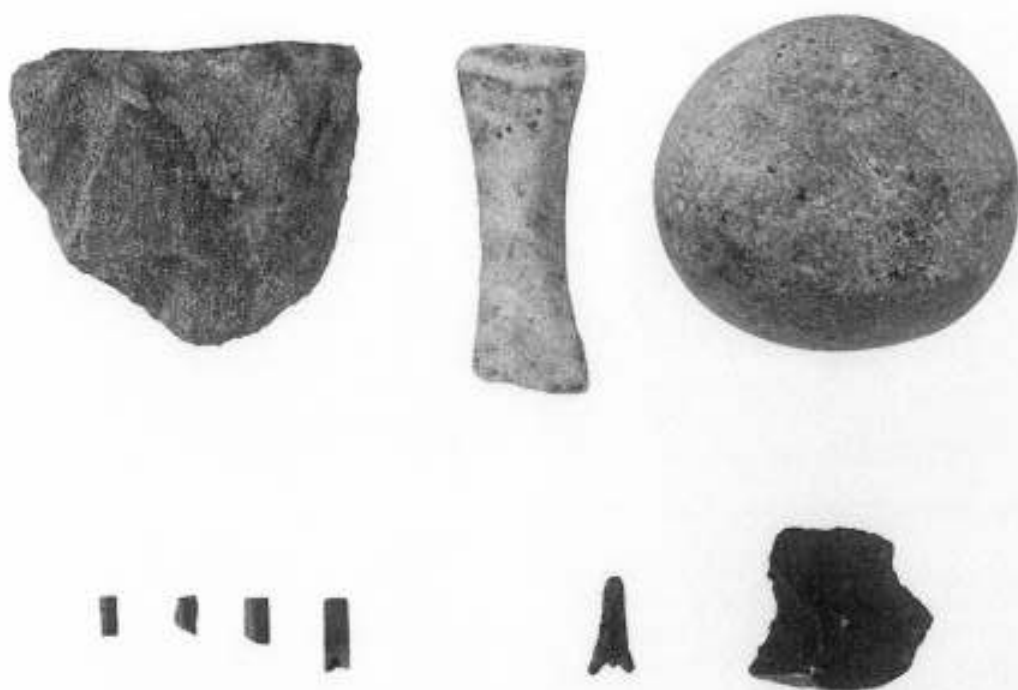
第13号再葬墓出土土器(第20图28)



第13号再葬墓出土土器(第21図29)



第13号再葬墓出土土器(第21図30)



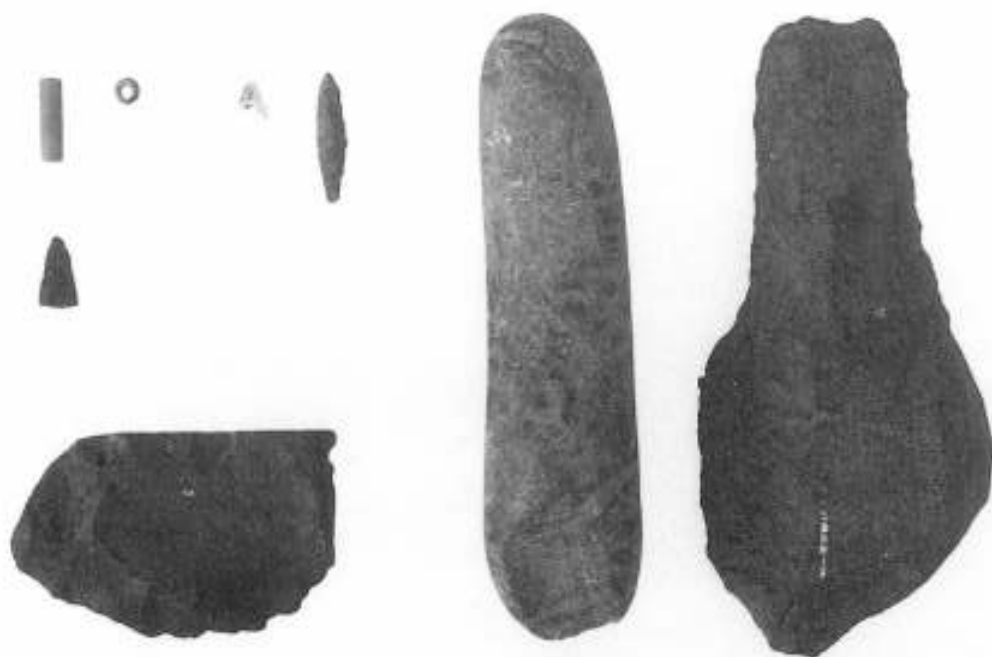
再葬墓出土石器(第32図1~9)



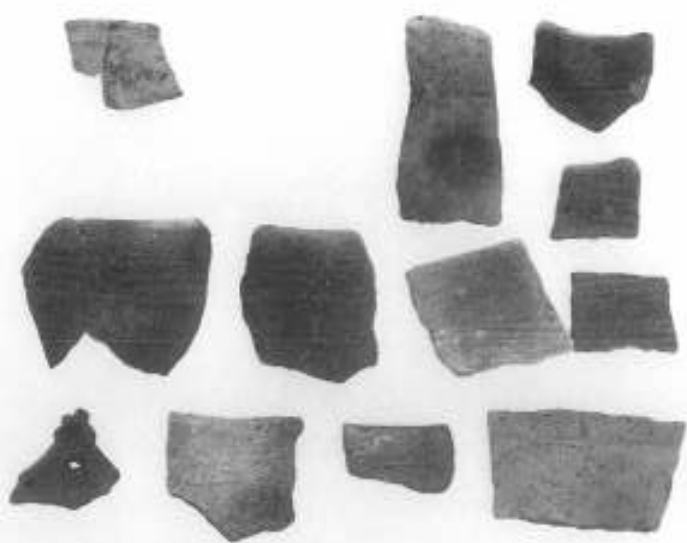
第37号土坑出土土器(第31图5)



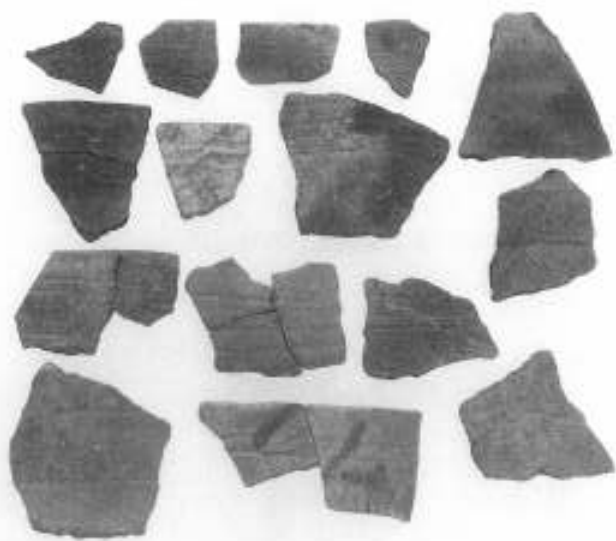
第79号土坑出土土器(第31图17)



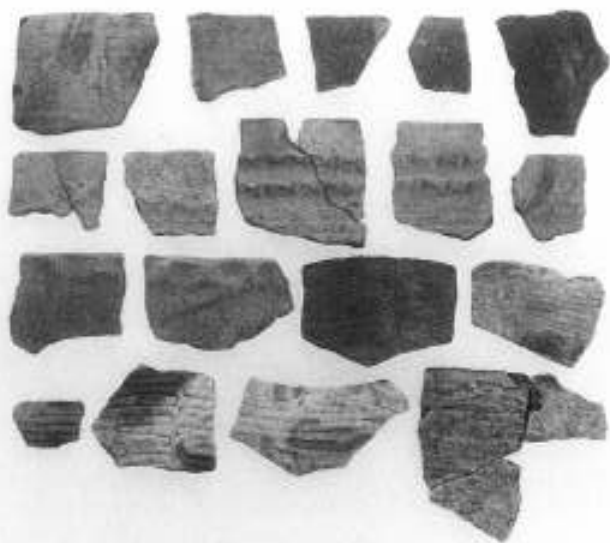
土坑出土石器(第32图10~17)



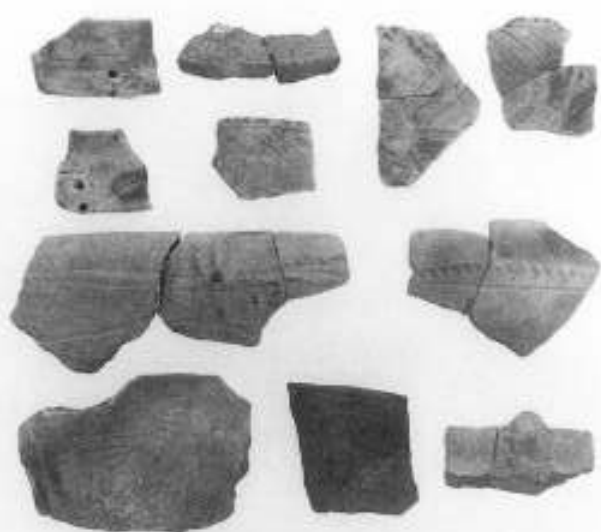
遺構外出土土器(1)



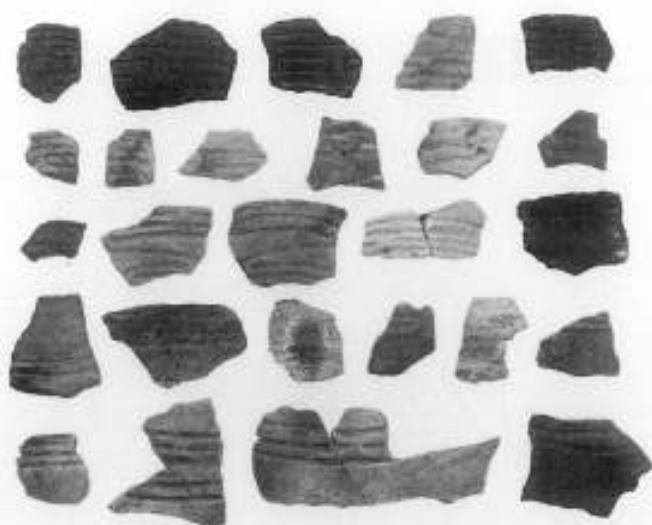
遺構外出土土器(2)



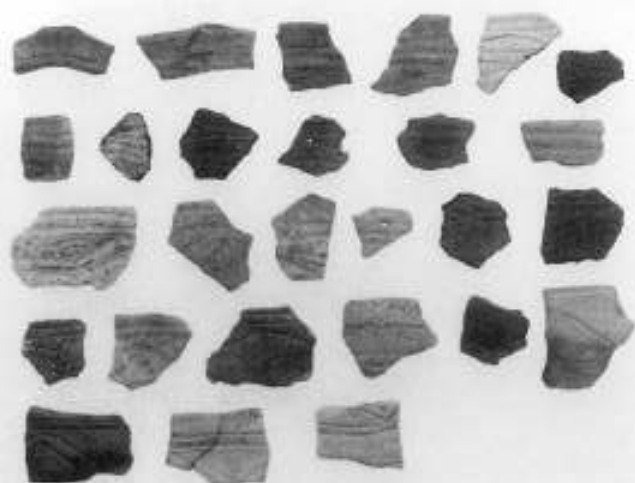
遺構外出土土器(3)



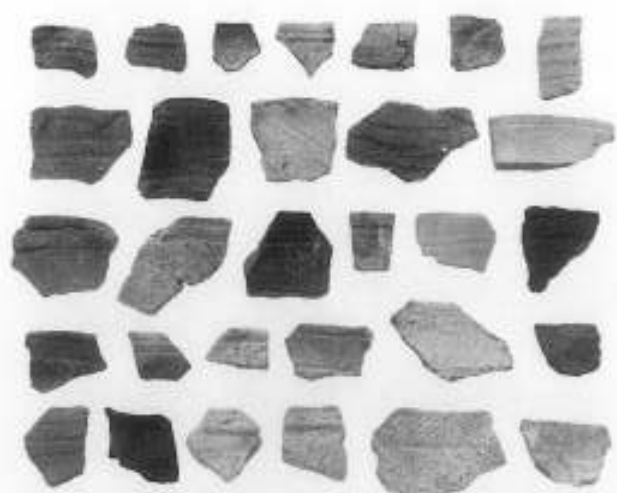
遺構外出土土器 (4)



遺構外出土土器 (5)



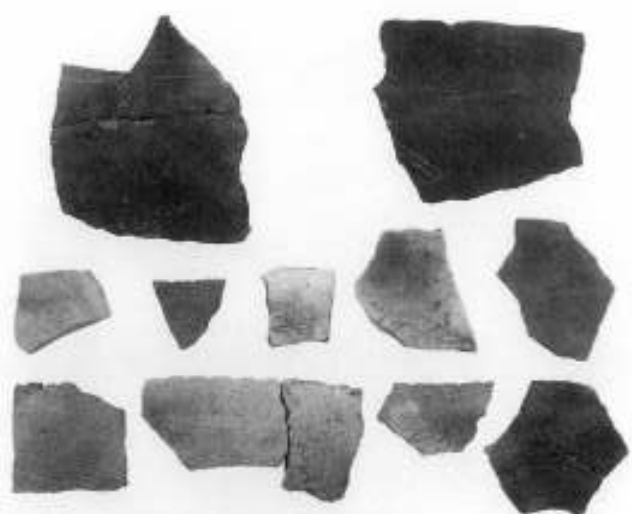
遺構外出土土器 (6)



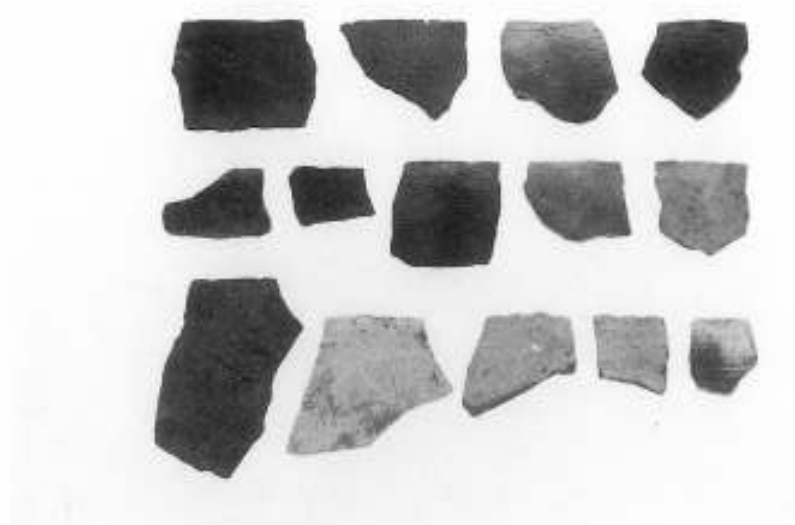
遺構外出土土器(7)



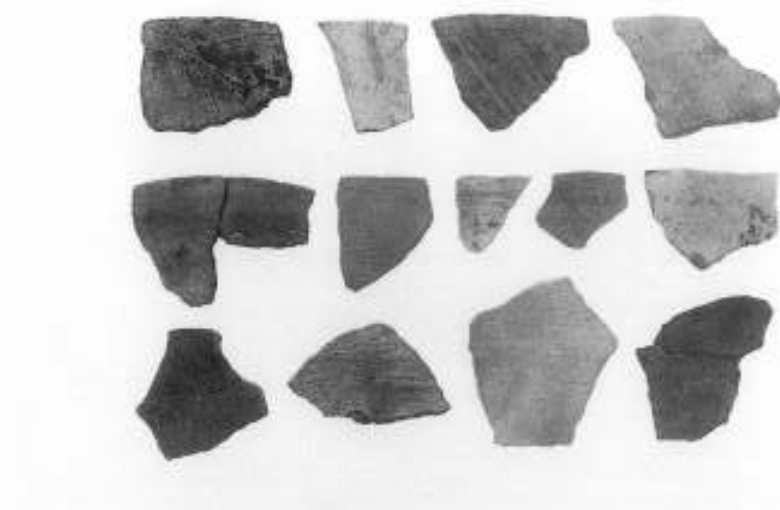
遺構外出土土器(8)



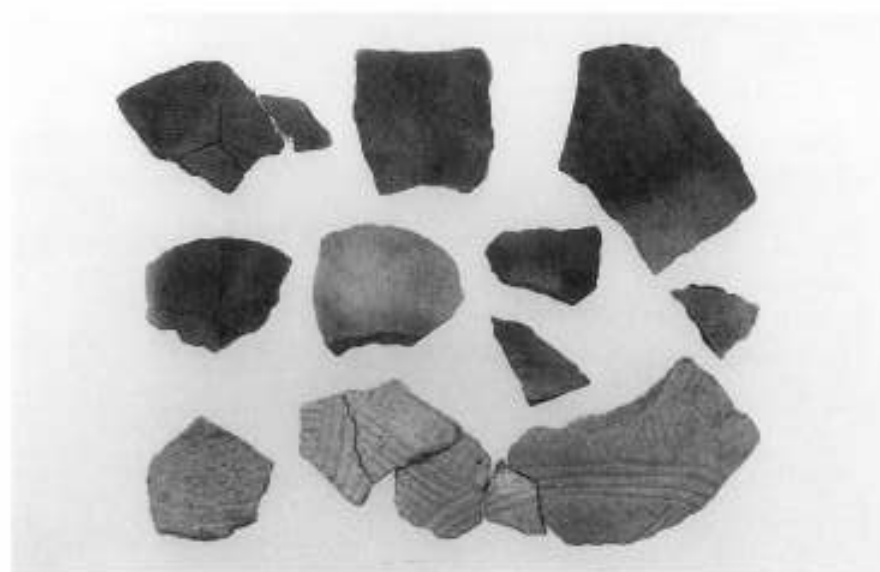
遺構外出土土器(9)



遺構外出土土器 (10)



遺構外出土土器 (11)



遺構外出土土器 (12)



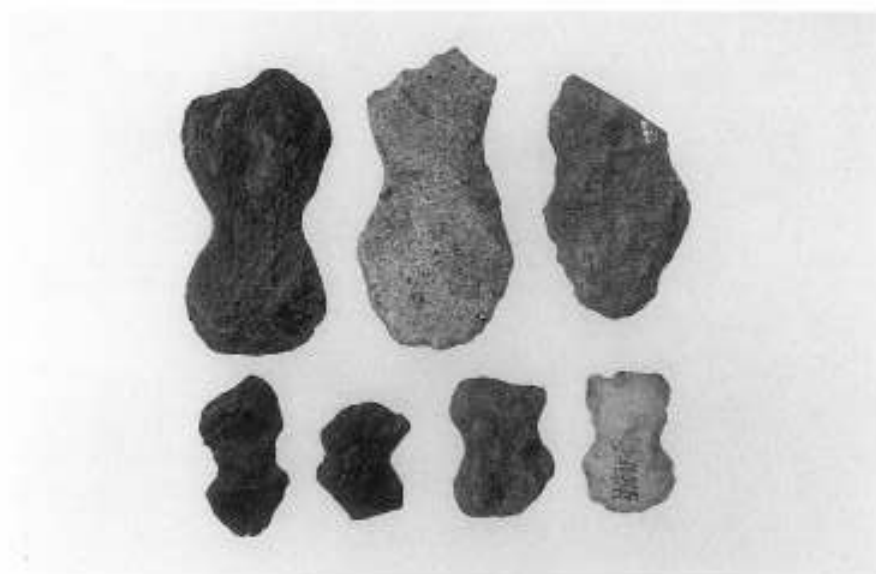
遺構外出土土器(第51図1)



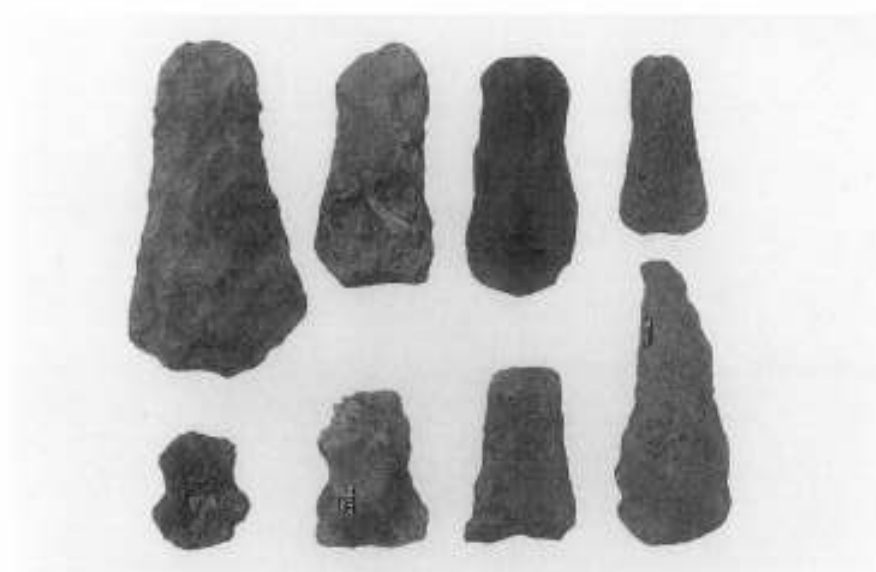
遺構外出土土器(第51図2)



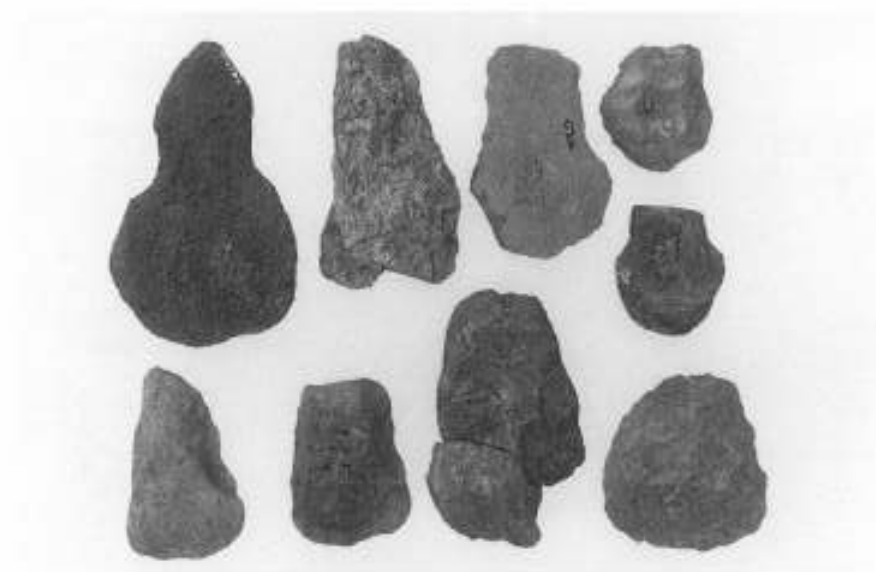
初圧痕のある土器(第31図17)



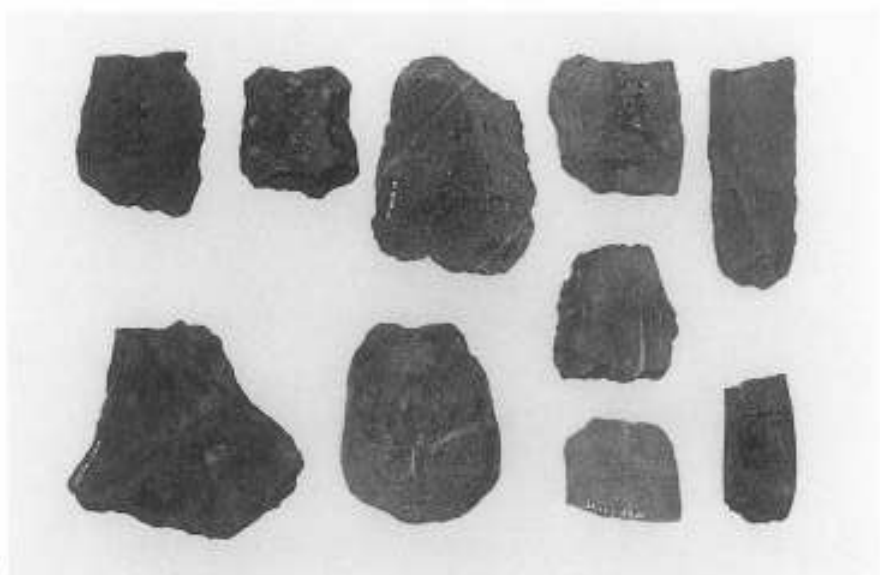
遺構外出土石器 (1)



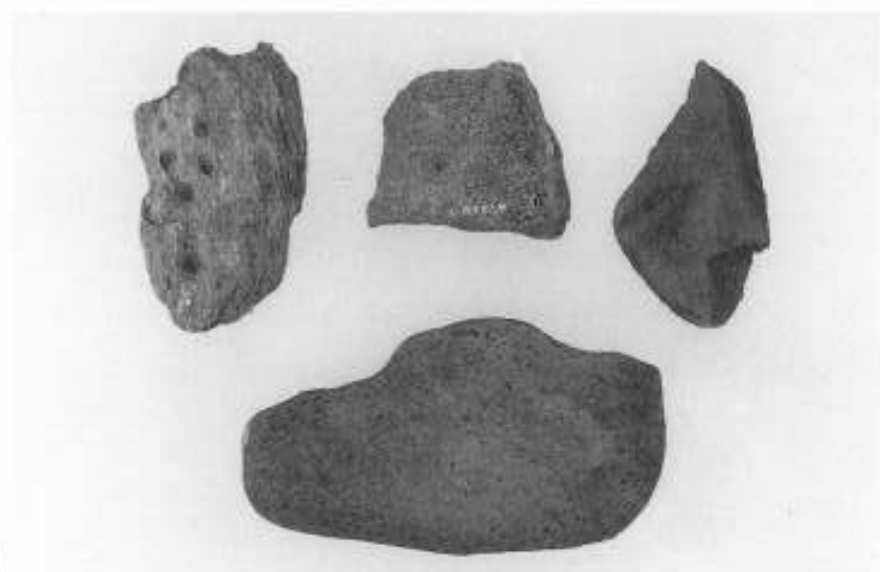
遺構外出土石器 (2)



遺構外出土石器 (3)



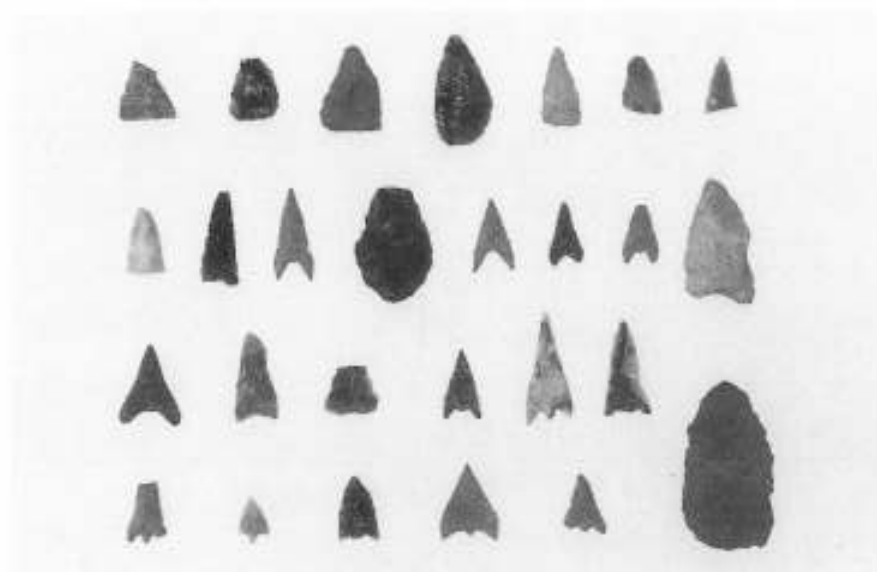
遺構外出土石器(4)



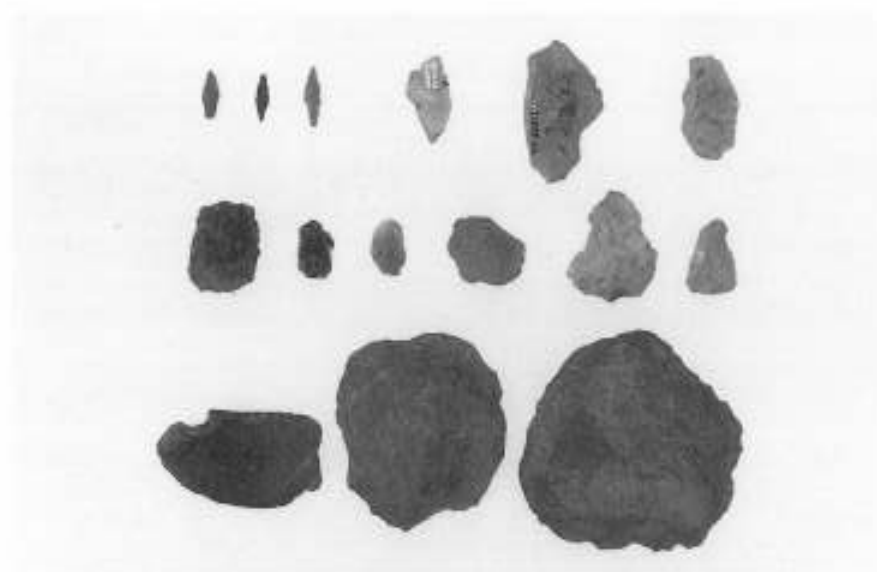
遺構外出土石器(5)



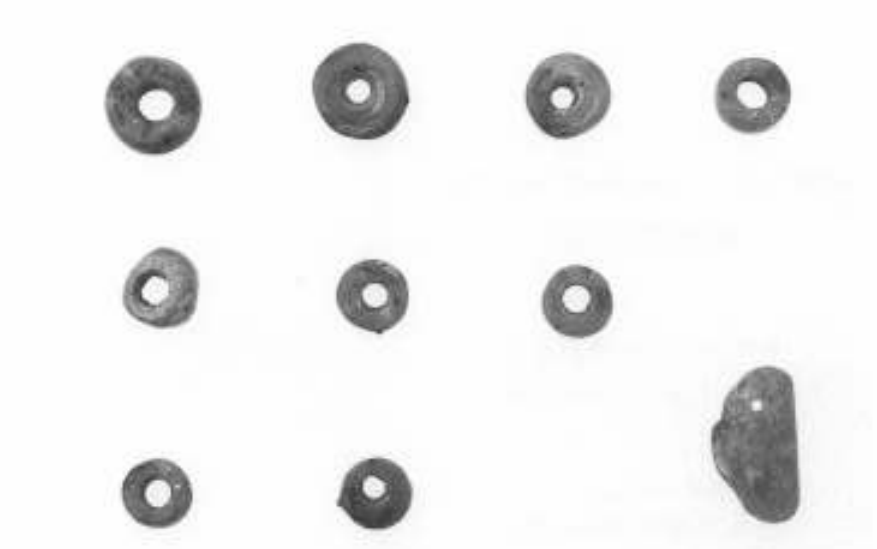
遺構外出土石器(6)



遺構外出土石器 (7)

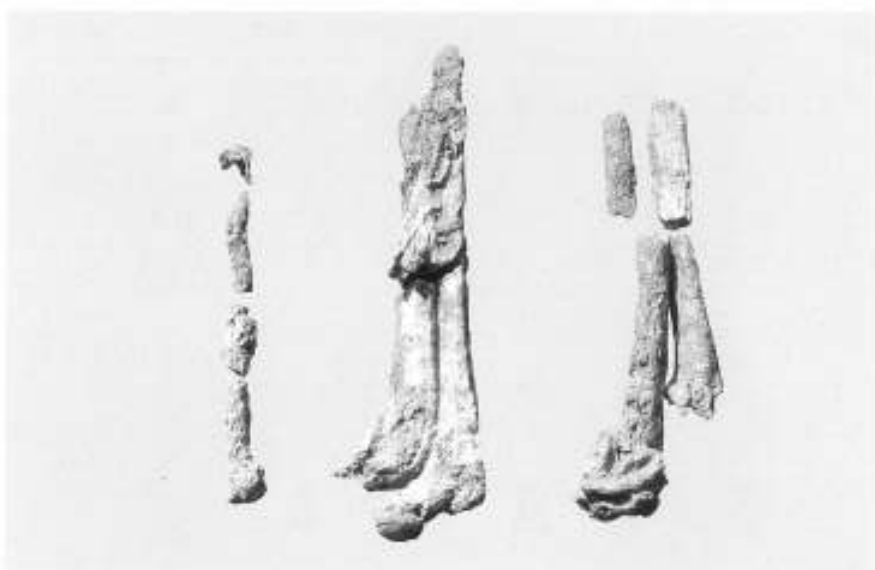


遺構外出土石器 (8)



遺構外出土玉類

第1号再葬墓壺内人骨
(左より図番号1、2、3・4)



第6号再葬墓出土白歯(上)
第12号再葬墓出土白歯(下)



報告書抄録

ふりがな	よこまくりいせき							
書名	横間栗遺跡							
副書名	平成10年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書							
巻次	—							
シリーズ名	—							
シリーズ番号	—							
編著者名	鈴木 敏昭							
編集機関	熊谷市教育委員会							
所在地	〒360-8601 熊谷市宮町2-47-1 TEL0485-24-1111							
発行年月日	西暦 1999 (平成 11) 年 3 月 31 日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コ ー ド		北 緯 (° ' ")	東 経 (° ' ")	調査期間	調査面積 (㎡)	調査原因
		市町村	遺跡番号					
横間栗遺跡	埼玉県熊谷市大字西別府字横間栗 618-1 他	11202	62	36°11'36"	139°20'30"	19870119 ～19870309 19870707 ～19871110	500 3,500	衛生センター拡張工事
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺跡		主な遺物	特記事項		
横間栗遺跡	集落跡	縄文時代	遺物包含層		縄文土器・石器			
		弥生時代	再葬墓	13	弥生土器・石器・玉類	再葬墓からは複数土器の一括出土や石器、玉類、また人骨や歯等の検出された壺などがあり注目された。		
			土坑	71				
		古墳時代	竪穴住居跡	2	土師器・石器			
溝	22							

平成10年度熊谷市埋蔵文化財調査報告書

横間栗遺跡

平成11年3月24日 印刷

平成11年3月31日 発行

発行／熊谷市教育委員会

印刷／関印刷株式会社



さくらのまち「越谷」